

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 昭和42年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0000001195">https://doi.org/10.15084/0000001195</a>

昭和 42 年 度

# 国立国語研究所年報

— 19 —

国立国語研究所

1968

## 刊行のことば

本書は、昭和42年度における研究および事業の経過について述べたものである。

42年度に刊行したものは次の通りである。

日本言語地図(3) (報告 30—3)

電子計算機による国語研究 (報告 31)

社会構造と言語との関係についての基礎的研究(1) (報告 32)

国語年鑑(昭和42年版)

昭和43年10月

国立国語研究所長

岩 淵 悦 太 郎

## 目 次

### 刊行のことば

昭和42年度の調査研究のあらまし .....	1
現代語の文法の研究 .....	5
全国方言文法の対比研究 .....	9
現代語の音声の研究 .....	14
語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等—— .....	15
日本言語地図の作成のための研究 .....	18
中学生の言語習得に関する研究——漢字習得—— .....	19
就学前児童の言語能力に関する全国調査 .....	57
言語の表現機能と伝達効果の研究 .....	67
明治時代語の研究 .....	77
言語情報処理に関する基礎的研究 .....	116
社会構造と言語との関係についての基礎的研究 .....	119
現代語の表記法に関する研究 .....	125
電子計算機による語彙調査 .....	131
国語関係文献の調査 .....	135
図書の収集と整理 .....	142
庶務報告 .....	143

## 昭和42年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- |                              |          |
|------------------------------|----------|
| (1) 現代語の文法の研究                | 話しことば研究室 |
| (2) 全国方言文法の対比研究              | 〃        |
| (3) 語の意味用法の記述的研究—動詞・形容詞等—    | 書きことば研究室 |
| (4) 日本言語地図の作成のための研究          | 地方言語研究室  |
| (5) 中学生の言語習得に関する研究—漢字習得—     | 国語教育研究室  |
| (6) 就学前児童の言語能力に関する全国調査       | 〃        |
| (7) 言語の表現機能と伝達効果の研究          | 言語効果研究室  |
| (8) 明治時代語の研究                 | 近代語研究室   |
| (9) 言語情報処理に関する基礎的研究          | 第1資料研究室  |
| (10) 社会構造と言語との関係についての基礎的研究   | 第2資料研究室  |
| (11) 現代語の表記法に関する研究           | 第3資料研究室  |
| (12) 電子計算機による語彙調査            | 言語計量調査室  |
| (13) 国語および国語問題に関する資料・情報の調査研究 |          |
- (1) 現代語の文法の研究……前年度に引き続き「語順の研究」「イントネーション資料集の作成」を進めたほか、さらに、本年度から「現代日本語の文法の記述的研究——動詞の voice 等の研究」に着手した。
- (2) 全国方言文法の対比研究……前年度、地方言語研究室が担当していた研究を引き継いだもので、42年度は、前年度の準備調査を参考にしたうえで、本調査を行なった。
- (3) 語の意味・用法の記述的研究——動詞・形容詞等——……個々の語の意味・用法についてのくわしい記述は前年度で打ち切り、42年度から2～3年の計画で、意味上グループをなす語の体系的な分析、記述にとりかかった。
- (4) 日本言語地図の作成のための研究……「日本言語地図」第3集「人に関

する名詞など」の地図50面を作成した。

- (5) 中学生の言語習得に関する研究——漢字習得——……前年度までに生徒を対象とする調査、学校における漢字学習指導の実態調査が終了したので、その結果の整理・分析にあたった。また、漢字習得の要因をさぐるため、使用教科書（全教科）の漢字提出状況調査に着手した。
- (6) 就学前児童の言語能力に関する全国調査……特別研究として本年度から3年計画で実施する。第1年次は「文字力の調査」で、東京・東北・近畿地方の3ブロック、122の幼稚園に協力を依頼、4歳児、5歳児2,235名を対象にひらがなの読み書きテストを行ない、あわせて幼稚園・家庭に対してアンケート調査を実施、文字習得の要因調査を行なった。
- (7) 言語の表現機能と伝達効果の研究……「言語表現における場面の効果の研究」と「文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究」とに分かれる。前者は、前年度に引き続き、文における主語の役割を調べるための文カードの追加と、主述関係の分析とを行なった。後者は第3年目で、前年度に録音・文字化した年長児の話しことばをカード化し、「幼稚園のことば資料Ⅲ」を作成するとともに、幼児の構文について分析を進めた。
- (8) 明治時代語の研究……本年度は、明治以後の漢語の変遷に関する調査研究を目的として、明治初期の漢語辞書類の索引作成と、ふりがな付き漢字語の用例採集および近代語研究資料の調査を行なった。
- (9) 言語情報処理に関する基礎的研究……前年度の「電子計算機による話しことば資料の分析・処理の研究」を継続したもので、本年度は、テキストの作成、プログラムの開発、データの処理等を行なって、各種語彙表の作成にまで進んだ。
- (10) 社会構造と言語との関係についての基礎的研究……前年度に引き続き、福島県保原地区および茂庭地区について、音韻体系と文法体系の調査を、面接調査と録音資料の分析とによって行なった。また、社会構造と方言語彙との関係をみるために、親族語彙特に同族団関係の語彙を中心に調査した。

- (11) 現代語の表記法に関する研究……「文字使用の実態調査」と「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」とに分かれる。前者は、前年度末の中学生を被験者とする送りがな調査に引き続き、高校生・大学生・公務員・教員等総計約三千人を被験者とする本調査を実施し、完了と同時にその集計作業にはいった。この集計は、電子計算機によって行なうもので、本年度じゅうに集計用プログラムを一部完成し、また、それによるデータ処理を行なった。後者は、本年度からの新規の研究項目で、第一資料研究室と言語計量調査室が実施している新聞語彙調査のうち、漢字および表記の調査研究を行なうものである。本年度は、準備的段階として、電子計算機による処理方法の研究、ならびに、長単位語データによる漢字調査の機械処理システムの設計およびプログラムの作成等を行なった。
- (12) 電子計算機による語彙調査……前年度に引き続き、新聞語彙調査の作業を実施し、1紙朝刊半年分の長単位語データを処理して、五十音順、出典つき語彙表をはじめ、いくつかの語彙表を作成した。また、同じく1紙朝刊半年分のデータについて、短単位語の処理に必要な諸作業を完了した。
- (13) 国語および国語問題に関する資料・情報の調査研究……例年の通り新聞・雑誌・単行本について調査を行ない、『国語年鑑』の資料として整理した。

本年度の研究組織は次の通りである。(昭和42年4月1日現在)

◇第1研究部 部長 大石初太郎

話しことば研究室	上村 幸雄(室長)	鈴木 重幸	
書きことば研究室	西尾 寅弥(室長)	宮島 達夫	
地方言語研究室	野元 菊雄(室長)	徳川 宗賢	加藤 正信
	高田 誠		

◇第2研究部 部長 與水 実

国語教育研究室	芦沢 節(室長)	村石 昭三	根本今朝男
	天野 清	中村 明	
言語効果研究室	高橋 太郎(室長)	大久保 愛	

◇第3研究部 部長 見坊 豪紀

近代語研究室 見坊 豪紀（室長） 飛田 良文

◇第4研究部 部長 林 大

第1資料研究室 林 四郎（室長） 石綿 敏雄 南 不二男  
田中 章夫

第2資料研究室 飯豊 毅一（室長） 渡辺 友左 高田 正治

第3資料研究室 斎賀 秀夫（室長） 土屋 信一 野村 雅夫

言語計量調査室 林 四郎（室長） 斎藤 秀紀 木村 繁



# 現代語の文法の研究

## A 目的・意義

現代日本語の文法を、その個別的な問題の調査分析にもとづいて、文や句や文節の構成など、文法の各分野ごとに組織的に記述することを目指す。

従来、この研究室で扱ってきた話しことば資料（日常談話等および映画シナリオ）による文法研究の継続のものを含むとともに、書きことば資料に関しても調査研究を行ない、また、一部については各地方言の文法との対比的調査研究をも行なう。これらによって、現代東京語（ないしは共通語）を中心とする現代日本語の文法を、重要な個別的問題の調査のうえに、体系的に研究し記述しようとするものであって、いままでの文法研究の手うすな分野を開拓し、国語教育や国語改善などの実践上の問題に対しても寄与するところがあることを期する。

## B 担当者

鈴木重幸が担当し、衛藤蓉子が作業を助けた。

## C 本年度の作業

本年度はつぎのことを行なった。

1. 語順等の研究（第5年度）
2. 現代日本語の文法の記述的研究——動詞の voice 等の研究——（第1年度）
3. イントネーション資料集の印刷

以上のうち、3は前年度に宮地裕がまとめておいたものである。

1. 語順等の研究

映画シナリオの会話文による語順およびそれに関連するシンタクス上の問

題の第5年度として、調査結果の一部を第一次原稿としてまとめた。その目次は次のとおり。

1. 特定の成分に注目した調査

1.1 述語との関係

1.1.1 主語と述語

1.1.2 補語と述語

1.1.3 目的語と述語

1.2 主語との関係

1.2.1 主語と補語

1.2.2 主語と目的語

1.3 補語と目的語

1.4 目的語相互の関係

1.5 連用語との関係

1.5.1 連用語と述語

1.5.2 連用語と主語

1.5.3 連用語と補語

1.5.4 連用語と目的語

1.6 状況語との関係

1.6.1 状況語と述語

1.6.2 状況語と主語

1.6.3 状況語と補語

1.6.4 状況語と目的語

1.6.5 状況語と連用語

2. 特定の特徴に注目した調査

2.1 成分の倒置

2.2 成分のとりたて

2. 現代日本語の文法の記述的研究

これは、今年度にはじめたテーマで、文学作品その他の言語作品を資料と

して、現代日本語の文法の各分野の記述的な研究をめざすものである。まず、動詞の voice およびそれに関連する問題を取りあげ、今年度はその資料カードを作り、その一部（「れる・られる」のついた動詞）の分析にとりかかった。

資料としてえらんだ文は、つぎのような形式をふくむものである。

- (1) 動詞に「れる（られる）」のついた形
- (2) 動詞に「せる（させる）」のついた形
- (3) 動詞に「て ある」のついた形
- (4) 動詞に「て やる（もちう、くれる）」のついた形
- (5) いわゆる可能動詞
- (6) 形のうでで自他の対応のある自動詞と他動詞

資料として用いたカードは、前年度までに用意してあったもの（そのリストは年報16の11ページ、年報17の25ページ、年報18の7ページにある。）と、今年度あらたに作った複製カード（総枚数は約190,000、異なり枚数3,800）である。今年度作った複製カードの作品名は表のとおり。

作品年代	執筆者	作品名	出典	ページ数
1916	河上 肇	貧乏物語	岩波文庫	163
1929	出 隆	哲学以前	新潮文庫	260
1920～1941	三木 清	人生論ノート	〃	141
1934～1951	小林 秀雄	私の人生観	角川文庫	139
1919～1922	阿部 次郎	人格主義	〃	170
1950	笠 信太郎	ものの見方について	〃	185
1937	石原 純	社会事情と科学的精神	現代日本思想 大系25・科学 の思想 I	11
1946	武谷 三男	革命期における思惟の基準	〃	14
1948	湯川 秀樹	物質世界の客観性について	〃	34
1947	坂田 昌一	原子物理学の発展とその方法	〃	16
1936	長岡半太郎	総長就業と廃業	〃	30
1948	渡辺 慧	原子党宣言	〃	6
1961	梅棹 忠夫	高崎山	現代の教養6・ 学問の前線	53
1965	小尾 信弥	宇宙の謎はどこまで解けたか	〃	11

作品年代	執筆者	作 品 名	出 典	ページ数
1964	藤田 信勝	物質の根源と宇宙を結ぶ	現代の教養6・ 学問の前線	33
1965	高瀬 良夫	生命の暗号を解く	〃	31
1965	柴谷 篤弘	生命の謎はどこまで解けたか	〃	12
1964～1965	朝日新聞 学芸部	学問の動き	〃	36
1965	石田英一郎	抵抗の科学	〃	7
1965	藤森 栄一	旧石器の狩人	〃	14
1966	関 つとむ	未知の星を求めて	〃	15
1966	渥美 和彦	人工心臓を体内に	〃	12
1966	桜田 一郎	新しい繊維	〃	9
1966	坂井 利之	文字を読む機械	〃	10

前年度までの複製カードの内容は、文学作品であったが、ことしは、文学作品以外のいわゆる科学説明文、論説文である。なお、この作成は、言語効果研究室と共同で行なった。

### 3. イントネーション資料の印刷

42年度までに宮地裕が行なったイントネーションの研究(年報15～18参照)の成果の一部を「宮崎県都城市方言録音資料」として孔版印刷した。同資料は、録音した都城市方言を音韻表記し、アクセント、イントネーションの記号を付し、さらに標準語訳をつけたものである。

(鈴木, 上村)

# 全国方言文法の対比研究

## A 目的・意義

日本語の方言の文法を、相互に、また、標準語と比較できるかたちで、研究する。そのために、国立国語研究所地方研究員の協力を得て、沖縄をふくむ全国約60の方言について、統一的な方法による調査を行なう。

なお、この研究では、研究の重点を、方言の文法現象のうち、文の述語として用いられる各種形式の形態論的構造の記述におく。

この研究の目的は、方言の文法について、統一的な方法による全国的規模の調査を行なうことによって、今後の、方言および標準語の文法の各種の研究に必要な基礎資料を得ることである。また、得られる資料は、方言地帯における標準語教育を改善するために役立つはずである。

なお、この研究は、地方言語研究室が昭和38年から行なってきた「各地方言の共通語との対照的研究をひきつぐものである。

## B 担 当 者

調査は、つぎにしるす昭和42年度国立国語研究所地方研究員50名および、国立国語研究所員7名、合計57名が行なった。

昭和42年度国立国語研究所地方研究員

担当地域	氏名	所属機関名<職名>
北海道1	石垣 福雄	札幌市東栄中学校<校長>
北海道2	佐藤 誠	札幌大学外国語学部<教授>
青 森	此島 正年	弘前大学教育学部<教授>
岩 手1	小松代 融一	岩手医科大学教養部<教授>
岩 手2	本堂 寛	一関工業高等専門学校<助教授>
秋 田	北条 忠雄	秋田大学教育学部<教授>

担当地域	氏名	所属機関名＜職名＞
△宮城・山形	佐藤 亮 一	聖和学園短期大学＜助教授＞
福 島	渡 辺 義 夫	福島大学教育学部＜講師＞
茨城・千葉	野 林 正 路	千葉大学＜助手＞
栃 木	多々良 鎮 男	宇都宮大学教育学部＜教授＞
群馬・埼玉	外 山 映 次	埼玉大学教育学部＜助教授＞
東京 <sup>1</sup> ・神奈川	後 藤 和 彦	フェリス学院大学＜助教授＞
東京 <sup>2</sup>	大 島 一 郎	東京都立大学人文学部＜助教授＞
新 潟	剣 持 隼一郎	県立柏崎高等学校＜教諭＞
△石 川	岩 井 隆 盛	金沢大学法文学部＜教授＞
△富 山	川 本 栄一郎	金沢大学教育学部＜講師＞
福 井	佐 藤 茂	福井大学教育学部＜教授＞
山 梨	清 水 茂 夫	山梨大学教育学部＜教授＞
長 野	馬 瀬 良 雄	信州大学人文学部＜助教授＞
岐 阜	谷 開 石 雄	岐阜県教育委員会社会教育課＜社会教育主事＞
静 岡	日 野 資 純	静岡大学人文学部＜助教授＞
愛 知	山 田 達 也	名古屋市立大学教養部＜助教授＞
三 重	慶 谷 寿 信	名古屋大学文学部＜助手＞
滋 賀	奥 村 三 雄	岐阜大学教育学部＜助教授＞
京 都	遠 藤 邦 基	京都大学文学部国語学研究室＜大学院生＞
大 阪	土 部 弘	大阪教育大学国語学研究室＜助教授＞
兵 庫 <sup>1</sup>	和 田 実	神戸大学教養部＜助教授＞
奈 良	西 宮 一 民	皇学館大学＜教授＞
和 歌 山	村 内 英 一	和歌山大学教育学部＜教授＞
鳥 取	鏡 味 明 克	岡山大学教育学部＜講師＞
島 根	広 戸 惇	島根大学文理学部＜教授＞
岡 山	虫 明 吉治郎	岡山操山高等学校＜教諭＞
広 島	近 藤 四 郎	県立呉宮原高等学校＜教諭＞
* 山 口	佐 藤 虎 男	呉工業高等専門学校＜講師＞

担当地域	氏名	所属機関名<職名>
香川・徳島 兵庫2	加藤 信昭	徳島大学教育学部<助教授>
愛媛	杉山 正世	新田高等学校<教諭>
高知	土居 重 <sup>*</sup> 俊	高知大学教育学部<教授>
福岡	岡野 信子	県立若松高等学校<教諭>
佐賀	神部 宏泰	熊本女子大学<助教授>
*長崎	西島 宏	長崎大学教育学部<助教授>
	愛宕 八郎康隆	長崎大学教育学部<助教授>
熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部<助教授>
大分	糸井 寛一	大分大学教育学部（助教授）
宮崎	岩本 実 <sup>*</sup>	宮崎大学教育学部（教授）
鹿児島1	上村 孝二	鹿児島大学法文学部（教授）
鹿児島2	寺師 忠夫	
沖縄1	仲宗根 政善	琉球大学法文学部（教授）
沖縄2	外間 守善	和洋女子大学（教授）
沖縄3	大城 健	琉球大学法文学部（助教授）
*沖縄4	比嘉 成子	

（\*印は新任 △印は担当地域の変更）

## 国立国語研究所員

上村幸雄（話しことば研究室）、野元菊雄、徳川宗賢、加藤正信、高田誠（以上地方言語研究室）、宮島達夫（書きことば研究室）、飯豊毅一（第2資料研究室）

研究の全体の運営は、上村幸雄が、地方言語研究室から話しことば研究室へうつって、ひきつづき担当した。これを衛藤蓉子が助けた。

## C 本年度の経過

本年度は、調査I<sup>注1)</sup>の本調査を行なった。各調査者は、昨年度の自分および近県の調査者の調査結果を参考にして、それぞれ本調査を行ない、その

結果を整理票に記入して、これを話しことば研究室に提出した。調査のための調査票は、昨年度のをそのまま使用し、整理票のみ、あたらしくした。また、各調査者が、昨年度の予備調査の結果を交互に利用できるようにするために、昨年度の整理票をコピーして近県の分を各調査者に配布した。

調査Ⅱ<sup>注2)</sup>については、昨年度中に結果のおおよそをまとめたが、今年度それを「＜全国方言文法の対比的研究＞の調査Ⅱに関する中間報告」として謄写印刷にした。

#### 調査地点

つぎのように、若干の追加と変更を行なったほかは、調査地点は、昨年度と同じである。

##### (イ) 調査地点の追加

調査者	地名
川本 栄一郎	富山県富山市五福5286
上村 孝二	鹿児島県薩摩郡上甕村 <sup>カミコシキムラナカゾノ</sup> 中甕
西島 宏	長崎県西彼杵郡 <sup>ソノキ</sup> 時津町 <sup>シシガタ</sup> 子子川
愛宕 八郎康隆	
大城 健	沖縄宮古多良間村 <sup>タラマ</sup> 塩川

##### (ロ) 調査地点の変更

佐藤 亮一	(新地点)	山形県山形市岩波
宮島 達夫	(新地点)	茨城県東茨城郡常北町増井

##### (ハ) 調査者の変更

(新) 比嘉成子 (旧) 上村幸雄 沖縄那覇市首里

##### (ニ) 調査者・調査地点の変更

(新) 佐藤亮一 (旧) 川本栄一郎 (新地点) 宮城県仙台市川内山屋敷

## D 今後の予定

つぎのように、当初の予定を若干変更した。

---

(注1・2) 調査Ⅰ、Ⅱの内容・方法については、年報18 P18以下を参照。



43年度には、41・42年度の調査結果の整理を行なうとともに、調査Ⅰの調査項目の一部に若干の新項目をくわえた調査票をつくって、41、42年度以外の地点で補足的な調査を行なうこととする。そして44年度に、41～43年度の成果をまとめて、報告書をつくることとする。

（上村）

# 現代語の音声の研究

## A 目的・意義

現代日本語音声の音韻論上の個々の問題，および表現的な個々の特徴をあきらかにすることを目的とする。おもに標準語の音声进行分析の対象とするが，比較の必要から，方言や外国語の音声，また，病的異常のある音声も対象とすることがある。

## B 担当者

話しことば研究室の上村幸雄と高田正治の2名が担当した。

## C 本年度の作業

### (1) X線映画による調音運動の研究

種々の音を調音中の音声器官をX線映画にとって，調音運動を研究した。映画の撮影には東京大学医学部音声言語医学研究施設の沢島政行助教授の協力をいただいた。

### (2) アクセントおよびイントネーションの研究

アクセントおよびイントネーションが個々の音節または音節の連続の音響的な性質にたいしてどのような音響的な性質をつけくわえるものであるかを研究した。資料には，一部，東北大学電気通信研究所の比企静夫氏の協力によって作成，計測したものをを用いた。

## D 今後の予定

上の研究は43年度もつづける。

(上村)

# 語の意味・用法の記述的研究

## ——動詞・形容詞等——

### A 目的・意義

現代語の動詞・形容詞等の意味・用法を、言語作品の中で実際に使われた用例によって分析記述するのが目的である。

大量の用例を使うことによって、主観的・一面的な記述に陥ることなく、従来よりもはるかにくわしく、客観的な記述を行なおうとする。これは、将来の辞書編集における語釈方法の基礎資料になるとともに、語の意味・用法の分析・記述の方法論にも寄与しうるのであろう。

### B 担 当 者

動詞は宮島達夫、形容詞等は西尾寅弥が担当し、高木翠が作業を助けた。

### C 本年度の作業

#### I 動詞の分析

一語一語についてのくわしい記述は前年度で打ち切りとし、今年度からは動詞全体の意味用法にわたる体系的な記述を目ざす総論の執筆にかかった。体系的記述の方法としては、いろんな可能性が考えられるが、ここでは、動詞の意味を区別する要素・特徴にどのようなものがあるかをぬきだすことを作業の中心とする計画である。たとえば、「つぐむ」「つぶる」は、開いているものをとざすという点で共通の側面をもっているが、「とざす」「とじる」などがいろんな対象についていえるのにくらべ、「つぐむ」は口に、「つぶる」は目についてしかいえない。つまり、これらの動詞は、対象の面に特徴がある。このことを

つぐむ／つぶるくとざす、とじる

のようにあらわすことにする。動詞の意味用法を区別する特徴には、対象の

ほかに、たとえばつぎのようなものがある。（——は反対の関係にあることをあらわす。）

（主体） さえずる／ほえる／いなくな／なく

（方向） あがる——おりる

（いきおい） ほとばしる／くでる

（ようす） ふきだす／ほほえむ／くわらう

（結果） むらがる／くあつまる

（目的） かくれる／こもる

（評価） かおる／くにおう

これらのうち、一部はすでに移動動作の表現について分析したが、今年度からは、特に移動・変化……などと分野を限定することなく、動詞全体を見わたして問題になるものをとりあげていく。

42年度は、分析の対象にできそうな特徴をひろってリストをつくるとともに、主体・対象を特徴とする動詞について分析した。

## Ⅱ 形容詞などの分析

形容詞などについても、動詞と同じような方法で、総論にとりかかった。たとえば「こだかい」は、「たかい」と比べて高さの尺度上のある部分に制限されるという特徴のほかに、土地の隆起についてしか適用されないという、属性の主体の上の制限もある。性質・状態を表わす語の意味を区別する特徴の各種を、いくつか以下に例示してみよう。（取り上げる語の範囲は、形容詞・形容動詞を中心とするが、情態副詞・連体詞などにも必要に応じて取り上げる。）

（主体） くっきり／明白・明りょう・あきらか <はっきり

（対象） ほしい／のぞましい

（方向） たかい——ひくい／ふかい——あさい

（次元） まっすぐ／たいら、ひらたい

（量・程度の大小） おもい——かるい

（量・程度の著しさ） おびただし／ <おおい

(以前の状態) こなごなくこまかい

(評価) ひろびろ／だだっびろいくひろい

上のような、意味上グループをなす語の間の意味を区別する特徴を予想して取り出す仕事を進めるとともに、これらの特徴を一つ一つ取り上げ、用例カードによって検証しつつ、その特徴について分析・記述する仕事を始めた。

なお、意味特徴を取り出すための手がかりとなることを狙いとして、ある形容詞が他の各種の言語要素と結合するかどうかという性質について若干しらべてみた。

## Ⅱ 用例カードの整理

文学作品の用例カード(41年度の年報を参照)のうち、動詞・形容詞・形容動詞以外の自立語のカード約33万枚も、五十音順配列を本年度に完了した。

## D 今後の予定

43・44年度と、ひきつづいて意味を区別する特徴の分析を中心とする体系的な記述をすすめる予定である。

(西尾)

## 日本言語地図の作成のための研究

地方言語研究室では、昭和40年度以降、6か年計画で日本言語地図の編集と刊行とを行なう。毎年1集50面ずつ、6か年で計6集300面の地図を刊行する計画である。

昭和42年3月には、第2集（動詞その他）が刊行され、同年12月には、大蔵省印刷局から、その売品800部が発刊された。

昭和42年度には、人に関する名詞(など)の地図50面が完成した。作図は、野元菊雄、徳川宗賢、加藤正信、高田誠が分担し、白沢宏枝、芥川豊子、山本文子が協力した。また、非常勤職員W・A・グロータースほか多くの人々の援助を受けた。氏名は、地図第3集の別冊付録「各図の説明」のまえがきに示してある。

別に、作図・編集の業務とは直接関係ないが、42年3月、宇都宮市において、「日本言語地図作成のための調査」によって集められた資料の性格を検証するための調査を行なった。「日本言語地図作成のための調査」では、各調査地点で男の老人1名について、一定の質問によって土地のことばをたずねたが、この調査では、各地点数名以上について、女について、他の年齢層について、別の質問によって調べた場合、どの程度結果が違ってくるものかを、確かめようとした。昭和40年度に高知市で行なった調査と関連する。参加者は、野元菊雄、徳川宗賢、加藤正信、高田誠。調査の内容および結果の詳細については、機会を改めて報告する。

（徳川）

# 中学生の言語習得に関する研究

## ——漢字習得——

### A 目的・意義

中学生が、義務教育過程を終了するまでに、どれくらいの漢字をどのようにして習得するか、中学校3年間にわたり、事例的に、特定個人についての漢字の習得状況を、量的・質的に追跡調査し、中学生の文字習得の可能な量とその習得の過程・要因を推定しようとするものである。

昭和39年度から着手、生徒を対象とする調査は一応終了したので、42年度は、3年間の諸調査の結果の第2次集計整理、分析、および習得要因調査の一環としての調査対象生徒の使用教科書の漢字提出状況調査にあたった。

### B 担 当 者

芦沢節、根本今朝男、中村明(4月から)が担当、川又瑠璃子がこれを助けたが、そのうち、根本今朝男は、事例生徒の習得要因調査資料および、中学校の漢字学習指導の実態に関する調査の整理(別掲2 43ページ参照)を、中村明は事例生徒の使用教科書の漢字提出状況調査を担当、川又瑠璃子は漢字習得調査の集計整理作業に従事した。なお、数名の臨時補助者が、一部の集計作業を助けた。

### C これまでの経過

中学生の漢字習得を研究する方法として、次の諸調査を実施した。

#### I 当用漢字全数音訓(1850字の全音訓)読み書き調査

中学生の漢字力をできるだけ詳しくみるために、事例研究の方法をとり、当用漢字を中心に(表外字にも及ぶ)全数調査を実施し、それを3年間継続し

て追究する。全数調査をたてまえとするため、消却方式をとり、まず昭和39年度入学の時に全数調査を実施し、その後の調査で正しく読み書きができ、習得が安定したと認められた文字は調査対象からはずして、徐々に新しく表外字をさし加えていく方法によった。（国立国語研究所年報16・17・18参照）

### 調査方法

（読み）当用漢字（1850字）全数の読みの力を、当用漢字音訓表で認められている音訓すべてにわたって調べる。（カードによる1対1の個人調査）

（書き）当用漢字全数を、原則として生徒に親近性のある読み方一つを選び、それによって問題を作り、書かせる。ただし、特に問題のある漢字については、音訓表に認められた音と訓にあたってたずねた。（問題用紙記入による集団調査）

### 表外字の読みの調査

生徒が自然に習得する表外字のひろがりを推定するために、約千字ほどの表外字（当研究所調査による「現代雑誌九十種の用語用字（漢字表）」の表外字を中心に他の諸資料から選定）の読みの力をみるもので、その読みと、その文字の習得経路などを記入させる（集団調査）

以上の調査を年間2回（各1学期と3学期末）実施。

### 調査対象

調査の実施協力学校 北区稲付中学校（校長 長谷重幸氏 国語主任 吉村安夫氏 北区教育委員会指導主事 相川正志氏推薦による）

被調査者 昭和39年度新入生8人（男子4、女子4。知能・国語学力等学級で中位のもの）

なお、Ⅰの当用漢字全数音訓読み書き調査（事例調査）を補い助けるため次の諸調査を行なう。

### Ⅱ 漢字習得上の問題点解明のためのテストの実施

特定の対象生徒の全数調査の補いとして、全数調査での問題点や習得の確度を吟味・解明するために、当該学年の中学生（集団）に検証テストを行ない、全数調査の結果の解釈資料、次の調査への修正資料を得る。



2 年時 東京の中学校生徒（稲付中学校，四谷第二中学校，砂町中学校，  
教育大附属中学校，武蔵野第三中学校） 365人

3 年時 東京（稲付中学校・文海中学校） 大阪（箕面第一中学校・箕面第  
二中学校・止々呂美中学校） 名古屋（前津中学校・南陽中学校）  
の中学校生徒 497人

### Ⅲ 漢字習得要因の諸資料の収集と整備

漢字の習得要因資料として，学校側からの提供資料（学校における  
各教科の成績，各種のテスト結果，家庭環境等）や， 研究所での調査  
（知能検査，読書力検査，読書調査など）による資料を整備する。

### Ⅳ 中学校の漢字学習指導の実態に関する質問紙調査を全国的な規模で実 施。

などの諸調査を行なってきた。

その結果，当用漢字全数読み書き調査では，同一の対象生徒に同じ文字を  
音訓全般にわたって継続的に調査するので，習得上の問題点がいろいろ出  
た。調査第1年度から，読みにおける音訓の難易とその習得の不均衡の問題，  
小学校での学習が中心の教育漢字における読めない音訓の問題，書きに  
おける，教育漢字の小学校の中・高学年用の文字の習得不振の問題などがあり，  
一方，表外字の読みは，生徒に関係のある文字はかなり接近度が高く，  
読める字のあることなどが見られ，それらの問題点を追究するために行なっ  
た集団調査の結果でも同様の傾向が認められた。しかもこの問題は学年が進  
むにつれて，発達をともしないながらも，3年を終えるまで存続している。

## C 本年度の作業

### 1 中学生の漢字習得に関する研究

本年度は，この研究の第4年めにあたる。生徒を対象とする調査は一応終  
えたので，従来の諸調査の結果をまとめるための集計整理，分析作業および  
習得の要因として関係の深い漢字の指導面，漢字学習と密接な関係のある，  
使用教科書の漢字提出状況調査などにあたった。

## 計画と実施

### A I 当用漢字全数音訓読み書き調査による中学生の漢字習得の概観と考察

#### II 漢字習得上の問題点の解明

I の調査結果から得た漢字習得上の問題点の解明のために、(1)教育漢字の読み (2)教育外当用漢字の読み (3)表外字の読み (4)教育漢字の書き (5)教育外当用漢字の書き (6)読みに抵抗のある特殊な音の読み (7)抵抗のある訓読みと語の意味把握(読みと意味把握の関係) (8)漢字の学習の実態と意識・意見

などの調査を実施したが、その整理・分析と考察を加える。

### B 漢字習得の要因調査とその整理

#### I 事例生徒の漢字の習得要因資料の整理・分析

(1) 読書調査(一般の単行本、雑誌、学習参考書、新聞、テレビ、映画)の結果の中間的まとめ

(2) 研究所の調査に対する8人の生徒の3年間の感想・意見等を中心とした録音資料(1人約15分)の文字化。

#### II 学習指導の実際についての情報の収集と分析

事例生徒の担当教員から3年間の指導の実際についての報告を受け、整理する。

#### III 使用教科書の漢字提出状況調査

教科書の漢字提出調査は各所で行なわれるようになったが、ここでは、被調査者の漢字習得要因という観点から整理する。

なお、国語の教科書のみでなく、漢字習得と関係の深い他教科の教科書も調査する。

##### (1) 国語の教科書(1～3年) 3冊

教育漢字(読み書きともに被調査者の正答率の高いものは省く)、教育外当用漢字、表外字の各漢字、各音訓、各提出語形の学年別頻度。

##### (2) 他教科の教科書(1～3年) 29冊

教育外当用漢字、表外字の各漢字、各音訓、各提出語形の教科別、

初出学年。

これらの作業は、採集・整理続行中。

### C 中学校の漢字学習指導の実態に関する調査

この調査は41年度に実施、結果を、一応、中間報告としてまとめた。

「中学校の漢字学習指導の実態に関する質問紙調査」（別掲）

結果のあらまし

全体のまとめ（報告書作成）のための諸調査の集計・整理・分析等の作業は、進行中であるので、これらの作業を進めている過程で、とりあげたい習得上の問題点を一・二掲げておく。

前述のように、1～3年にわたり、6回（年間2回）の当用漢字全数音訓読み書き調査を実施した結果を、数量的にみると、次のようになる。

（以下1部、前年度報告と重複するが、後の考察、説明のために重ねて掲げる。

なお、第1表～第3表の結果の数字に、従来発表のものと、多少の異同があるが、報告書作成のために、6回の調査結果を整理した際に訂正されたものである。また、表外字の第6回調査結果は、数字としてみると第5回より多少正答数は減少するかに見えるが、質的には発達現象が認められる）

(第1表) 当用漢字全数読み書き調査結果 (付表外字読み) 1・3・6回

字 種 読み・書き 調査時	教 育 漢 字 (881字)						教 育 外 当 用 漢 字 (969字)						表 外 字		
	読 み			書 き			読 み			書 き			読	み	
	第1回 (入学時)	第3回 (2年 前期)	第6回 (4年 終了時)	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回	第1回	第3回	第6回			
正答 100%の漢字	813字 (92.2%)	877 (99.5)	881 (100)	355 (40.3)	581 (65.9)	771 (87.5)	193 (19.9)	547 (56.5)	863 (89.1)	17 (1.8)	67 (6.9)	205 (21.2)	* 16 (16.2)	31 (9.6)	** 46 (4.6)
87.5%	56 (6.4)	4 (0.5)		159 (18.0)	140 (15.9)	74 (8.4)	120 (12.4)	130 (13.4)	51 (5.3)	22 (2.3)	59 (6.1)	146 (15.1)	10 (10.1)	39 (12.1)	62 (6.2)
75.0%	9 (1.0)	0 (0)		118 (13.4)	92 (10.4)	23 (2.6)	112 (11.6)	80 (8.3)	23 (2.4)	29 (3.0)	65 (6.7)	157 (16.2)	7 (7.1)	26 (8.1)	70 (7.0)
62.5%	3 (0.3)			75 (8.5)	30 (3.4)	9 (1.0)	80 (8.3)	54 (5.6)	13 (1.3)	34 (3.5)	71 (7.3)	130 (13.4)	11 (11.1)	26 (8.1)	69 (6.9)
50.0%				73 (8.3)	24 (2.7)	4 (0.5)	90 (9.3)	42 (4.3)	8 (0.8)	53 (5.5)	82 (8.5)	112 (11.6)	10 (10.1)	37 (11.5)	82 (8.2)
37.5%				53 (6.0)	10 (1.1)		87 (9.0)	24 (2.5)	5 (0.5)	64 (6.6)	118 (12.2)	79 (8.2)	5 (5.1)	21 (6.5)	107 (10.7)
25.0%				30 (3.4)	3 (0.3)		76 (7.8)	25 (2.6)	5 (0.5)	91 (9.4)	124 (12.8)	64 (6.6)	7 (7.1)	28 (8.7)	88 (8.8)
12.5%				15 (1.7)	1 (0.1)		83 (8.6)	36 (3.7)	1 (0.1)	149 (15.4)	148 (15.3)	55 (5.7)	8 (8.1)	44 (13.7)	158 (15.8)
0%				3 (0.3)	0 (0)		128 (13.2)	31 (3.2)	0 (0)	510 (52.6)	235 (24.3)	21 (2.2)	25 (25.3)	70 (21.7)	317 (31.7)

\* 表外字の第1回調査文字数は100字であるが、印刷上のミスから、印刷上のミスから、実際は99字について整理してある。

\*\* 調査文字数は1,000字であるが、印刷上のミスから、実際は999字について整理してある。



(第3表) 教育漢字全数 (881字) 音訓読み書き調査結果

	教 育 漢 字 (881字)									
	読 み 完 了			書 き 完 了			読 み 書 き と も に 完 了			
	2回目 (1年後期)	3回目 (2年前期)	6回目 3年終了時)	2回目	3回目	6回目	2回目	3回目	6回目	
男										
K・M	766 (86.9)	799 (90.7)	861 (97.7)	831 (94.3)	859 (97.5)	880 (99.9)	726 (82.4)	782 (88.8)	860 (97.6)	
N・T	617 (70.0)	739 (83.9)	853 (96.8)	633 (71.9)	699 (79.3)	829 (94.1)	466 (52.9)	595 (67.5)	805 (91.4)	
M・M	654 (74.2)	769 (87.3)	836 (94.9)	778 (88.3)	833 (94.6)	877 (99.5)	584 (66.3)	730 (82.9)	832 (94.4)	
M・N	694 (78.8)	771 (87.5)	843 (95.7)	603 (68.4)	685 (77.8)	813 (92.3)	485 (55.1)	613 (69.6)	783 (88.9)	
女										
K・E	579 (65.7)	692 (78.5)	836 (94.9)	722 (82.0)	783 (88.9)	870 (98.8)	501 (56.9)	620 (70.4)	825 (93.6)	
K・I	458 (52.0)	620 (70.4)	761 (86.4)	545 (61.9)	640 (72.6)	844 (95.8)	309 (35.1)	462 (52.4)	730 (82.9)	
K・R	463 (52.6)	572 (64.9)	769 (87.3)	488 (55.4)	616 (69.9)	816 (92.6)	272 (30.9)	406 (46.1)	711 (80.7)	
F・K	638 (72.4)	710 (80.6)	801 (90.9)	674 (76.5)	770 (87.4)	852 (96.7)	496 (56.3)	627 (71.2)	777 (88.2)	

教 育 漢 字 (881字)										
		読 み 完 了			書 き 完 了			読 み 書 き と も に 完 了		
		2 回 目 (1 年後期)	3 回 目 (2 年前期)	6 回 目 (3 年 終 了 時)	2 回 目	3 回 目	6 回 目	2 回 目	3 回 目	6 回 目
男	子 平 均	682.3 (77.4)	769.5 (87.3)	848.3 (96.3)	711.3 (80.7)	769.0 (87.3)	849.8 (96.5)	565.3 (64.2)	680.0 (77.2)	820.0 (93.1)
女	子 平 均	534.5 (60.7)	648.5 (73.6)	791.8 (89.9)	607.3 (68.9)	702.3 (79.7)	845.5 (96.0)	394.5 (44.8)	528.8 (60.0)	760.8 (86.4)
男	女 子 平 均	608.6 (69.1)	709.0 (80.5)	820.0 (93.1)	659.3 (74.8)	735.6 (83.5)	847.6 (96.2)	479.9 (54.5)	604.4 (68.6)	790.4 (89.7)

第 4 表

	男子 K・N		N・T		M・M		K・N		女子 K・E		K・I		K・R		F・K	
	読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き	読み	書き
入 学 時 結 果	880	843	875	689	877	802	880	646	879	756	842	600	853	524	879	702
卒 業 時 結 果	881	881	881	851	881	878	881	840	881	874	881	862	881	837	881	862
残 っ た 文 字 数	0	0	0	30	0	3	0	41	0	7	0	19	0	44	0	19
習得完了という観点で整理した場合の残った文字数	20	1	28	52	45	4	38	68	45	11	120	37	112	65	80	29

第1表は、教育漢字・教育外当用漢字・表外字が、第1回（入学時）、第3回（2年1学期）、第6回（3年卒業時）の調査時では、どの程度読み書きできるかをみたもの、第2表は、それを個人別にみたものである。第1表で読めた（正答）というのは、従来の漢字調査の結果と比較するために、1字のもつ音訓をすべてつくして読めたという数でなく、音訓のすべてにわたって読めたものはもちろん、音訓どちらか読めたものも入れた数字であり、当用漢字を読み書きする力は、このように従来の調査・整理方法でみると、中学の卒業時までには、相当数の習得が認められる。しかし、音訓表に認められる音訓にわたって、その文字が、どのように読めるか、書く力との関係からみるとどうか、さらに、完全に習得したと認めうる文字という立場（2回続けて正答できたものは習得が定着したとみなす）からではどうかなど、厳密に教育漢字の習得状況を調べてみたのが、第3表である。第3年度は、読み書きともに進歩して、習得ののびがあり、第1・2年度のように、第1・2表との差が開いてはいないが、しかし、習得しきれなかったものを残していることがわかる。第4表のように整理してみると、どのくらい未習得文字が残るか、読みにおける音・訓の難易の問題が、判然とするであろう。

#### 読みにおける問題点

第1・2表でみたように、従来の調査結果のように、1字の持つ音訓どちらかで読めた場合という観点からでは、教育漢字はもちろん、教育外当用漢字も、中学卒業時までにはかなり読めるようになったといえるが、これを、音訓表にてらして音訓をつくして読めている、なお、2回続けて正答できた——習得完了という立場でみると、読める漢字の数は減少する。中学卒業時の調査結果では、次のようになる。

#### 教育漢字

従来の方法によると、全員、どちらかの読み方では881字読めるが、音訓をつくして習得完了という観点からでは、全員そろっては正答できなかった文字が165字もある。このうち、半数（4人）以上のものが読めなかった例

（1年用漢字） 下<sub>レ</sub> 川<sub>ニ</sub> （2年用） 行<sub>フ</sub> 字<sub>ヲ</sub> タ<sub>キ</sub> 切<sub>テ</sub> 天<sub>ヲ</sub>



(3 年用) 遠<sup>ト</sup> 回<sup>ニ</sup> 期<sup>ヲ</sup> 仕<sup>ツ</sup> 社<sup>ヤ</sup> 坂<sup>シ</sup> 面<sup>ホ</sup> 由<sup>ト</sup> (4 年用) 機<sup>キ</sup>  
 業<sup>ヲ</sup> 結<sup>ツ</sup> 拾<sup>シ</sup> 緑<sup>リ</sup> (5 年用) 因<sup>ヨ</sup> 解<sup>ケ</sup> 各<sup>オ</sup> 久<sup>ク</sup> 経<sup>ヒ</sup> 功<sup>コ</sup> 興<sup>キ</sup>  
 殺<sup>イ</sup> 蚕<sup>サ</sup> 承<sup>ウ</sup> 政<sup>マ</sup> 精<sup>シ</sup> 織<sup>シ</sup> 省<sup>カ</sup> 説<sup>イ</sup> 貸<sup>イ</sup> 統<sup>ス</sup> 報<sup>ハ</sup> (6 年用)  
 眼<sup>メ</sup> 基<sup>モ</sup> 己<sup>キ</sup> 供<sup>ソ</sup> 権<sup>ケン</sup> 災<sup>ワ</sup> 採<sup>サイ</sup> 衆<sup>シュ</sup> 授<sup>サ</sup> 宗<sup>ソ</sup> 舌<sup>ゼ</sup> 退<sup>タイ</sup> 難<sup>カ</sup>  
 否<sup>イ</sup> 奮<sup>フ</sup> 暴<sup>バ</sup>

これらの字は、二つ以上の読みかたをもっており、ここに示された音訓以外の読みかたでは 100 パーセント読めている文字である。教育漢字は小学校の段階で提出され、一応読めるようになることが要請され、期待されているにもかかわらず、義務教育終了時においても、実はこのように読めない音訓を残していることがわかる。

しかし、これによって、いちがいに生徒の習得能力の低下、学習指導法の不備を言えない面がある。これらの文字の読みかた・ことばは、現在の社会生活や生徒の生活に親しみが薄い。「現代雑誌九十種の用語用字（漢字表）」によってその使われ方をみると、

例	文字使用度	その読み方での使用度	用例
川 (480)	→	セ (5)	河川・二川・川柳 (3 種)
天 (272)		あ (0)	<あま(1) 天くだり>
回 (409)		ニ (0)	
坂 (93)		シ (0)	
由 (239)		ト (10)	由 (1)
久 (153)		ク (0)	
経 (390)		ヒ (15)	経る (1)
功 (60)		コ (0)	
己 (33)		キ (1)	知己 (1)
眼 (272)		メ (2)	眼 (1)

殺 (157)	サイ (3)	滅殺・相殺 (2)
衆 (105)	シ (3)	衆生 (1)
省 (135)	かりる (1) えみ	省みる (1)
統 (128)	す (0)	
難 (143)	かい (31) た	難い・有難・有難い (3) (17) (13)

その文字としての使用度はかなりあるが、ここにあげられた音なり訓なりでは、使用度が至って低い。現在の社会生活ではあまり用いられていない音・訓ということになる。また、学校教育で、学習する立場から、使用の国語教科書を見ると、

漢 字	小 学 校	中 学 校			
	1～6年	1～3年	1 年	2 年	3 年
1年用 下 <sub>シ</sub>	0	0			
川 <sub>カハ</sub>	0	2			②河川
2年用 行 <sub>ユク</sub>	0	0			
夕 <sub>タタ</sub>	0	0			
切 <sub>キ</sub>	0	0			②天
天 <sub>テン</sub>	0	天 <sub>テン</sub> 4 あま (12)		①天の川 ②天野	②天の 香具山
3年用 遠 <sub>トホ</sub>	0	1			⑨天の川
回 <sub>ヘ</sub>	0	0			①遠国
期 <sub>キ</sub>	0	0			
仕 <sub>シ</sub>	0	9	③	①	⑤
社 <sub>シャ</sub>	0	0			
坂 <sub>サカ</sub>	0	0			
由 <sub>ユ</sub>	0	2		②	
4年用 機 <sub>キ</sub>	0	0			
業 <sub>ギョウ</sub>	0	1			①業つくば り
結 <sub>キツ</sub>	0	0			

漢 字	小 学 校	中 学 校			
	1～6年	1～3年	1 年	2 年	3 年
5 年用	拾 <sup>シユ</sup>	0	7		①收拾 ⑥宇治拾遺
	緑 <sup>ロ</sup>	0	0		
	因 <sup>ミ</sup>	0	0		
	解 <sup>ゲ</sup>	0	0		
	久 <sup>キウ</sup>	0	0		
	久 <sup>ク</sup>	0	4	①人名 大久保	③大久保
	功 <sup>ク</sup>	0	0		
	殺 <sup>サイ</sup>	0	0		
	承 <sup>ウケ</sup>	0	4		④
	政 <sup>セイ</sup>	0	0		
	精 <sup>セイ</sup>	0	0		
	織 <sup>オリ</sup>	0	0		
	省 <sup>セイ</sup>	0	0		
	説 <sup>ゼイ</sup>	0	0		
6 年用	統 <sup>トウ</sup>	0	0		
	報 <sup>ホウ</sup>	0	3	①	②
	眼 <sup>ガン</sup>	0	0		
	基 <sup>キ</sup>	0	4		④
	己 <sup>キ</sup>	0	4		④知己
	供 <sup>コウ</sup>	0	7	④節供 ③供日 ④供える ①供え物	①供える
	権 <sup>ケン</sup>	0	1		①権二 人名
	災 <sup>サイ</sup>	0	0		
	衆 <sup>シュ</sup>	0	0		
	宗 <sup>シュ</sup>	0	0		
	舌 <sup>ゼツ</sup>	0	0		

漢 字	小 学 校	中 学 校			
	1～6年	1～3年	1 年	2 年	3 年
難 <sup>か</sup>	0	0			
否 <sup>な</sup>	0	2			②
暴 <sup>ばう</sup>	0	2			②暴露

(註) ○内の数字は使用回数を示す。語はその提出語形。

小学校6年間、中学校3年間を通じて、提出回数0か、きわめて低い使用率かであることがわかる。したがって、その文字のある読みには習熟できて、他の読みかたでは、読めない、あるいは誤読するということになる。

ここでとりあげた小学校の教科書は、事例生徒のうち、あるものが、小学校で使用した教科書1種についてみたものである。8人の生徒の出身小学校は5校あり、それぞれ使用教科書が異なる。各自が、小学校時代どのような、学習文字歴を持って中学に入学したかを調べる必要を感じ、43年度は、小学校での国語の使用教科書の漢字提出状況も調べることにしたが、それに先立って、一社にのみ試みたものである。

#### 教育外当用漢字

教育外当用漢字は、中学校になってから学習するのがたてまえであるが、中学校卒業時まで、その音訓はどれくらい読めるか。中学校卒業時の調査結果では、8人が音訓どちらかでは読めた文字は863字あったが、8人全員が、音訓をつくしては読めなかった文字は260字ある。

このうち、半数(4人)以上のものが読めなかったもの(音・訓)をあげると、次のようである。

(正答者数)

0人 充<sup>ちゅう</sup> 嬭<sup>な</sup>

1人 窮<sup>きう</sup> 旨<sup>し</sup> 賜<sup>み</sup> 勺<sup>しやう</sup> 刃<sup>じん</sup> 穂<sup>ほ</sup> 操<sup>み</sup> 帛<sup>とどろ</sup>

2人 謁<sup>マ</sup> 虞<sup>おれ</sup> 款<sup>シ</sup> 泣<sup>ヤ</sup> 弦<sup>ツ</sup> 執<sup>ミ</sup> 洩<sup>ジ</sup> 遵<sup>シ</sup> 嫡<sup>チ</sup> 苗<sup>ボ</sup> 憤<sup>い</sup> 浦<sup>ホ</sup>

芳<sup>かん</sup>  
香<sup>けい</sup>

3人 寡<sup>カ</sup> 忌<sup>ミ</sup> 既<sup>す</sup> 契<sup>ち</sup> 御<sup>ゴ</sup> 碎<sup>サ</sup> 璽<sup>シ</sup> 緒<sup>お</sup> 井<sup>イ</sup> 請<sup>シ</sup> 昔<sup>キ</sup> 遷<sup>シ</sup>

憎<sup>ミ</sup> 衷<sup>チ</sup> 尼<sup>ニ</sup> 被<sup>こ</sup> 払<sup>ハ</sup> 募<sup>モ</sup> 奔<sup>ホ</sup> 免<sup>ま</sup> 謫<sup>う</sup> 陵<sup>み</sup>

4人 翁<sup>オ</sup> 轄<sup>カ</sup> 飢<sup>キ</sup> 朽<sup>く</sup> 虚<sup>コ</sup> 繭<sup>シ</sup> 絞<sup>し</sup> 綱<sup>コ</sup> 施<sup>セ</sup> 爾<sup>ニ</sup> 尽<sup>シ</sup> 醉<sup>サイ</sup>

惜<sup>キ</sup> 喪<sup>サ</sup> 朕<sup>チ</sup> 摘<sup>チ</sup> 匿<sup>ニ</sup> 敷<sup>フ</sup> 紛<sup>マ</sup> 冒<sup>お</sup> 窳<sup>サ</sup> 涙<sup>イ</sup> 賄<sup>フ</sup>

これらのうち、雑誌九十種の用語用字調査で、使用度数8度以下のものは、翁虞轄款飢朽繭弦賜璽勻遵嫡遷喪嫡衷弔尼奔窳賄陵 などであるが、9度以上のものでも教育漢字に比べると、使用度も低く、ことに読めない音訓は使用度がきわめて少ない。

全体使用度数 この読みの使用度数

窮 (15) → 泣(64) 洩(35) 契(31) 昔(98) 刃(17) 執(32) 被(71) 払(101) 募(22) 惜(32) 敷(60) 冒(17) 穂(38) 紛(11) 充(79) 操(47) 涙(46) 虚(26) 忌(15) 緒(87) 井(292) 免(39)

また、生徒の使用した国語教科書(中学校)でも、次のように

字 漢	1～3年 提 出 数	1 年	2 年	3 年	漢 字	1～3 年	1 年	2 年	3 年
充 <sup>キ</sup>	0			①	旨 <sup>シ</sup>	0			
婿 <sup>キ</sup>				付① 女婿	賜 <sup>ミ</sup>	0			
窮 <sup>キ</sup>				付①	勻 <sup>シ</sup>		付①二 合三勻		付① 一勻

漢 字	1 3年	1 年	2 年	3 年	漢 字	1 3年	1 年	2 年	3 年
穂 <sup>ホ</sup>	0				募 <sup>モ</sup>	2			①吹き募 る
操 <sup>ホ</sup>				付①	奔 <sup>ホ</sup>				①募る 付①奔走
弔 <sup>ホ</sup>	0				免 <sup>ホ</sup>	0			
虞 <sup>ホ</sup>				付①	謡 <sup>ホ</sup>	3			②謡 <sup>ホ</sup> ①地謡座
款 <sup>ホ</sup>				付①借款	陵 <sup>ホ</sup>				付①
泣 <sup>ホ</sup>	0				翁 <sup>ホ</sup>				付①老翁
弦 <sup>ホ</sup>	0				轄 <sup>ホ</sup>				付①管轄
執 <sup>ホ</sup>				付①	飢 <sup>ホ</sup>	0			
洩 <sup>ホ</sup>	0				朽 <sup>ホ</sup>	1			①薄朽葉 <sup>ホ</sup>
遵 <sup>ホ</sup>				付①遵法	虚 <sup>ホ</sup>	0			
嫡 <sup>ホ</sup>	0				繭 <sup>ホ</sup>	0			
苗 <sup>ホ</sup>				付①種苗	絞 <sup>ホ</sup>				付①
寡 <sup>ホ</sup>			付①寡黙	付①寡少	綱 <sup>ホ</sup>	0			
忌 <sup>ホ</sup>				付①	施 <sup>ホ</sup>	1			①布施
既 <sup>ホ</sup>			付①	付①	肅 <sup>ホ</sup>	0			
契 <sup>ホ</sup>				付①	尽 <sup>ホ</sup>	0			
御 <sup>ホ</sup>	15	⑨渡御 ③御者		②御意 ①御歌 付①粉碎 付①玉璽	醉 <sup>ホ</sup>				付①麻醉 付①陶醉
碎 <sup>ホ</sup>				付①粉碎	惜 <sup>ホ</sup>	1			①惜春 付①喪失
璽 <sup>ホ</sup>				付①玉璽	喪 <sup>ホ</sup>			付①喪祭 付①喪失	付①喪失
緒 <sup>ホ</sup>				付①	朕 <sup>ホ</sup>				付①朕
井 <sup>ホ</sup>	0				疚 <sup>ホ</sup>	2		①敷役 ①敷役す る	
請 <sup>ホ</sup>	5	③		②	紛 <sup>ホ</sup>	4			①言い紛 らわす ②紛れる ①紛らわ しい ⑤
昔 <sup>ホ</sup>	0				冒 <sup>ホ</sup>	5			
遷 <sup>ホ</sup>	1			①変遷	窯 <sup>ホ</sup>			付①窯業	付①窯業
憎 <sup>ホ</sup>	0				涙 <sup>ホ</sup>	0			
衷 <sup>ホ</sup>				付①衷心	賄 <sup>ホ</sup>				付①収賄
尼 <sup>ホ</sup>	0								
被 <sup>ホ</sup>	2			②被					
払 <sup>ホ</sup>	0								

○内の数字は、提出回数を示す。付は、巻末の付録、漢字一覧表を指す。

本文での提出（新出漢字として）は、きわめてまれで、付録の一覧表に掲載されている程度であり、中学3年間を通して、未提出文字、未提出音訓が相当あることがわかる。

なお、この他に、他教科の教科書に提出される文字によって、当用漢字および表外字が習得されることはいうまでもなく、表外字の習得の例（年報18参照）もある。

このように、漢字習得と使用教科書の漢字提出との関係は非常に密接であることが認められる。このたびの教科書の漢字提出調査では、他教科の使用教科書にもすべてにわたっているので、整理が終了すれば、これらの関係はさらに、詳しく具体的にわかるはずである。

教育漢字も含めて、この未提出音訓・提出度の低い音訓の読みの力が、時に、漢字力の低下——読めない漢字——という現象や一般評価とつながる場合が多いようである。使用度が低い、国語科で学習されないからできないのは当然ともいえようが、学習されないままに、義務教育が終るということ、これらの読みの力が、どこで正しく得られるかということが今後の問題として残る。（社会では、当用漢字であるから当然読めるものとして、新聞をはじめ、雑誌、一般読みものでも、ルビなしで扱っていることが多い）

また、使用度が少ない音訓、特殊な音訓のうちにも、古典学習や伝統的なことばの知識や習得のために必要なものもあろう。国語教育の立場から、基本的に必要な学習語彙を考えると、それとの対応で漢字の系統的な提出及び学習の検討が要望される。

#### 漢字の読みと意味把握

字訓と字義とは、同一であるとはいいがたいが、字訓は字義の定着したものととして関係があり、意味把握、ひいては、漢字習得の大切な手がかりとなるものである。中学生の漢字調査を実施してみると、訓が読めなくても、音では読めるという現象が相当ある（反対の場合も、もちろんある）。そしてこのことは、その訓のことばとしての親近性に関連する問題であることは、上來みてきたとおりである。

そこで、漢字の訓の読みと、意味把握の関係についての調査を、中学2年生の集団調査で試みたところ、読みに抵抗のある訓は、意味把握もあいまいで、低いことがたしかめられた。(年報17参照)

同様の目的から、語彙力の増大するはずの3年生について調べた(問題7 P33参照)ところ、次のような結果を得た。

問題7では、3年前期までに訓の読みに抵抗のあったものを教育漢字から、10語(ついやす<費>・きそう<競>・となえる<唱>・むくいる<報>・すべる<統>・うけたまわる<承>・かえりみる<省>・しりぞく<退>・もうける<設>・さからう<逆>)、教育外当用漢字から10語(つのる<募>・けがす<汚>・ほどこす<施>・たわむれる<戯>・まどう<惑>・いきどおる<憤>・わずらわしい<煩>・あなどる<侮>・つぐなう<償>・まぬかれる<免>)計20語をえらび、それについて、

- (イ) 意味の書けるものは意味を書く(使用例がわかったら使用例も書く)
- (ロ) 意味が書けない場合は、どういう時に使うか、または使用例を書く。
- (ハ) なんとなく意味はわかるが、うまく言えない場合は○印
- (ニ) どういう意味かわからない場合は×印

の4通りに反応をさせた。このうち、(ハ)(ニ)に反応したものは次のようである。(ハ)に反応したもののの中には、同時に使用例などをあげているものもあって、(ロ)と重複するものも多少あるが、統べる、募る、憤る、侮るなどは、(ニ)の反応が多く、総じて、(ハ)(ニ)の反応の多いものは、読みの結果も不振である。

3年生	(1) ついやす 〈費〉	(2) きそう 〈競〉	(3) となえる 〈唱〉	(4) むくいる 〈報〉	(5) すべる 〈統〉					
計497人	21.5	3.6	14.9	0.8	36.8	9.3	47.7	12.5	21.1	54.9
2年生			4.6	3.5	27.8	8.3			23.7	49.5
計369人										
3年生	(6) うけたま わる〈承〉	(7) かえりみ る〈省〉	(8) しりぞく 〈退〉	(9) もうける 〈設〉	(10) さからう 〈逆〉					
計497人	21.9	4.4	20.1	10.9	21.7	2.4	22.7	2.4	14.1	1.2
2年生	14.8	5.2	15.1	15.1			16.4	2.9		
計369人										



	(一) (1) つのる 〈募〉		(2) けがす 〈汚〉		(3) ほどこす 〈施〉		(4) たわむれ る〈戯〉		(5) まどう 〈惑〉	
3年生	23.9	28.4	24.1	6.2	38.2	10.5	31.2	9.7	23.9	12.3
2年生	22.4	30.5	13.5	13.7	30.7	19.9	23.2	12.4		
	(6) いきどお る〈憤〉		(7) わずらわ しい〈煩〉		(8) あなどる 〈侮〉		(9) つぐなう 〈償〉		(10) まぬかれ る〈免〉	
3年生	20.7	48.1	25.2	15.3	18.7	40.6	29.8	1.4	29.6	8.0
2年生										

同時に実施した読みの調査結果と対照してみると、両者の関係がわかる。

#### 読みの正答率（調査したもののみ）

	一 (1)費やす	(2)競う	(3)唱える	(4)報いる	(5)統べる	(6)承る	(7)省みる
3年生 497人	78.3%		61.2	65.6	10.1	43.1	49.5
2年生 365		58.5	49.1		8.1	27.9	39.3
	(8)退く	(9)設ける	(10)逆らう	二 (1)募る	(2)汚す	(3)施す	(4)戯れる
3年生	63.0			24.7	22.9	57.9	50.1
2年生	59.1	64.7	53.4	12.3	4.3	15.7	24.4
	(5)感う	(6)憤る	(7)煩わしい	(8)侮る			
3年生	30.8	14.1	20.7	16.7			
2年生		4.9		4.1			

(イ)(ロ)に反応したものは、語の意味の把握度が、(ハ)(ニ)に反応したものよりもたしかであるわけだが、(イ)(ロ)に反応したものがすべて正しく意味を把握し、正しく使えるかというと必ずしもそうでないものがある。個別的に読みと意

味の関係をみると、読み正答＝意味（定義または使用例など）正答、読み誤答（無答）＝意味誤答が一般だが、このほかに、読み正答≠意味誤答、読み誤答（無答）≠意味正答という場合もある。

# 例

募る		憤る	
読みの反応	意味(定義又は使用例)	読みの反応	意味(定義又は使用例)
正答○	○寄付をつのる	正答○	○あの人の態度に憤りを感じた
無答N	○募集する	正答○	○憤慨する
正答○	×借金をつのる	誤答 (おこる)	○憤まん
無答N	×つるの話がある	正答○	×事件が憤る
誤答× (あつまる)	×お金がつる	誤答× (ふん)	×いきいきとした。いきどおる人間。
誤答× (もとめる)	×名のりでる。 社員の募集	無答N	×つまる まっすぐいくと いきどおる
正答○	×雪がつる	無答N	×はりきる。君はいきどおっている。

2年の同種の調査では、「募る」、「憤る」とともに正答者が少なく、正答の種類範囲も狭く乏しく、「募る」はそのほとんどが「募集」、「憤る」は「おこる」が大半であった。3年の調査では、「募る」→「寄付をつのる」を筆頭に、人員をつのる、希望者をつのる、有志をつのる、会員をつのる、論文をつのる、つるの思い、うらみがつるなど、募集・募金・応募・公募などの熟語とともに、使用例の範囲が拡大してきたことが目立つ。語彙の拡大に伴って「つるの思い」の慣用句にひかれた「つまる思い」「思いがつる」的な誤りも現われてくる。(2年では、「つる」という訓を使っでの使用例はほとんど出ず、募の音をとった熟語の形「募集」が多かった。「統べる」は3年でもこの傾向が強く、「統一・統治・統率」と熟語と関連させて理解している。したがって、「すべる」の読みの正答率も低い)

「募る」の語彙理解は2年より3年になって一段と発達したとみられるが、そのわりには「つる」の読みの力はさほどのびていない。募の訓「つ

のる」は、あるいは、3年のこうした時期に学習する方が、効果的であり、習得度も高まるのではなからうか。

読みと意味・用法の関係をみると次のようであった。

読み・意味 用法	(一) (5)統べる	(6)承る	(7)省みる	(二) (1)募る	(2)汚す	(3)戯れる	(6)憤る	(8)侮る
正答・正答	6.4%	35.8	40.2	19.7	20.1	30.0	8.0	10.5
誤答・正答	8.5	14.7	13.7	9.9	51.1	9.3	6.0	12.1
無答・正答	12.3	21.5	9.9	19.7	3.6	12.1	6.4	13.1
意味用法正 答者	27.2	72.0	63.8	49.3	74.8	51.3	20.5	35.6

書く上での問題点

習得上、書くことの上でも、いくつかの問題点があるが、そのうち、一考を要することがある。

教育漢字を書く力

教育漢字を書くことは、「義務教育終了までに当用漢字別表の漢字を使いこなすこと」（中学校3年、書くこと——中学校学習指導要領——）と、要請されているが、漢字習得力が、総体的にあると思われる、8人の調査の結果でも、中学卒業時で、なお、次のような状況であった。

中学卒業時の調査で、全員そろっては書けなかった字

8人中的  
正解者数 正答率 字数

4人	50.0%	4字	穀衆弑陞
5人	62.5	9	旗券敵孝専蔵拝複補
6人	75.0	23	貴均系潔兼拡候齒就祝 述純貯低程敵展難鼻票 暴欲臨
7人	87.5	74	惡遣尨衛易解革刊幹勅 欲規逆境禁訓限減固護 康黃講号妻採祭際策察 酸氏似兇識謝借拾宿準

処初招称勝仁是制績宣 戦息損貸単停提適典徒  
湯破飯版肥氷俵武奮満 未盟預率

これは、卒業時の調査で、8人全員は書けなかった字で、総計110字ある。  
(一度できて、3年最後で再びできなかった「底」を加えると111字となる)  
8人正答の漢字(881字-110字=771字)の中には、既に1・2年のテストの  
際に、全員(100%)が続けて正答し、習得が定着したものとみなして、調  
査対象文字からは省いたもの(主として低・中学年用)があり、また、3年  
の後期テストで、100%書けたものでも、前回は100%でないものは、習得完  
了という立場から、問題が残る字(術象承張釈俗評墓)を加えると、110字  
を上回ることになる。これらの文字を配当学年にあててみると、多くは、6  
年用漢字であるが、中には、次のように中学年で学習される漢字もいくつか  
ある。

3年用漢字 惡黄号勝

4年用 旗固祭察借拾初戦息停 徒湯鼻氷

5年用 術易解規均限護康候講 際酸氏似識謝祝宿準績  
貸単貯低敵適典破飯肥 俵票武満

これらの文字が書けなかった理由は、その誤答反応から、その文字として  
は想起できるが、正しい字形がとれない、類似字形を誤って書く、意味内容  
の連想(類似・反対)から誤って書く、同音(訓)の他の字をあてる、文字  
の一部しか想起できないなどがあり、学習指導の工夫によっては、さらに、  
多くの習得が期待されるが、中には、中学生の生活には親近性が乏しく書く  
機会も少ない、式屯陞旗孝仁などがあり、「使いこなす」という状況とは程  
遠い感がある。しかし、又、次のような習得現象がある。

教育外当用漢字の書く力

教育外当用漢字を書くことは、義務教育終了段階では要求されていない  
が、3年終了時の調査で、8人全員が書けた字は205字あった。

亜 陰 羽 映 影 鋭 沿 炎 鉛 押 沖 乙 菓 介 仄  
皆 悔 較 汗 卷 企 机 鬼 幾 輝 儀 幟 脚 弓 丘

泣 恐 胸 眺 菌 筋 駢 屈 徑 莖 惠 傾 警 穴 肩  
 圈 玄 源 呼 互 悟 孔 甲 江 好 抗 郊 紅 項 綱  
 刻 骨 砂 座 酢 錯 咲 枝 姿 銅 誌 軸 湿 芝 斜  
 尺 若 狩 趣 樹 秀 巡 召 床 松 沼 笑 將 紹 硝  
 障 鐘 城 淨 振 針 診 薪 刃 寸 井 征 牲 盛 昔  
 洗 染 扇 鮮 訴 窓 裝 層 操 束 怠 袋 淹 探 段  
 暖 痴 畜 仲 兆 頂 彫 潮 澄 庁 痛 帝 滴 斗 途  
 渡 豆 唐 桃 透 稻 糖 胴 峠 軟 乳 忍 粘 濃 背  
 培 梅 拍 舶 箱 斑 晚 秘 尾 匹 姬 漂 浜 浮 幅  
 沸 丙 閉 片 浦 宝 訪 亡 忘 肪 棒 紡 凡 枚 埋  
 又 密 妙 眠 霧 娘 模 盲 唯 雄 優 羊 溶 踊 頼  
 雷 乱 離 隆 硫 涼 鈴 劣 郎 湾

この 205 字を検討すると、8 人が正答できたことに、かなりの信頼性と、必然性が認められる。

これらの文字は、読みの調査で、原則として正答反応の高い方（生徒に親近性があると思われる）の音・訓による語形をとって問題を書かせた。

訓単独によって調査した字

例

羽は 押お 沖おき 汗あせ 机つくえ 弓ゆみ 泣なみ 恐おそろしい 莖き 穴あな 肩かた 呼よ 咲さ

枝えだ 姿すがた 銅どう 若わ 狩かり 松まつ 沼ぬま 笑わら 鐘かね 城しろ 針はり 刃は 昔むかし

洗あらう 染そめる 扇あふぎ 訴うったえる 窓まど 袋ふくろ 痛いた 渡わたる 豆まめ 尾お 浜はま 浮う 忘わす

又また 雷かみなり

など、66 字（これらの文字＜ことば＞は生活に密着したものが多い）のほかは、すべて音による熟語の形で調査した。調査問題を作成する場合、なるべく生徒の日常生活に密着した語という観点をとったが、正しく書けた文字を

みると結果的に、多くは、教育外当用漢字＋教育漢字の組み合わせでできている語に使われた場合であることがわかる。

例 映(映画<sup>3</sup>) 鋭(鋭角<sup>3</sup>) 沿(沿岸<sup>3</sup>) 鉛(鉛筆<sup>5</sup>) 菓(菓子<sup>1</sup>)  
悔(後<sup>3</sup>悔) 較(比<sup>5</sup>較) 企(企画<sup>3</sup>) 儀(儀式<sup>4</sup>) 脚(脚本<sup>1</sup>)  
胸(胸囲<sup>4</sup>) 菌(細<sup>3</sup>菌) 筋(筋肉<sup>3</sup>) 径(半<sup>2</sup>径・直<sup>1</sup>径) 傾(傾向<sup>3</sup>)  
悟(覺<sup>4</sup>悟) 孔(孔子<sup>1</sup>) 郊(郊外<sup>2</sup>) 紅(紅白<sup>1</sup>) 項(項目<sup>1</sup>)  
刻(時<sup>2</sup>刻) 鮮(新<sup>3</sup>鮮) 寸(寸法<sup>4</sup>) 振(振動<sup>3</sup>) 召(召集<sup>3</sup>)  
趣(趣味<sup>4</sup>) 尺(尺度<sup>3</sup>) 乳(牛<sup>2</sup>乳) 軟(軟水<sup>1</sup>) 硝(硝酸<sup>5</sup>)  
斗(北<sup>2</sup>斗星<sup>3</sup>) 庁(都<sup>3</sup>庁) 段(階<sup>4</sup>段・段落<sup>3</sup>) 束(約<sup>5</sup>束) 訪(訪問<sup>4</sup>)  
閉(閉会<sup>2</sup>) 沸(沸点<sup>3</sup>) 班(班長<sup>2</sup>) 箱(本<sup>1</sup>箱) 雄(英<sup>4</sup>雄)  
優(優勝<sup>3</sup>) 溶(溶液<sup>5</sup>) 硫(硫酸<sup>5</sup>) 鈴(鈴虫<sup>2</sup>) 郎(太<sup>3</sup>郎)

これらは、日常の社会生活でも、こうした組み合わせの語として多用されており、生徒がその語に接近することが多く、また書く機会や必要も多い。したがって、教育外当用漢字であっても自然に書けるようになる。なお、他教科で多用される語(文字)も相当あり、よく目にふれる、ノート等で書く機会も多いということが考えられる。

教育外当用漢字との組み合わせの語(文字)は、前者に比べると、さすがに少ない。しかし、日常生活と密着しているもの、他教科に関するものという傾向は動かない。

例 亜(亜鉛) 影(影響) 乙(甲・乙・丙) 介(紹介) 砂(砂丘)  
糖(砂糖) 肪(脂肪) 秘(秘密) 唐(遣唐使) 培(栽培)

これらは国語科や他教科との関連がみられ、字数・字種に多少の異同があっても、どの中学生にも共通する現象ではないと思われる。

このように教育外当用漢字でも、生活上、あるいは学習活動の上で必要性の高いものは、書ける漢字が相当あること、そのような漢字は、語構成、語表記の上で、やはりまぜ書きよりも、漢字で書くことが望ましい。同音語の誤りもさけられる。

中学の漢字学習では、書く力として定着しない教育漢字の指導も合せて行

なわれるであろうが、現実には中学校の国語教科書で新出する漢字——教育外当用漢字を中心に進められる場合が一般のようである。その結果、上掲のように、書くことを義務づけられている教育漢字の中の文字が習得し残り、必ずしも書くことまでは義務づけられていない教育外当用漢字の中にも、日常生活上、学習の必要上、習得能力上、書ける文字のあることに注目される。

このことは、将来、読み書きともに習得の可能な漢字、習得すべき漢字ということを考える場合、参考になるのではなかろうか。

## 2 中学校の漢字学習指導の実態に関する質問紙調査

### 【調査の目的】

この調査は、中学生の漢字習得調査の一環として、中学校の漢字学習指導が実際にどのように行なわれているのか、また、実践の場にある先生方が、漢字指導はどうあるべきだと考えているのか、指導上の問題点がどんなところにあると意識されているかなどについて、その実態を全国的な規模において少しでも明らかにすることを目的として行なったものである。

### 【調査の方法・回収率など】

漢字指導の実態を知るための調査としては、一定期間一定の教室へ実際に行って調べる、その他などいろいろの方法があり得るが、ここでは質問紙による調査方法をとった。調査票への記入については、

- ① 回答者には学校（または地域）の代表としてではなく、国語科教員のひとりという立場で答えてもらうこと。
- ② 事実であることと意見であることとをはっきり区別して答えてもらうこと。
- ③ 事実については、昭和41年度に実施したことを中心に記入してもらうこと。

などにとくに留意した。

### 1 調査実施の時期

神奈川県

昭和41年12月～42年1月

千 葉 県                      昭和42年 1 月  
 青 森 県                      昭和42年 2 月  
 その他の地域                昭和42年 2 月～ 3 月

## 2 調査地域、回収率など

- a 県の教育委員会、県単位の国語教育研究会等の協力を得て、県内全校（1校につき1名ずつ）に調査票を送り、回答を依頼した地域（A地域）
- b 都・道・府・県教育委員会に回答者の推薦方を依頼（1県につき5～6名ぐらい、東京は10名ぐらい）し、主としてそれにもとづいて調査票を送り、回答を依頼した地域（B地域）

それぞれについての発送部数・回収部数・回収率はつぎのとおりである。

（A 地 域）

県 名	発送部数	回収部数	回収率
神奈川	225	118	52.4%
千 葉	267	131	49.1%
青 森	307	188	61.2%
	799	437	54.7%

（B 地 域）

発送部数	回収部数	回 収 率
343	206	84.8%

（B地域の内訳）

県 名	発送部数	回収部数	県 名	発送部数	回収部数
1 北海道	6	4	8 茨城県	6	4
2 秋田県	6	5	9 群馬県	6	5
3 岩手県	1	1	10 東京都	13	10
4 山形県	6	6	11 新潟県	6	5
5 宮城県	6	6	12 富山県	6	4
6 福島県	6	6	13 石川県	6	4
7 栃木県	6	6	14 福井県	6	5



県 名	発送部数	回収部数	県 名	発送部数	回収部数
15 長野県	6	5	28 鳥取県	6	5
16 山梨県	6	5	29 広島県	6	6
17 静岡県	6	6	30 山口県	6	6
18 岐阜県	6	6	31 高知県	6	3
19 愛知県	8	7	32 香川県	6	5
20 滋賀県	6	3	33 愛媛県	6	6
21 京都府	6	5	34 福岡県	5	5
22 大阪府	8	6	35 長崎県	5	4
23 奈良県	6	5	36 佐賀県	6	5
24 和歌山県	6	5	37 大分県	6	5
25 三重県	6	6	38 熊本県	6	5
26 岡山県	6	6	39 宮崎県	6	6
27 兵庫県	6	6	40 鹿児島県	5	3

### 【調査結果の概要】

この調査の結果のあらましは、つぎのⅠ～Ⅴに示すとおりである。これについての記述の仕方はつぎのようになっている。

- ① 質問の内容およびその配列については、部分的に省略したところもあるが、原則として実際の調査票に従った。
- ② 各質問事項のあとに二つずつ示した数字はいずれも百分率（項目によっては平均値）で、それぞれ、前者はA地域について、後者はB地域についてのものを表わしている。
- ③ 項目によっては、二つ以上の選択肢に○印のつくものがあり、この場合には、当然ながら、各パーセンテージの和が100をこえている。
- ④ 項目によっては、各パーセンテージの和が100になってよいはずであるのに、100に満たないものがある。この場合の差は「無答」による。

### Ⅰ 学校の環境と国語科学習指導

a あなたの現在の学校の地域環境（二つにまたがっている場合は、その両方をかこむ）

1. 住宅市街	18.8(28.2)	2. 商業市街	9.2(17.0)
3. 工業市街	4.3(6.8)	4. 鉱業市街	0(1.5)
5. その他の市街	3.2(6.8)	6. 小都市	7.1(17.5)
7. 都市近郊農村	15.8(17.5)	8. 普通農村	24.7(18.0)
9. 農山村	19.0(14.1)	10. 農漁村	12.6(5.3)
11. 漁村	4.1(0.5)	12. 鉱山	0.2(0.5)
12. 山村	3.0(1.9)	14. その他	2.7(1.9)

b あなたの現在の学校の全学級数 12.5 (19.8) 学級

c あなたの現在の学校の国語科教員数

1. 専任者 2.2 (3.5) 名      2. 兼任者 1.7 (1.7) 名

d あなたの現在の学校の毛筆習字は

1. 国語科教員全員で指導 29.7 (23.3)
2. 国語科教員のうちの一部で指導 43.5 (56.3)
3. 国語科以外の教員が指導 23.8 (24.8)
4. 特別の非常勤講師を依頼 1.1 (1.9)
5. 校長または校務主任が指導 6.9 (2.9)

e あなた自身の現在の国語科のうけもち

一年生	1.2(1.3)学級	43.7(53.8)名	} 総時間数 1週 17.5(21.0)時間
二年生	1.2(1.4)学級	43.3(55.7)名	
三年生	1.6(2.2)学級	53.8(91.8)名	

f あなた自身の、その他（e以外）の校務分掌

（校務主任，図書館主任，学年主任，PTA会計係，研究指導主任……）  
 ……いろいろであるが，全体を通じて，何か一つという場合はまれで，1人が2～4種のe以外の校務を分掌している例が大勢を占めている。

## Ⅱ 漢字学習指導の方法

a 教科書による，ふつうの国語の授業における漢字学習指導の過程

教科書による，ふつうの国語の授業における漢字学習指導の過程の例とし

て、つぎのようなものを考えました。あなたの場合、実際にはこれがどうなっているでしょうか。例にならってお書きください。

- (例)
- ① 教科書のよみをとおしての正確な音声化 (A)
  - ↓
  - ② 文章中での文脈的理解 (B)
  - ↓
  - ③ 摘出しての語句単位での理解 (C)
  - ↓
  - ④ 分解による文字単位での理解 (D)
  - ↓
  - ⑤ 応用的、発展的理解と練習 (E)
  - ↓
  - ⑥ 練習による態度化 (F)

〈記入欄〉 1

上の例をごらんになって、あなたの場合は、つぎのどれでしょうか。

イ. 内容、順序とも例と同じ。 54.7 (53.4)

ロ. 内容はほぼ同じになるが、順序がちがう。 35.7 (35.4)

この場合は、A、B……の記号で、その順序を下にお書きください。

(この結果について、A地域、B地域の総合で多かったもの1～3位までを示すと、ACDBEF 9.2%, ACBDEF 5.9%, ADCBEF 1.9%)

ハ. 例とはちがった指導過程をとっている。 7.8 (11.2)

この場合は、〈記入欄〉2におかきください。

〈記入欄〉 2

- ① ( イにもロにも属さない指導過程をとっているとしてこの )
- ② ( 欄に回答したひとは、A地域で7.8%, B地域で11.2%で )
- ③ ( あった。そして、その中の大半は、例A①B②C③D④E⑤F⑥の中の )
- ④ ( どれかをとばした方式、または、多少変形させたもので占 )
- ⑤ ( められている。 )
- ⑥ ( その他のものとしては、「単元にはいるまえに、主要漢 )
- ⑦ ( 字について家庭学習として調べさせる」をトップに位置づ )
- ⑧ ( けているもの、「ノート検査」「テストによる定着度の評 )
- ⑨ ( 価」を最後に加えたもの、その他などがある。 )

b 教科書以外 (aでの学習指導以外) の漢字のとりたて指導

1. 教科書の読解の場合に指導する以外に、つぎのような指導をしているでしょうか。

イ. 主として教科書で習ったものの練習学習

- (i) その教材なり，単元なりが終ったところでの練習学習 75.7(80.6)
- (ii) 1週間に何回かの特別の時間をきめての練習学習 13.3(13.6)
- (iii) あるときまとめて（期末，その他）の練習学習 15.8(20.4)

ロ. 教科書と関係のない，ワークブック，テストブックなどを使っての練習学習

- (i) している。54.0(50.0)
- (ii) していない。39.9(44.2)

ハ. 自分でくみたり，あるいは，何かの参考書を利用して作ったりの，漢字についての知識や技能を増すための特別なレッスン

- (i) している。37.8(50.5)
- (ii) していない。49.9(44.7)

2. テスト

イ. 漢字のテストは，どういう時機に行なっているでしょうか。

- (i) 毎週行なっている。 20.4(16.5)
- (ii) 小単元が終ったところで行なっている。 43.0(43.7)
- (iii) 単元の終ったところで行なっている。 21.5(25.7)
- (iv) その他 25.4(34.5)

ロ. テストに出す漢字のソース

- (i) 教科書に提出されている漢字の中から 86.7(85.9)
- (ii) 教科書以外の教材の中から 11.0( 9.2)
- (iii) 当用漢字の中から 19.9(26.7)
- (iv) 当用漢字以外の漢字から 3.7( 1.5)
- (v) その他 5.3(11.2)

ハ. 答案に，略字・旧字体の漢字が出てきた場合の処理はどうしていますか。

- (i) 略 字

（ A地域，B地域ともに，「採点する場合は誤答として処理するが，そのとき，正字を添書するか，あるいは事後に指導するなどしている」というのがほとんどである。）

(ii) 旧字体

- ( A地域、B地域ともに、大別して  
① 正答として許容するが、あとで新旧字体について説明する。  
② 誤答として処理し、あとで全体指導を行なう。  
のいずれかに属する仕方では処理されている。①②は約半々。 )

Ⅲ 漢字学習指導の内容

a 熟語の指導の場合、その語を構成している漢字の1字1字の意味を指導しているでしょうか。

1. 1字1字の意味の指導が、その語の理解に必要と判断したとき指導している。 68.0(69.0)
2. 語としては指導しているが、1字1字の意味にはふれない。 6.6(1.9)
3. その熟語が音よみの熟語で、1字1字の意味の指導がその語の理解に必要と判断したときに指導している。 23.6(32.5)
4. 指導するかしないかは、その時の事情による。 13.3( 7.3)
5. その他 4.6( 8.3)

b 当用漢字の指導で、音訓表に示された以外のよみにふれることがあるでしょうか。

1. ふれたことがある。 44.2(69.4)

あるとすれば、それは、どんな漢字の場合でしたか。できれば、それらの漢字をいくつかお示してください。

(魚さかな・父とう・母かあ・尊とうとイ・入はいル・汚よグス・欲よろ  
こび・達たち・だち・緒ちよ・私わたし・懐ふところ・なつかシイ・体  
からだ・敵きビシイ・鮮あざやか・風情ふぜい・大人おとな……その他  
(以上、B地域の例)

また、その理由としては、どんなことが考えられるでしょうか。

( B地域の回答について、おもなものとしては、  
① 熟語の意味の指導のとき訓を使うと便利なので、しぜん表外訓にもふれる。  
② 文学作品を読むとき、音訓表以外のよみかたをおぼえておく必要がある。  
③ 日常生活上よく目にふれるものは覚えさせておいた方がよいと思うから。  
などがあげられている。 )

2. ふれたことがあるように思う。 40.3(20.9)
  3. ふれたことはない。 14.2( 8.7)
- c 教科書による授業の中で、取り出して指導している漢字はどれでしょうか。
1. 新出漢字の全部 57.2(49.0)
  2. 新出漢字のうち、生徒にとって抵抗が大きいと思われるもの 33.9(45.6)
  3. 既習漢字のうち、習得率の低いもの 50.8(57.8)
  4. その他 6.6(12.6)
- d 上記cの場合、音訓についてはどうなっているでしょうか。
1. 教科書の文脈でのよみだけを指導している。 5.3( 1.9)
  2. 教科書の文脈でのよみが音だけである場合、なるべくその漢字の訓（それがあれば）も指導するようにしている。 82.6(92.3)
  3. 教科書の文脈でのよみが訓だけの場合、なるべくその漢字の音（それがあれば）も指導するようにしている。 66.6(83.0)
  4. 教科書の文脈でのよみが訓であれば、音にふれることはほとんどない。 1.4( 0.5)
  5. その他 8.0( 7.8)
- e 筆順について、なにか指導しなければならないようなことがあったでしょうか。
1. あった。 79.6(87.9)  
 あったとすれば、それは、筆順のどういう点についてでしょうか。なるべく具体的に示してください。  
 （B地域における、上位15位までの指導字例  
 必, 飛, 右, 左, 馬, 有, 方, 女, 田, 肅, 医, 耳, 九, 衆, 門）
  2. なかった。 17.8(11.7)
- f 作文の中で漢字を指導しているでしょうか。
1. 事後処理として、誤字・誤用等の漢字を訂正して返している。 87.4(85.3)
    - (i) かならず。 30.0(21.8)
    - (ii) だいたい。 42.1(41.7)
    - (iii) その時の事情による。 15.3(21.8)

2. 知っている漢字は，なるべく多く使って書くように指導している。  
46.9(50.0)
  3. 漢字を使うときは，たしかに知っている字を使うように指導している。  
12.6( 9.2)
  4. 書くときに辞書を使わせて，自信のない字は確かめてから書くように指導している。  
31.1(38.3)
  5. 書く意欲をそぐので，作文での漢字指導 はなるべくしないことにしている。  
7.8(8.3)
  6. その他 6.6(24.3)
- g ふだん，漢字を正しく書くよう，その態度化について，どんな指導をしていますか。
1. 書くときは正しい漢字を書くように心がけさせている。 46.7(43.2)
  2. 字画をきちんと書くよう指導している。 31.6(42.7)
  3. 漢和辞典・国語辞典等をおっくうがらずにひいてみる習慣をつけるように指導している。  
59.0(64.6)
  4. 自信のない字は，知っている人に聞くなり，辞書でひくなり，なるべく確かめてから書くように指導している。  
22.7(27.7)
  5. ノート検査によって，正しく書くことの態度化をはかっている。  
41.0(41.3)
  6. その他 7.6(13.1)
- h 部首の知識を利用した漢字の指導をなさっているでしょうか。
1. した。 83.7(89.3)
  2. しなかった。 14.4( 9.7)
- i 部首についてなにか指導をなさったでしょうか。
1. まとめては行っていないが，必要に応じてふれてきた。 61.1(54.9)
  2. 漢和辞典を利用して指導してきた。 35.0(39.8)
  3. 生徒の自発学習にまかせてきた。 4.1( 2.4)
  4. その他 6.9(16.5)
- j 熟語の語構成（たとえば，登山・下山 春雨・春風 先端・道路…等の話の中にみられる構成上の共通点や相違点）についての指導はどうなっているで

しょうか。

1. 計画的に指導している。 5.9(18.9)
2. 必要に応じて、そのときどきに指導してきた。 89.2(77.2)
3. それにはふれていない。 3.0 (0.5)
4. その他 4.3(13.6)

k 他教科へのサービス（たとえば、「この漢字は理科の用語に使われる字だからよく教えておいてやろう」というようなこと）として指導したりすることがありますか。

1. サービスを意識して指導したことがあり 11.2 (20.9), その対象はおもに  
科 科である。〔A・B両地域とも, 社会科・理科が圧倒的に多かった〕
  2. その事実はあるが、とくにどの教科ということはない。 43.5(44.7)
  3. 他教科へのサービスを意識して指導したことはない。 43.9(32.5)
  4. その他 3.7( 5.3)
- 1 あなたの学校の国語科以外の教科で、漢字の学習指導が行なわれているでしょうか。
1. 指導しているということ、を、他教科の人などから聞いたこと（見たこと）がある。28.8(40.3)〔A・B両地域とも, 社会科・理科が他を引きはなして多い。〕
  2. 指導しているかどうかわからない。 22.2(14.6)
  3. 指導していないらしい。 37.8(34.0)
  4. その他 9.4(14.1)

#### Ⅳ その他の指導

##### a 辞書指導（漢和辞典について）

1. あなたは、今年度になってから、漢和辞典の使いかたについて指導されたでしょうか。
  - イ. 指導した。 60.6(64.6)
  - ロ. 指導の必要を認めているが、まだやっていない。 7.8( 3.9)
  - ハ. 使用の仕方について生徒がすでに知っていたので指導の必要がなかつ



た。 26.8(26.2)

ニ. その他 5.7( 5.3)

2. 漢和辞典を利用した授業をなさっているでしょうか。

イ. してきた。 52.2(60.7) その場合、どんなふうに利用されましたか。

- B地域での例
- |   |
|---|
| ( ① 部首, 熟語の指導のときに利用。<br>② 新出漢字や難解語句を, 授業中辞書を利用して調べさせる。<br>③ 学習時・つねに持たせて, 必要に応じて, その他など。 ) |
|---|

ロ. してこなかった。 35.7(26.7)

ハ. その他 9.8( 8.3)

3. 漢和辞典を生徒にどのように使わせていますか。

イ. 授業中自由に使わせている。 57.0(51.5)

ロ. 休み時間や放課後等に使わせている。 7.6( 8.7)

ハ. 家で予習・復習のときに使わせている。 56.1(67.5)

ニ. その他 12.1(13.1)

b 副教科書, ワーク・ブック

1. 漢字学習中心の副教科書, ワーク・ブック等を使わせていますか。

イ. 使わせている。 39.1(37.4)      ロ. 使わせていない。 54.7(55.3)

2. 漢字学習をふくむ副教科書, ワーク・ブック等を使わせていますか。

イ. 使わせている。 42.3(48.1)      ロ. 使わせていない。 43.9(37.9)

c 家庭学習

1. 漢字学習を宿題として家でやらせていますか。

イ. やらせている。 82.4(91.3)      ロ. やらせていない。 16.9( 6.3)

2. やらせている場合, それは主として漢字学習のどういうことについてですか。

イ. 書きの練習 41.6(46.6)

ロ. 難語句のよみや意味を調べる一環として 51.3(61.7)

ハ. その他 11.2(22.3)

d 特別に行なっている漢字の学習指導

漢字の学習指導上, なにか特別に行なっていることがあるでしょうか。あり

ましたら、それをお書きください。

1. 先生個人として

B地域についてのおもなもの

- ① テスト、ドリルの実施（朝自習、国語の時間、放課後、補欠授業等を利用して）
- ② 指導のための各種の調査、研究、研修
- ③ 一字一字についての字源的、解字的指導
- ④ 語句ノートによる指導
- ⑤ 熟語の語構成についての指導、その他

2. 学校または地域として

B地域についてのおもなもの

- ① 漢字テストの定期的な実施
- ② 朝の自習時を利用した、漢字についてのドリル学習
- ③ 進級式の漢字力検定試験制度の採用
- ④ 市販または自作の漢字練習帳の使用、その他

——この事項では、学校としてなのか、地域としてなのかが明らかでないものがあるが、記述内容からみて、「学校として」というのがほとんどであると思われる。——

V 漢字学習指導に対するあなたのご意見

a 中学校卒業までに身につけさせたい漢字力は？

1. 別表外当用漢字（969字）について

- イ. よみ、かきともに完全に身につけさせたい。 46.5(43.2)
- ロ. よみだけは完全に身につけさせたい。 49.2(51.0)
- ハ. その他 5.5(10.2)

2. 当用漢字外の漢字について

- イ. ルビつきで出してあればよい。とくに指導する必要はない。 45.8(54.4)
- ロ. 必要のある漢字については指導しなければならない。 45.1(36.4)

- b 漢字学習指導のあるべき姿について、あなたはどのように考えでしょうか。400字以内ぐらいでお書きください。

B地域についてのおもな意見

- ① 一字一字についての形・音・義をおさえた指導がたいせつだ。
- ② 熟語・類義語・反対語・語構成等を通じての指導が重要。
- ③ ドリル学習をもっと重視すべきだ。
- ④ 漢字指導には全職員の協力が必要だ。
- ⑤ 国語科の時間数をもっと増加すべきだ。

- c 漢字学習指導の観点から、小学校に要望したいことがありましたら、かんたんにお書きください。

B地域でのおもな要望

- ① 筆順指導を徹底的にやってほしい。
- ② 教育漢字の読み書きを完全に指導してほしい。
- ③ 部首など、漢字の構成についての知識を与えてほしい。

◎回答者の教職経験年数 13.3(17.6)年, うち中学校10.8(13.6)年。

【結果の処理についての今後の見とおしなど】

以上、中間的な報告として結果についてのあらましを述べてきた。現在最終的なまとめと分析の作業を進めつつある。年内には報告書にまとめて最終報告を行なう予定である。

なお、この調査を行なうにあたって、直接回答者として御協力くださった643名の先生方、ならびに、回答者推薦の労をおとりくださった各都道府県教育委員会のかたがたの御厚意に深く感謝の意を表したい。

また、つぎのかたがたには、種々の面で格別のご協力お力添えをたまわった。ここに記して厚く謝意を表する次第である。

伊藤秀雄 千葉県教育委員会指導課長  
 岩淵寛二 青森県教育委員会指導主事  
 大山正幸 神奈川県中学校国語教育研究会会長

寒川英希	文部省特殊教育課長
鈴木康之	東京成徳短期大学専任講師
須藤久幸	神奈川県教育委員会指導主事
田島 均	富山県礪波市立太田小学校一（当時，富山県派遣国立国語研究所留 学生）
戸川 昂	千葉県君津郡吉野田小学校長一（当時，千葉県指導主事）
長須正文	茨城大学教育学部付属中学校

## D 今後の予定

以上は、42年度に行なった研究作業の概要と結果の一部報告であるが、43年度は、統行中の習得要因資料や、今までに実施した諸調査の整理・分析を急ぎ、それらの結果と漢字習得調査結果の關係に考察を加えるなどして、報告書「中学生の漢字習得の研究」を刊行する予定である。

（芦沢）

# 就学前児童の言語能力に関する全国調査

## A 目 的

幼児、児童、生徒が言語、文字をどのように習得し、どのように使用するか、またその要因はなにか等を明らかにする言語発達の研究は、国語教育、とくに、その教育計画や指導法の確立、改善のために欠くことのできぬ基礎的な仕事として重視されなければならない。とりわけ、就学前期は言語形成の上で大切な時期であるが、近年、マスコミの普及によって言語、文字を習得する過程は大きな転換をみせている。従来、就学前児童の言語能力に関して、部分的調査は散見されているものの、まだ、全国的な規模での概観は得られていない。この実状にもとづき、本調査は3年計画で就学前児童の言語能力の習得の過程および条件を全国的規模で明らかにしようとする。

本年度はその第1年次の調査として、就学前児童の文字力の調査を行なう。

## B 担 当 者

本調査に関する計画立案、実施は、国語教育研究室の村石昭三、天野清の2名が担当し、福田昭子がこの作業を助けた。なお、後掲、調査1、読み・書き水準調査の実施には、122幼稚園と72名の調査員の協力を得、調査2、特定幼児の文字調査の実施には、18幼稚園と当該幼稚園教師の協力を得た。また、調査3、文字の習得過程調査および調査4、言語構造の調査にはそれぞれ実験協力園の協力を得た。

## C これまでの作業過程

幼児の言語発達に関する研究は昭和41年度よりはじまる。すなわち、昭和

41年度は「幼児の言語発達に関する準備的研究」として、「従来の言語発達研究の展望」「言語・文字の記録資料の収集・整理」を主にして研究作業をすすめ、昭和42年度にはそれらの作業を継続して、「言語発達文献 展望・リスト」のレポート（A 4・149ページ・タイプ印刷）をまとめたほか、「言語発達に関する課題調査」として、1) 語音知覚の発達、2) 文字力の発達、3) 助数詞の調査を行なった。そして、これらの課題調査は全国調査のための準備調査として位置づけられた。

## D 本年度の調査概要とその経過

### 調査1 読み・書き水準調査

平がなの清音、撥音、濁、半濁音の読み書きテスト、拗・長・促音および助詞「は」「へ」の読みテストを行ない、4・5歳児クラスの文字力の水準を明らかにし、あわせて、幼稚園、家庭に対するアンケート調査から文字習得の要因を調べることにした。東北・東京・近畿の3地方の全幼稚園から、122幼稚園を層別抽出し、<sup>\*注</sup>被調査者計 2,235名（4歳児クラス 827名、5歳児クラス 1,408名）の幼児についての調査である。

層別に抽出された幼稚園名および住所は下記の通り。

層	園 名	住 所
(東北地方20園)		
H 4	東岡幼稚園	仙台市原町南目字町67
H 4	聖和幼稚園	〃 木の下21—5
H 4	聖霊女子短大付属幼稚園	秋田市みその町4—82
H 4	青森幼稚園	青森市沖館篠田44
H 3	飯坂幼稚園	福島市飯坂町字桜下
H 3	つつみ幼稚園	岩手県盛岡市南松1—6—34
H 3	白梅幼稚園	〃 〃 上ノ橋町7—63
H 3	ザベリオ学園幼稚園	福島県会津若松市西柴町1—52
H 2	大山幼稚園	山形県鶴岡市大山町333

H 2	水野谷幼稚園	福島県常盤市水野谷字竜ヶ沢
H 2	小百合幼稚園	岩手県宮古市宮町 1—2—12
H 2	ひかり幼稚園	宮城県白石市沢目 21—1
H 2	白河幼稚園	福島県白河市郭内 12—9
H 2	天真幼稚園	山形県酒田市浜田 1—3—47
H 2	聖テルジア幼稚園	青森県黒石市大町 2
H 1	四倉第一幼稚園	福島県いわき市四倉町西 3—65
H 1	中仙幼稚園	秋田県仙北郡中仙町長野
H 1	佐沼幼稚園	宮城県登米郡迫町佐沼字下田 48
H 1	おさなご幼稚園	岩手県上閉伊郡大槌町桜木町 2—24
H 1	河北幼稚園	山形県西村山郡河北町谷地字所岡 46—1

(東京地方36園)

T 1	保木間幼稚園	東京都足立区保木間 1—8—18
T 1	第二押上幼稚園	“ 江戸川区上篠崎町 1—152
T 1	明昭幼稚園	“ 葛飾区四ツ木 1—41—1
T 2	入谷幼稚園	“ 台東区坂本 1—14
T 2	言問幼稚園	“ 墨田区向島 5丁目 4—4
T 2	亀戸幼稚園	“ 江東区亀戸町 4—115
T 3	西神田幼稚園	“ 千代田区西神田 2—6—18
T 3	青山学院幼稚園	“ 渋谷区緑岡町 22
T 3	青い鳥幼稚園	“ “ 広尾 3—1—22
T 4	文京第一幼稚園	“ 文京区西片町 2—17—6
T 4	音羽幼稚園	“ “ 大塚 5—40—1
T 4	双葉幼稚園	“ 豊島区南池袋 3—12—1
T 4	巣鴨幼稚園	“ “ 巣鴨 7—1623
T 5	落合幼稚園	“ 板橋区板橋 2—20—1
T 5	清和学園幼稚園	“ 北区赤羽西 3—11—11
T 5	友栄学園幼稚園	“ “ 岩淵町 1—728
T 6	愛隣幼稚園	“ 世田谷区新町 2—230

T 6	明星幼稚園	東京都世田谷区三軒茶屋233
T 6	ばら幼稚園	" " 船橋町355
T 7	ひかり幼稚園	" 中野区上高田 5—21—5
T 7	中野なかよし幼稚園	" " 野方 2—27—11
T 7	第一若宮幼稚園	" " 若宮 3—45—11
T 7	裕和幼稚園	" 杉並区清水 2—21—5
T 7	高井戸幼稚園	" " 上高井戸 5—2211
T 7	松苔幼稚園	" " 堀ノ内 1—132
T 8	明善幼稚園	" 大田区入新井 3—145
T 8	池上みどり幼稚園	" " 上池上町394
T 9	平塚幼稚園	" 目黒区上目黒 4—2156
T 9	たちばな幼稚園	" " 上目黒 8—595
T 9	日本音楽学校付属幼稚園	" 品川区豊町 2—16—16
T 10	マルガリタ幼稚園	" 調布市下石原590—1
T 10	府中ひばり幼稚園	" 府中市四谷 2—25
T 10	多摩みどり幼稚園	" 東村山市本町 1—520
T 10	みそら幼稚園	" 小金井市東町 2—19
T 10	明成幼稚園	" 田無市西原町 2—2—3
T 10	福生幼稚園	" 西多摩郡福生町本町 3

(近畿地方66園)

K 6	西野田幼稚園	大阪市福島区江成町173—4
K 6	五条幼稚園	" 天王寺区小宮町18—1
K 6	中大江幼稚園	" 東区糸屋町 2—12
K 6	長池幼稚園	" 阿倍野区阪南町東 5—2—26
K 6	みつやめぐみ幼稚園	" 淀川区三津屋南通 1—22
K 6	大宮幼稚園	" 旭区大宮西の町 7—138
K 6	金塚幼稚園	" 阿倍野区旭町 2—69—1
K 6	みはと幼稚園	" 東淀川区島頭町 2
K 6	鶴見橋幼稚園	" 西成区鶴見橋通 8—8



K 6	御幣島幼稚園	大阪市西淀川区御幣島中 3—46
K 6	鶴町幼稚園	〃 大正区鶴町 3—117
K 6	遠里小野幼稚園	〃 住吉区遠里小野 1—2
K 6	育和学園幼稚園	〃 東住吉区西今川町 2—22
K 5	慧日幼稚園	京都市東山区本町15丁目東福寺
K 5	陸美幼稚園	〃 伏見区桃山町立売47
K 5	円山幼稚園	〃 東山区円山公園音楽堂南
K 5	板橋幼稚園	〃 伏見区下板橋町610
K 4	西須磨幼稚園	神戸市須磨区桜木町 2 丁目角
K 4	青い鳥幼稚園	〃 東灘区本庄町深江札場通
K 4	呉田幼稚園	〃 〃 住吉町新兵衛新田
K 4	垂水幼稚園	〃 垂水区旭ヶ丘 1—8—22
K 4	フタバ幼稚園	兵庫県姫路市飾磨区恵美酒55
K 4	飾磨幼稚園	〃 〃 飾磨区恵美酒
K 4	城北幼稚園	〃 〃 伊伝居614
K 4	城東幼稚園	〃 〃 城東町553
K 4	健康幼稚園	〃 西宮市浜甲子園 2—10—4
K 4	仁川学院マリアの園幼稚園	兵庫県西宮市段上町 4—68
K 4	浜甲子園幼稚園	兵庫県西宮市枝川町 1—2
K 4	園和幼稚園	〃 尼崎市東園田町 4—79
K 4	下坂部幼稚園	〃 〃 下坂部字佃195
K 4	東光幼稚園	〃 〃 今北字宮本西16
K 4	曾根幼稚園	大阪府豊中市桜塚元町 1—130
K 4	八尾平和幼稚園	〃 八尾市黒谷107
K 4	進修幼稚園	〃 東大阪市足代北 2—19
K 4	堺北幼稚園	〃 堺市香ヶ丘町 4—2—5
K 4	愛徳幼稚園	和歌山県和歌山市西浜1620
K 3	寺方幼稚園	大阪府守口市北寺方町618
K 3	守口幼稚園	〃 〃 緑町17

K 3	御幸幼稚園	大阪府守口市桃町 2
K 3	八雲幼稚園	" " 八雲西町 4—210
K 3	浄幼稚園	" 枚方市中宮 4239
K 3	五領幼稚園	" 高槻市梶原 372
K 3	成美幼稚園	" 寝屋川市錦町 21—5
K 3	花園幼稚園	兵庫県明石市和坂 100
K 3	南幼稚園	" 伊丹市御願塚字北の口 23
K 3	晴嵐幼稚園	滋賀県大津市石山島居川中之町
K 2	橘幼稚園	京都府舞鶴市字浜 683
K 2	綾部幼稚園	綾部市上野町 211
K 2	庵我幼稚園	京都府福知山市池部坂上
K 2	長浜幼稚園北舎	滋賀県長浜市三ツ矢元町 19—24
K 2	石切幼稚園	大阪府東大阪市石切町 665
K 2	高鷲幼稚園	" 羽曳野市西川 72
K 2	二色幼稚園	" 貝塚市脇浜 897—2
K 2	鶴之荘幼稚園	兵庫県川西市小戸 1—15—13
K 2	三輪幼稚園	" 三田市高次餅田 175
K 2	重春幼稚園	" 西脇市和田町 688
K 2	日方幼稚園	和歌山県海南市日方 1256
K 1	山城精華幼稚園	京都市相楽郡精華町
K 1	高石幼稚園	大阪府高石市高師浜 3—5—34
K 1	藤井寺南幼稚園	" 藤井寺市藤井寺 400
K 1	石屋小付属幼稚園	兵庫県津名郡淡路町岩屋 515
K 1	下三方幼稚園	" 宍粟郡一宮町福地
K 1	温泉幼稚園	" 美方郡温泉町湯字千時 42
K 1	城崎幼稚園	" 城崎郡城崎町湯島 71
K 1	高野山幼稚園	和歌山県伊都郡高野町高野山
K 1	白浜第一幼稚園	" 西牟婁郡白浜町

(註) 幼児、園の抽出、層別基準について

標本の抽出は二段階等確率層別抽出法によるもので、まず、東京は区市町村を単位とする地域の類似性を基礎にして、東北、近畿は、府、市、町、村の人口数を基礎にして、それぞれ10、4、6、合計20の層にわけた。そしてその層内の幼稚園児（4歳児、5歳児の各クラス）総数に比例して、標本を抽出すべく、各層に標本のわりあてを行ない、その標本を調査するに必要十分な数の幼稚園を、その層の全幼稚園の中から、各幼稚園の在園児数に比例して無作為に抽出した。そして、次に標本が、各園の全幼児の中から、無作為に抽出された。上記の園は、このような手続きで抽出され、かつ、その園の承諾と協力にもとづいて実際に調査を行なった園である。園の左端についている記号、たとえば、T1 K1 H1は、それぞれ、東京第一層、近畿第一層、東北第一層を意味している。

調査2 特定幼児の文字（範囲・量）調査

4・5歳児クラスの幼児がどの程度の範囲（平かな、片かな、漢字、アルファベット、数字）をどれだけ読み書きできるかを、文字習得の経路と関連づけて明らかにした。全国の特定18幼稚園の4・5歳児クラスの幼児計72名についての追跡調査である。具体的には次のことを目的とした。

- 1) 就学前児童（4・5歳児クラスの幼児）がどの程度の文字を習得しているのか、テストによる定期調査等によって、読める文字、書ける文字の範囲と量を明らかにする。
- 2) 6か月間に上のテスト等を追跡的行なうことによって、上に述べた範囲と量の変化を明らかにする。
- 3) 日常的な観察と幼児の文字作品の収集、家庭からのアンケート調査を通して、幼児の文字使用の実態と、文字を習得する過程、要因、文字習得経路等を明らかにする。

この調査を委嘱した幼稚園名および住所は下記の通り。

函館短期大学付属幼稚園	函館市柏木町111
優美幼稚園	室蘭市みゆき町2-6-16
さゆり幼稚園	山形市本町2-1-24
香竜幼稚園	栃木県佐野市大祝町2312

東京学芸大学付属幼稚園	東京都小金井市貫井北町 4—780
小川幼稚園	〃 千代田区神田小川町 3—6
東寺尾幼稚園	横浜市鶴見区東寺尾2033
川口南幼稚園	埼玉県川口市錦町106
あさひ幼稚園	新潟市旭町 2
富山大教育学部付属幼稚園	富山市五艘村前1215
青葉幼稚園	名古屋市千種区唐山町 1—61
京都教育大学付属幼稚園	京都市伏見区桃山町筒井伊賀東町16
呉第一幼稚園	広島県呉市三城通 4—13
北堀幼稚園	島根県松江市北堀町39
高松幼稚園	香川県高松市亀岡町 1—6
内町幼稚園	徳島市幸町 3—22
長浜幼稚園	大分市長浜町 2—6—25
島原幼稚園	長崎県島原市下新町

### 調査 3 文字習得過程に関する調査

文字をめぐる知覚・認識過程の発達に関する実験を王子保育園（東京都北区王子 3—7）において行なった。

### 調査 4 言語構造の調査（準備調査）

主として、就学前児童の語い力の発達に関する研究調査法、分析法の問題を、舟戸幼稚園（埼玉県川口市本町 1—293）、道灌山幼稚園（東京都荒川区日暮里町 9—1040）において行なった。

### 就学前児童の文字力の調査（調査 1.2）経過

6月・「就学前児童の言語能力に関する全国調査」のための幼稚園調査表（台帳）作成を東北・東京・近畿の各県教育委員会指導課および私立学校主管課に依頼した。

- ・埼玉県下の 3 幼稚園（浦和市・原山幼稚園、川口市・舟戸幼稚園、北埼玉郡・種足幼稚園）で、「読み・書き水準調査」のための予備調査をした。被調査者数 180名。
- ・「特定幼児の文字調査」につき、特定18幼稚園に協力を依頼した。

- 8月・「読み・書き水準調査」につき、東北・東京・近畿の122園に調査園としての協力を依頼した。
- 9月・「読み・書き水準調査」および「特定幼児の文字の調査」のための諸調査票を完成した。
- ・「特定幼児の文字の調査」に関する打ち合わせを18幼稚園で行なった。
  - ・「読み・書き水準調査」のための調査員を計72名（県・市教育研究所員，県児童相談所員，大学関係者等）に委嘱した。
- 10月・「読み・書き水準調査」のための実施打ち合わせ会議を調査員，幼稚園代表者と次の15会場で行なった。
- （東北）山形県教育研究所，鶴岡市教育研究所，酒田市教育研究所，秋田県教育研究所，青森県教育研究所，岩手県教育研究所，宮城県教育研究所，福島県教育研究所
- （東京）国立国語研究所
- （近畿）兵庫県教育研修所，大阪府科学教育センター，幡磨児童相談所，兵庫・温泉幼稚園，和歌山県教育研修センター，京都府勤労会館
- ・「特定幼児の文字の調査」の第1回定期調査を行なった。
- 11月・東北，東京，近畿の122調査園で「読み・書き水準調査」を行なった。調査期間は10月25日～11月15日。
- ・東京の次の6調査園で「読み・書き水準調査」のり・テストを行なった。青い鳥幼稚園，府中ひばり幼稚園，明成幼稚園，みそら幼稚園，松苔幼稚園，裕和幼稚園
- 12月・東北，東京，近畿の122調査園および被調査者家庭に文字指導に関するアンケート調査を依頼した。
- ・「特定幼児の文字の調査」の第2回定期調査を行なった。
- 2月・近畿の次の4調査園で「読み・書き水準調査」の就学直前テストを行なった。大阪・金塚幼稚園，枚方・浄幼稚園，守口・守口幼稚

園、大阪・育和学園幼稚園

- ・「特定幼児の文字の調査」の第3回定期調査を行なった。

3月・東京の次の4調査園で「読み・書き水準調査」の就学直前テストを行なった。音羽幼稚園、ばら幼稚園、明善幼稚園、亀戸幼稚園

## E 今後の予定

「就学前児童の文字力の調査」の集計は昭和43年度に行なう。また、43年度には「就学前児童の言語能力に関する全国調査」の第2年次として、「就学前児童の語い力の調査」を行なう予定である。

(村石)

# 言語の表現機能と伝達効果の研究

## I 言語表現における場面の効果の研究（継続）

### A 目的・経過

場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点から調べ、あわせて、場面の分析および表現の分析を行なうことを目的とする。場面が表現に影響するもののうち、現在は、「主語の有無と場面の関係」を調べるための研究を進めている。（年報16～18参照）

主語の有無を場面との関係において問題にするばあい、まず、文における主語の役割から問題にしてかかかなければならない。なぜなら、ある主語の省略が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要とすることがわかっていなければならないし、また、ある主語の存在が場面の影響であるというためには、その文の本来の文型では主語を必要としないことが明らかでなければならないからである。そのために、まず「文における主語の役割」の研究から始めることにした。（この研究の段階については年報17～18参照）

この分析のために、種類も豊富で量的にも資料を得やすい、文章にあらわれた使用例を使うことにし、文庫本を材料としてカード化してきた。（カードのとりかたは、年報16参照）41年度までに、話しことば研究室や書きことば研究室とも共同で、49の文学作品から（当研究室分）延べ約30万枚（異なり約1万4千枚）のカードをとって分析してきた。

### B 担 当 者

(1)と(2)は言語効果研究室の高橋太郎が担当し、屋久茂子がこれを助け、(3)は、研究室長の指導のもとに屋久茂子が行なった。

## C 本年度の作業

### (1) 文カードの追加

昨年度まで、文学作品ばかりからカードをとったので、本年度は、論文・解説文のような作品から、延べ約19万枚（異なり約3,800枚）のカードをとった。（これは、話しことば研究室と共同で行なったもので、作品名、選択基準などは、「現代語の文法の調査研究」の項参照）

### (2) 主述関係の分析

昨年度につづいて、「形容詞述語文における主語と述語の関係」の分析を進め、あわせて、「動詞述語文における主語と述語の関係」の分析にはいった。また「は」「も」の使われた文のカードをとりはじめた。

### (3) 「○は○が～」という形式の分析

「○は○が～」のカードをとり、そのうち「～」が形容詞のものについて分類をこころみた。

## D 今後の予定

43年度にいちおうの分析をおわり、44年度には、主語と述語の関係について、報告書にまとめる予定である。（高橋）

## Ⅱ 文の形成過程にあらわれる伝達機能の発達の研究（継続）

### A 目的・経過・担当者・見とおし

言語の表現機能と伝達効果の発達は、幼児の言語の獲得あるいは言語活動の形式の分化の中にさまざまな形であらわれるから、これを、特に幼児の文表現が成立し、文形式が形成されていく過程でとらえようとする。

そのために、(1)伝達機能の単位としての文（センテンス）をとりあげる。  
(2)対象としては、まず到達点としての4～6歳児について行ない、次に発達



的観点に立って1歳から6歳児の問題を扱おうとしている。

言語については、文を構成、陳述の両側面から文法的に分析し、一部形態的な分析も加える。言語行動については、主として伝達機能の側面から分析する。かくして、文法的形式と伝達機能の関係の考察をする、等を目的としている。

本年度はそのうち、次の二つのことを行なった。

1. 41年度に録音、文字化した年長児(40年度の年中児を含むクラス全員)の話しことばをカード約10万枚とカード集80部に作成した。このカード集は40年度に作成した「幼児のことばカード集」(幼稚園のことば資料Ⅰ、Ⅱ)すなわち、年中(1)、年長(1)に続くもので、年長(2)(幼稚園のことば資料Ⅲ)となるものである。その内容については、年報17(90～107頁参照)に実例をあげておいたのと同じ形式のものである。ここで、本年度までの被調査者数をあげておくと、つごう年中児、男26、女20、計46名、年長児男65、女50、計115名となり、同一幼児の数は、転園などもあって、男22、女16、計38名となっている。

## 2. 4～6歳児の文の文法的分析

これについては昨年度は資料Ⅰ、Ⅱを使って、幼児の構文の形式の概観調査を行なったが、問題をもつ箇所が多く、もっと細かく分析する必要を痛感した。そこで、今年度は次の四つに課題をしばって分析することにした。

(Ⅰ) 連体修飾語の用法

(Ⅱ) 補足文の形式

(Ⅲ) 動詞の形態

(Ⅳ) 名詞の格の用法

このうち(Ⅰ)と(Ⅱ)は大久保愛、(Ⅲ)と(Ⅳ)は高橋太郎が担当した。(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)については、一応分析が終わり、その結果をプリントに作成した。この一部については、本年度の仕事としてのちにのべる。(Ⅳ)については分析の途中である。来年度以後のみとおしとしては、次のようなことを考えている。

1. これまでの資料、すなわち「幼児のことばカード集」Ⅰ～Ⅲを使って分析を継続する。課題としては来年度は次のことを考えている。

(1)文末述語の形式(大久保)

(2)従属文の形式(大久保)

(3)名詞の格の用法(高橋)

(4)その他

2. 補充資料の収集およびカード化(主として 年中児), ならびに年小児の資料収集の準備および検討等

3. 「4～6才児の文の構造の研究」(仮題)として45年度にまとめた、など。

## B 本年度のしごと

前にのべた本年度行なった文の文法的分析のうち、(Ⅰ)連体修飾語の用法(Ⅱ)補足文の形式(Ⅲ)動詞の形態について、紙面のつごうでくわしくは報告書(予定)にゆずることになるが、以下にそれぞれの担当者がのべる。

### Ⅰ. 連体修飾語の用法の分析

文の文法的分析として、なぜ、まず連体修飾語の用法の分析にとりかかったかということであるが、次のような理由による。

(1) 連体修飾語は、これまでの研究で2歳前後からしだいに使用できるようになって、一応就学前には、成人ほどでなくてもほとんど使用できると言われている。

(2) 連用修飾語などところがって修飾、被修飾の関係を、文の分析とは独立して研究ができる。最初のとっつきとしては容易である。

(3) 山田孝雄氏をあげるまでもなく衆知のことであるが、「すべて連体格の語はその対象たる体言に対してその観念を限定してその意義をば明確にせむがために附加せしめたる制限的観念をあらわす語にして之が附加せられたるによりて、その対象たる語とこの連体格の語とが一団となりて更に大なる観念団をなすものなり」と『日本文法学概論』にのべている。すなわち体言の意味を、より明確に、あるいは精密に幼児が表現することができるということは、発達のひとつのめやすになると思う。

この連体修飾語の用法を二つに大きく分けて分析してみた。(1)は構造から、(2)は意味の面からである。

#### 1. 連体修飾語の構造

### 1. 1 一語よりなる連体修飾語の構造

この中は、修飾、被修飾の関係が次のようである。年中、年長の用例をあげる。

形 式	用 例	年中（４：７～５：６）	年長（５：５～６：６）
名詞→体言		キクノ ハナ	パピーノ ベンダント
こそあど→体言		コノ ライオン	アソコノ キ
形容詞→体言		キイロイ レッシャ	ワルイ ビョウキ
形容動詞→体言		キレイナ ハナ	タクサンノ シマウマ
連体詞→体言		オオキナ クチ	イロシナ ハナシ
動詞→体言		チガウ フク	ショウドクシタ スプーン
副詞→体言		イチバン サイショ	ズット マエ

これら体言には、形式名詞の「とき」、「ところ」、「こと」、などが多い。こそあどでは前のものを指す連体詞「その」が多く、ついで「この」、また「こういう」も多かった。形容詞では、「わるい」「おっきい」「ちいさい」、形容動詞（以下形動と略す）では「へんな」、連体詞では「いろんな」がよく使われ、これらは年中児より年長児のほうがことばの種類が豊富である。副詞については慣用の特別のものに限られていることはもちろんである。

### 1. 2 二語以上よりなる連体修飾語の構造

この二語以上からなる連体修飾語の構造を五つの形式に分け、用例とともに表にしてみた。この表のうち(3)(4)はこのようにきれいに分けられるかどうか、まだ問題が残っている。また、句や節の形式をもつ連体修飾語も分析が十分なされていないのであるが、一応、４～６歳児の連体修飾語のうち、二語以上の語からなる形式の種類が、年中児、年長児によってどうちがっているかがみられるのではないかと思ったわけである。(72ページ～76ページ)

用 例	年 中 児	年 長 児	備 考
(1) 形 式			
副詞→形容詞→ <u>N</u>	。トッテモ ツヨイ <u>ライオン</u>	。イチバン タカイ <u>トコロ</u>	N=名詞, 被修飾語のNは広く体言を指す。
副詞→形動→ <u>N</u>	。イチバン スキナ <u>トキ</u>	。イチバン スキナ <u>コト</u>	<u>      </u> =被修飾語
C→ <u>N</u>	。オミコシ カツイダ <u>ヒ</u>	。クルマガ トオル <u>ミチ</u>	→=これ全体が修飾語
	。オランキノ イイ <u>ヒ</u>	。オハナ(娘)ガ オッキイ <u>ハカセ</u>	C=句, 節, 文的なもの
	。シマウマガ タクサン <u>イル</u> <u>トコ</u>	。ソラヘ ノボッタ <u>オケヤサン</u>	の形式名詞を修飾するものが多い。Cの中の分析はここではない。 以下も同じ。
(2) 形 式			
<u>N</u> → <u>N</u> → <u>N</u>	。オトコノ コノ <u>マンガ</u>	。ウチノ トウサンノ <u>イトコ</u>	かっこの中は, その中で修飾関係をもっていることをしめす。
<u>N</u> → <u>N</u> → <u>N</u>	。ボクノ オニイサン トキノ <u>ホン</u>	。パイエルノ (キイロイ ホンノ) <u>ナナジ</u> <u>ユウゴバン</u>	K=こそそあど
<u>K</u> → <u>N</u> → <u>N</u>	。コノ ツギノ <u>ニチヨウビ</u>	。オトウサンノ オトモダチノ オジサンノ <u>ジドウジャ</u>	
<u>K</u> → <u>N</u> → <u>N</u>		。ソノ アクルヒノ <u>アサ</u>	
<u>K</u> → <u>N</u> → <u>N</u>		。ソノ (キレイナ ヒトノ) <u>オトウサン</u>	
形容詞→ <u>N</u> → <u>N</u>		。ソノ キュウチャンノ ハナシノ <u>マエ</u>	
		。アツイ クニノ <u>オバケ</u>	
		。 (イチバン タカイ) ヤマノ <u>ホウ</u>	

用 例 形 式	年 中 児	年 長 児	備 考
連体詞→N→ <u>N</u> 副詞→N→ <u>N</u> 動詞→N→ <u>N</u> C→N→ <u>N</u>	◦イチバン ウエノ <u>ソ</u> ◦ネエチャ <u>ソ</u>	◦イロナ イロノ <u>ハッパ</u> ◦イチバン ウシロノ <u>シマウマ</u> ◦チガウ シトノ <u>オウチ</u> ◦イズモサンテ イウ オウチノ <u>トナリ</u> ◦モウ オマエハ クビダッテ イワレタ ヒトノ <u>ナマエ</u> ◦クマニ ノッテ トリイヲ ワタッテ ハ チマンサマニ オマイリシタ トキノ <u>オハ</u> <u>ナシ</u>	
(3) (4) N→ <u>N→N</u> K→ <u>N→N</u> 形容詞→ <u>N→N</u> 形動→ <u>N→N</u>	◦フタリノ <u>オトコノ ヒト</u> ◦ソノ <u>マルン ナカ</u>	◦オミセノ <u>ウインドウノ ガラス</u> ◦ソノ <u>オンナノ コ</u> ◦ワカイ <u>オトコノ ヒト</u> ◦ヒカルヨウナ <u>オンナノ コ</u> *一応形動にしておく	

形 式	用 例	年 中 児	年 長 児	備 考
C → <u>N → N</u>		<ul style="list-style-type: none"> <li>ブルートトイウ <u>オトコノコ</u></li> <li>ニンゲンガ <u>カブッタ</u> <u>ライオ</u></li> <li><u>ソノカワ</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ヨシコチャンテ <u>イウ</u> <u>ニネンセイノオ</u></li> <li><u>ネエサン</u></li> <li><u>ソレヲ</u> <u>ミタ</u> <u>トナリノ</u> <u>オジサン</u></li> </ul>	この形式も多い。この形式をCとよぶべきかどうか問題が残る。
(1) N → <u>N → N</u> N → <u>K → N</u> K → <u>K → N</u> N → <u>形容詞 → N</u>		<ul style="list-style-type: none"> <li><u>コノ</u> <u>コウイウ</u> <u>ハネ</u></li> <li><u>ヨウチエンノ</u> <u>タノジイ</u> <u>ホン</u></li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><u>オモチャノ</u> <u>ブラゼデルノ</u> <u>センシャ</u></li> <li><u>ガラスノ</u> <u>コウイウ</u> <u>トコ</u></li> <li><u>トウキョウタワーノ</u> <u>アカイ</u> <u>トコロ</u></li> <li><u>コパルトノ</u> <u>イチバン</u> <u>オオキイ</u> <u>ニイサン</u></li> <li><u>アソコノ</u> <u>シロイ</u> <u>セン</u></li> <li><u>アンナ</u> <u>オッキイ</u> <u>シミキ</u></li> <li><u>オネイサンノ</u> <u>キレイナ</u> <u>ヨウフク</u></li> <li><u>ソノ</u> <u>ショウジキナ</u> <u>オジイサン</u></li> <li><u>ドロソ</u> <u>トコロ</u> <u>スダ</u> <u>ソバ</u></li> </ul>	(1)とちがい毎修飾語の前の修飾語が形容詞的なの。
K → <u>形容詞 → N</u> 連体詞 → <u>形容詞</u> → <u>N</u> N → <u>形容詞 → N</u> K → <u>形容詞 → N</u> N → <u>副詞 → N</u>		<ul style="list-style-type: none"> <li><u>コウイウ</u> <u>ホソイ</u> <u>カイダン</u></li> </ul>		* この副詞の意あいまい。

用 例 形 式	年 中 児	年 長 児	備 考
K → <u>副詞</u> → N N → <u>動詞</u> → N N → <u>C</u> → N C → <u>形容詞</u> → N	◦ ジュウホイクエンノ <u>チガウ</u> * ヨウチエン <u>二箇所</u> に <u>國</u> があるの でもう一つ別の意	◦ ソコノ <u>チョウド</u> <u>マンナカ</u>   ◦ ツギノ <u>マケタ</u> <u>シト</u> *   *「ヒト」 ◦ マチノ <u>トコロ</u> ノ <u>ニンゲンガ</u> <u>トル</u> <u>ミチ</u> ◦ チャッピョウッテ <u>イウ</u>   <u>チッチャイ</u> <u>デシ</u> ◦ イソップエバナシッテ <u>イウ</u>   <u>イロシナ</u> <u>オモシロイ</u> <u>オハナシ</u> ◦ オナガガワッテ <u>イウ</u>   <u>トッテモ</u> <u>フカ</u> <u>イウキワガ</u> <u>アッテモ</u> <u>ウカバナイ</u> <u>カワ</u> * ◦ ミンナノ <u>ハイッテル</u> <u>アタラシイ</u> <u>オウチ</u>	Cについては問題が残っている。 * もっとと分析が必要。
(4) N <u>形容詞</u> → <u>N</u> 形動 <u>形容詞</u> → <u>N</u>	◦ キレイナ <u>ピカピカノ</u> * *擬態語 <u>クツ</u>	◦ モウ <u>センノ</u> <u>フルイ</u>   <u>オヒサマ</u> <u>グミ</u> ◦ ヤキュウジウヨミタイナ <u>ヒロイ</u>   <u>トロ</u> *→ 応形動にしておく	修飾語の部分が似たことを表現している二語からなっている。

用 例	年 中 児	年 長 児	備 考
形 式			
(5) $N \rightarrow [N+N]$		<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ アトムノ [オトウサント オカアサン]</li> <li>◦ ガッコノ [センセエトカ セエト]</li> <li>◦ カタト アシノ [トコロ]</li> <li>◦ キイロトカ ミドリノ [ホウ]</li> </ul>	並立関係の語を含むもの。「セ」や「ヤ」の助詞をもつものもある。
$N+N \rightarrow [N]$	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ カメト ウサギノ [オハナシ]</li> </ul>		



このほか、かかりかたのはっきりわからない、意味の不十分な例がある。たとえば、「イチバン ウエノ タカイ オヤマ」(年中), とか、「コッチノ ズートノ マガリカド」(年長), 「オコメノ オオキイ サゲルノ フクロ」(年長), など。

これら分類から言えることは、(1)三語以上の名詞よりなる修飾語をもつ形式が年中に少ない。(2)形容詞的修飾語を含む二語以上の修飾語が年中に少ない。(3)C的なものは成人より複雑さにおいて劣るように思われるが、年中では(1)と(3)の(イ)の形式だけで(2)と(3)の(ロ)の形式はなかった。(1)のうち、形容詞述語文をもつ連体修飾の形式は、年中2、年長3と少ない。(4)分類の(4)は全体的に少ない。ただ年中児の資料が年長児に比較して少ないので、来年度はこれをおぎなうて、これらの妥当性を調べてみたい。

## 2. 連体修飾語の修飾、被修飾の意味的關係

連体修飾語のうち、名詞と名詞のくみあわせのばあいの修飾、被修飾の意味的關係が幼児のばあい年中、年長児でどうなっているかをみる。分類については、まだ不十分であるが、これでもこの関係の大体はわかるのではないかと思う。大きく五つに分け、用例をあげながらみていくことにする。

### 2. 1 修飾語が被修飾語の所有者あるいは所属を規定する

これは、修飾、被修飾の関係を転換したばあい、修飾語が「……ノダ」になるものの類。たとえば「ワタシノ オウチ」のばあい、「そのおうちはおたしのだ」という関係になるものをいう。この中には次の類がみられる。所有、所属の関係のものは他のものに比べて多い。

#### 2. 1 1 関係を規定する。

年 中 児	年 長 児
◦ <u>ボクノ</u> イモウト	◦ <u>オネエチャンノ</u> オトモダチ
◦ <u>パピーノ</u> ナカマ	◦ <u>オレタチノ</u> ケライ
	◦ <u>マナミチャンテ</u> イウ コノ オカアサン

#### 2. 1 2 具体物の所有者を規定する。

◦ オトウチャンノ オートバイ

◦ アタシノ オウチ

◦ ヒロチャンノ オヨウブク

◦ パパノ メガネ

◦ オトウサンノ オトモダチノ オジサンノ  
ジドウシャ

## 2. 1 3 所属を規定する。

### 2. 1 3 1 生物の所属

◦ オウサマグミノ フミチャン

◦ ウチノ オネエサン

◦ ホイクエンノ ミンナ

◦ カキノ タネ

◦ マンガノ ナカノ スーパージェッター

### 2. 1 3 2 具体物の所属

◦ ハイジャサンノ ハコ

◦ マッチノ ボウ

◦ カイシャノ ジドウシャ

◦ オリンピックノ メタル

◦ オミセノ ウインドウノ ガラス

### 2. 1 3 3 言語作品の所属

◦ イチガツゴウノ アンデルセ  
ン

◦ シンブンノ マンガ

◦ オトナノ バングミノ オハナシ

## 2. 1 4 用途を規定する

◦ クスリノ ビン

◦ アミノノ キカイ

## 2. 1 5 本体を規定する

### 2. 1 5 1 ものの所属する本体

◦ オシロノ マド

◦ トラックノ ココ

◦ ヨウチエンノ イリグチ

◦ キシヤノ ヤネ

◦ ウチン ナカノ ドッカ

### 2. 1 5 2 部分の所属する本体

◦ ダレカノ カオ

◦ ブタノ オシリ

◦ モウ オマエハ クビダッテ イワレタ ヒ  
トノ ナマエ

## 2. 1 5 3 現象の所属する本体

- |                     |                    |
|---------------------|--------------------|
| ◦ <u>マホウツカイノ</u> コエ | ◦ <u>タイヨウノ</u> ヒカリ |
|                     | ◦ <u>ラッパノ</u> オト   |

## 2. 1 5 4 行為の所属する本体（主体）

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| ◦ <u>パバノ</u> オシゴト | ◦ <u>アタシタチノ</u> ツナヒキ |
|                   | ◦ <u>オカアサンノ</u> ハナシ  |

## 2. 1 6 所属する職業、職場の種類を規定する。

- |                              |                        |
|------------------------------|------------------------|
| ◦ <u>バトロールカーノ</u> ウンテン<br>シュ | ◦ <u>ビョウインノ</u> カンゴフサン |
| ◦ <u>ピアノノ</u> センセイ           | ◦ <u>ヒコウキノ</u> パイロット   |

## 2. 1 7 場所を規定する

これは次の2. 2に近い。修飾、被修飾が「……にある」「……にいる」で結べる。たとえば、「イナカノ エッチャン」は、「いなかにいるえっちゃん」というふうに。

### 2. 1 7 1 生物の所属する場所

これら2.17全部は年中に少ない。

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| ◦ <u>イナカノ</u> エッチャン | ◦ <u>サイタマケンノ</u> ヒト   |
|                     | ◦ <u>ドウブツエンノ</u> ワニ   |
|                     | ◦ <u>オウチノ</u> チカクノ ヒト |

### 2. 1 7 2 具体物の所属する場所

- |                                     |
|-------------------------------------|
| ◦ <u>サンジョウノ</u> テレビ                 |
| ◦ <u>ウミノ</u> カイガラ                   |
| ◦ <u>ハズレノ</u> ホウノ ニカイノ マンナカノ<br>オウチ |

### 2. 1 7 3 空間の所属する場所

- |                       |   |
|-----------------------|---|
| ◦ <u>ヨコハマノ</u> ドウブツエン | ◦ <u>シゲミノ</u> ミズ                                      |
|                       | ◦ <u>チバノ</u> ウミ                                       |
|                       | ◦ <u>ヘイキショウノ</u> コウジシテルネ コッチガ<br>ワノ ジドウシャ トオル トコロノ ミチ |

## 2. 2 修飾語が被修飾語の位置や時間や順序や数量を規定する

これは修飾語、被修飾語の関係が「……にある」「……である」で結べるもの。2. 1の2. 1 7に近い。

### 2. 2 1 位置関係の規定

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| ◦ <u>マエノ</u> ヘヤ   | ◦ <u>ハジッコノ</u> カイダン |
| ◦ <u>トナリノ</u> オウチ | ◦ <u>ムコウノ</u> ヤマ    |
| ◦ <u>ウシロノ</u> アシ  | ◦ <u>カタホウノ</u> クツ   |

### 2. 2 2 時の規定

- |                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| ◦ <u>コンドノ</u> ニチヨウビ     | ◦ <u>オトトイノ</u> ニュース         |
| ◦ <u>ニジュウニジノ</u> カネ     | ◦ <u>サンジノ</u> ブーフーウー        |
| ◦ <u>ウンドウカイン</u> トキノ コト | ◦ <u>ママノ オセンタクスル トキノ</u> ノリ |

### 2. 2 3 順序の規定

- |                   |                     |
|-------------------|---------------------|
| ◦ <u>シタノ</u> イモウト | ◦ <u>ツギノ</u> アサ     |
| ◦ <u>ツギノ</u> ページ  | ◦ <u>サイショノ</u> オハナシ |

### 2. 2 4 数量の規定

- |                    |                       |
|--------------------|-----------------------|
| ◦ <u>コノクライノ</u> コイ | ◦ <u>ニヒキノ</u> ネコ      |
| ◦ <u>サンニンノ</u> コドモ | ◦ <u>フタリノ</u> オトコノ ヒト |

## 2. 3 修飾語が被修飾語の属性を規定する

これは修飾、被修飾の関係を転換したばあいには、修飾語が「……ダ」になるものの類で修飾語の性質が形容詞的なものである。すなわち「アバレンボウノコ」は「その子はあばれんぼうだ」となる。この類は年長に比べて年中に少ない。形容詞的修飾語の種類が一語の修飾語その他でも少なかったのに通じるようだ。形容詞・形動の一語の修飾語のばあいには、部分、行為、現象、名称、などの属性規定があったのに、名詞の修飾語のばあいそれらがみられなかった。今後の研究に待つところである。2. 3 1～2と2. 3 3とは多少ニュアンスがちがいが、前者は、2. 1に近いようで、年中にも多いが、後者は

年中に少なくなっている。

### 2. 3 1 種類を規定する

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| ◦ <u>キクノ</u> ハナ    | ◦ <u>ヒマワリノ</u> ハナ    |
| ◦ <u>オモチャノ</u> トケイ | ◦ <u>オモチャノ</u> ボーリング |

### 2. 3 2 材料の種類を規定する

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| ◦ <u>テチュノ</u> カギ | ◦ <u>カミノ</u> コンチュウ |
| ◦ <u>ハッパノ</u> フネ | ◦ <u>オカシノ</u> クニ   |

### 2. 3 3 属性を規定する

#### 2. 3 3 1 生物の属性

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| ◦ <u>オンナノ</u> コ | ◦ <u>オデブチンノ</u> オカアサン |
|                 | ◦ <u>ワルモノノ</u> ハカセ    |

#### 2. 3 3 2 具体物の属性

- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| ◦ <u>ピンクノ</u> レッシャ | ◦ <u>コガタノ</u> デンチ   |
|                    | ◦ <u>ダイダイイロノ</u> テツ |

#### 2. 3 3 3 その他の属性

- |                    |
|--------------------|
| ◦ <u>フツウノ</u> マンガ  |
| ◦ <u>フツウノ</u> ジ(字) |

## 2. 4 修飾語が被修飾語の成立に関係する度合の強いもの

2. 4 1～2 までは被修飾語が形式的な名詞なので、修飾語がないとこの関係が成立しない。必需品のせいかな年中・年長ともこの類は多い。2. 4 3～6 が年中に少ないのは、語彙面での発達がまだ不十分のせいではなからうか。これまでみたところでも被修飾語の部分に、具体物、人間等が多く、現象、抽象語、部分、側面などが少なかったことから言えそうである。2. 4 7 は被修飾語がサ変動詞となる名詞や動詞派生の名詞で、その行為の対象を修飾語がしめして、成立に関係している。これも修飾語なしではすまされないの、次の 2. 4 8 の内容を示す類とともに多い。修・被の関係は「……に関する」「……について」で結ばれる。用例をあげよう。

### 2. 4 1 形式名詞の成立に関係する。

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| ◦ <u>ドブン</u> トコロ | ◦ <u>タイフウノ</u> トキ  |
| ◦ <u>アシノ</u> マンマ | ◦ <u>ヤクソクノ</u> トオリ |

## 2. 4 2 位置関係の成立に関係する

- |                      |                              |
|----------------------|------------------------------|
| ◦ <u>ヤマノ</u> テッペン    | ◦ <u>モリノ</u> ナカ              |
| ◦ <u>ショウテンガイノ</u> ウエ | ◦ <u>センタクヤサンノ</u> トナリ        |
|                      | ◦ <u>デンキノ デンセンノ クモノスノ</u> ウエ |

## 2. 4 3 順序関係の成立に関係する

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| ◦ <u>アナタノ</u> パン | ◦ <u>ボクノ</u> シタ   |
|                  | ◦ <u>セノ</u> ジュンパン |

## 2. 4 4 数量関係の成立に関する。

- |                     |                               |
|---------------------|-------------------------------|
| ◦ <u>オトナノ</u> コノクライ | ◦ <u>オトコノ コノ</u> フタリ          |
|                     | ◦ <u>バイエルノ キイロイ ゴホンノ</u> ナナジュ |
|                     | ウゴパン                          |

## 2. 4 5 時間関係の成立に関係する

- |                     |
|---------------------|
| ◦ <u>オマツリノ</u> ヒ    |
| ◦ <u>ナツヤスミノ</u> ヒルマ |

## 2. 4 6 抽象的なことばの成立に関係する

- |                    |
|--------------------|
| ◦ <u>テッポウノ</u> カタチ |
| ◦ <u>オバケノ</u> ヤク   |

## 2. 4 7 行為の対象をしめして成立に関係する

- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| ◦ <u>ナツヤスミノ</u> ベンキョウ | ◦ <u>ピアノノ</u> レンシュウ |
| ◦ <u>ネズミノ</u> マネ      | ◦ <u>オモチャノ</u> カタづけ |

## 2. 4 8 言語作品（精神行為など）の内容を示めして成立に関係する

- |                     |                          |
|---------------------|--------------------------|
| ◦ <u>オバケノ</u> ハナシ   | ◦ <u>ノーベルショウノ</u> ニュース   |
| ◦ <u>チューリップノ</u> ウタ | ◦ <u>ウチュウボウエイタイノ</u> エイガ |

## 2. 5 修飾語と被修飾語が同格の関係になっているもの

これは年中にみられなかった。

- センサーノ キャンデーセンセエ
- ネコノ クック
- オトモダチノ テッチャンテ イウ ヒト

この連体修飾語の分析から言えることは以上のものであるが、年中にみられなかった形式、および意味的關係も、もう少し年中の資料を集めたら出てくる用法であるかもしれない。これは来年度に年中の資料を集めることになっているので、その時を待ちたい。ただ、あらわれなかった用法は、幼児にとってはむずかしい形式であり、意味的關係であるとは言えるだろう。もし、発達をみようとするなら、連体修飾語の初出が2歳前後と言われているところからも、年代をさげての調査が必要のように思われる。また、年中にあらわれなかったD形式の連体修飾語については、年長にも用例が少なかったところから、もう少し高い年齢で分析しなければならないのではなかろうか。問題の残るところである。

## Ⅱ. 補足文の形式の分析

幼児のことばの録音を文字化し、文の分析をするばあい、話しことばのため、文の認定に困るときが往々ある。そのため、補足文の形式をとり出して、どのような種類があるかをたしかめておくことは、今後の作業上有効と思うので、その処理を行なったわけである。国立国語研究報告18『話しことばの文型(1)』の70～82ページにも、この関係のことが文の認定の一環としてとりあげてある。それらを参考にしながら、まず、補足文を大きく二種類に分けた。すなわち、(1)文の成分の欠けてるものの追加補充。これはいわゆる倒置の形式のものである。(2)文の成分の補充でなく、訂正および繰返し、あるいは内容の追加のもの。これらの中を細分して、幼児の用例を年中、年長児に分けてあげてみる。

### 1. 文の成分の欠けてるものの追加補充（倒置的なもの）

年                      中                      年                      長

#### 1. 1 主語の補充（助詞「が」「は」あるいはそれらの省略形、連体修飾語

つき、並立関係などをもつ主語の補充)

- |   |   |
|---|---|
| ◦ ソイデ <u>ネ(逃)</u> ギテ ユクノ、<br><u>シマウマガ</u> 。 | ◦ ミギノ ホウナノ、 <u>レイコノ</u> オウチ。<br>◦ ウエニ トビアガッチャッタノ、 <u>ネズミト</u><br><u>クマガ</u> 。 |
|---|---|

1. 2 対象語の補充 (いわゆる目的語、対象語)

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| ◦ シラナイヨ、 <u>ソレモ</u> 。 | ◦ アンマリ ツカナイ、 <u>ウソハ</u> 。<br>◦ ミズ アゲテンノ、 <u>オハナニ</u> 。<br>◦ ダケド ワカンナイモン、 <u>デキルカ</u> 。 |
|-----------------------|--|

1. 3 場所の補充

- |  |  |
|--|--|
| ◦ ハジメ イシガ アッタンダ<br><u>ッテ</u> 、 <u>ココニ</u> 。<br>◦ ママネ オシゴト シテルノ、<br><u>オウチデ</u> 。 | ◦ ソイデ デチャッタ、 <u>タタミノ</u> <u>ウエニ</u> 。<br>◦ ナンカ ツクルデショ、 <u>ホイクエンデ</u> 。 |
|--|--|

1. 4 時の補充

- |   |  |
|---|--|
| ◦ イッパイ 行ッタンダヨ、 <u>ヤ</u><br><u>スンダ</u> トキ。 | ◦ ドッカモ イッタヨ、 <u>ニチヨウビ</u> 。<br>◦ ロクサイニ ナッタンダ、 <u>アノ</u> <u>キシヤン</u><br><u>ノツテル</u> トキ。 |
|---|--|

1. 5 理由の補充

- |  |  |
|--|--|
| ◦ ワスレチャッタ、 <u>イッパイ</u><br><u>アルカラ</u> 。<br>◦ モウ ワスレチャッタナ、 <u>キ</u><br><u>ヨウ</u> <u>ヤッタケド</u> 。 | ◦ ネズミガ ヒカレチャッタノ、 <u>コッチカラ</u><br><u>トラックガ</u> <u>キタカラ</u> 。<br>◦ オテテガ アカチャンヨリモ ミジカイノ、<br><u>コドモダケド</u> 。 |
|--|--|

1. 6 連体修飾語の補充

- |                                    |                             |
|------------------------------------|-----------------------------|
| ◦ ウンテンシュニ ナリタイヨ、<br><u>デンシャノ</u> 。 | ◦ レコードガ アルシサ、 <u>パピーノ</u> 。 |
|------------------------------------|-----------------------------|

1. 7 連用修飾語の補充

- |                          |                             |
|--------------------------|-----------------------------|
| ◦ オモチャ ツクル、 <u>チット</u> 。 | ◦ ムズカシイ ジ ナイ、 <u>ゼンゼン</u> 。 |
|--------------------------|-----------------------------|

1. 8 独立語の補充 (陳述的な語、接続詞などを含む)



- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>ダ(ラ)イオンガ イチバン ツヨインダ、ホントハ。</u></li> <li>◦ <u>シマウマガ ウシロアシデ ケツテ コロンジャッタノ、コレ。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>オテンキニ ナッタカラ マガッテンノ、コレ。</u></li> <li>◦ <u>ハヤトガ ダレカニ ハナヲ モラッチャッタノ、ソシタラ。</u></li> </ul> |
|--|--|

## 1. 9 これらの重なってる補充

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>フタツンカナイ、タッタノ、ボクンチハサ。</u></li> <li>◦ <u>アソンデンノ、ヒトリデ、オモチャデ。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>ユウカチャン オソインダヨ、タベルノ、オニギリ。</u></li> <li>◦ <u>ミル トキダッテ アルヨ、ヨル、ニュースバッカリダカラ。</u></li> </ul> |
|--|--|

## 2. 文の成分の補充でなく、訂正および繰返し、あるいは内容の追加

### 2. 1 内容の追加

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>オトコダケド ハナ(鼻)ガ ウエニアンノ、ビジンナノ。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>テツワンアトムダノ テツジンニジュウハチゴウダノ、ショウネンマガジンダノネ、オトコノヨ。</u></li> <li>◦ <u>オハナガ オッキイ ハカセガ イルノ、オヒゲハヤシテ。</u></li> </ul> |
|--|---|

### 2. 2 訂正あるいは補充訂正による追加

- |   |   |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>アソンデル トキ ス(つ)トム ヘンジ シラレルノ、アジャアジャトカ。</u></li> <li>◦ <u>アタラシイ ノリモノガ デキタノ、タコ。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>テレビデ イウ トキ アル、ニュースデ。</u></li> <li>◦ <u>ソイデ! シトガ ノッカッタタ、オッキイシト。</u></li> </ul> |
|---|---|

### 2. 3 文末のことばの訂正

- |  |  |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>ライオンガ シマウマ ミツケタカラ オイカケタ、オイカケヨウト オモッタノ。</u></li> <li>◦ <u>マッスグニ タッタンダヨ、タッタノ。</u></li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>オミズ アゲタラネ、オミズ アゲタノ。</u></li> <li>◦ <u>コオリ タベタノ、タベテ、アイスクリームタベタノ。</u></li> </ul> |
|--|--|

## 2. 4 くりかえしの追加

- |  |   |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>チャンバラゴッコ</u> オジイチ</li> <li>ヤント バッカリ マイニチ</li> <li>シテンノ、<u>チャンバラゴッコ</u>。</li> <li>◦ オミズ ヤッタラ <u>マタ</u> ノ</li> <li>ビチャッタノ、<u>マタ</u>ネ。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ <u>ナカニ</u> ニンゲンガ ハイッテンノカナ、<u>ナ</u></li> <li><u>カニ</u>。</li> <li>◦ ソノ ナカニ ヒトリ オクサマハ <u>マジ</u>ョ</li> <li><u>ガ</u> イタノ、<u>マジ</u>ョ。</li> </ul> |
|--|---|

このような分類をした結果、次のことがわかった。すなわち1では、1.4の時の補充、1.5の理由の補充、2では、2.1の内容の追加、2.2の補充訂正による追加の形式が、年長で多く、年中で少ない。2.4のくりかえしによる追加は年中にも多い等である。

1の形式、いわゆる倒置の形式は、大人でも同じで、話しぐせも影響するので、これらの多少は発達のめやすにはならないと思う。ただ、理由の補充は、成分の補充とはいえ、倒置とは言いきれない面もあるので、この補充の多少では、案外発達がみられるかもしれない。時の補充についても、語彙の発達がからむので、発達のめやすになるかもしれない。2の内容追加、訂正補充が年長に多いことは、発達ではないかと思う。しかし、これも、理由の補充と同様、正常な語順の文の構造の分析をした上で、もう一度、この問題にかえて分析してみなければ、これだけではなんとも言えない。

(大久保)

## Ⅲ. 動詞の形態の分析

4～6才児(「幼児のことばカード集(Ⅰ)(Ⅲ)」による、つまり、40年度の年中児、及び、それと同一児童である41年度の年長児)が使用して、この資料にある動詞全部を、その形によって分類し、それぞれの形についてその用法をしらべ、「4～6才児の使用した動詞の形態一覧(第1稿)」という表をプリントにした。その見本として、表の中から第2中止め形(「して」の形)の部分を示す。(89ページから95ページまで)

動詞の形態を分析するにあたっては、「文法的な形式と文法的な意味の統

一としての形態」というとらえかたをし、その形態を

A 文法的派生語およびそれに準ずるもの

B 語形

C むすび (copula), つなぎ (接続助詞) のついたもの

の三つに分けて記述した。<sup>注)</sup>

A・B・Cは、それぞれ次のようなものをふくむ。

A—I たちば動詞 (voice)—(I)うけみ, (II)使役 (III)可能

II やりもらい動詞—(I)してやる (II)してもらう (III)してくれる

III すがた動詞 (aspect)—(I)している, してる (II)してある

(III)してしまう, しちゃう (IV)してくる

(V)していく (VI)すがたのくみあわせ

(付)すがたをあらわす複合動詞

VI もくろみ動詞—(I)してみる (II)しておく, しとく

(付)しようとする

V 派生形容詞—(I)したい (II)しそうな

付 くみたてた動詞—(I)～なる, ～する (II)することができる

(III)することがある (IV)するときがある

B—I いいおわり形—(I)断定形 (II)意志形 (III)命令形・依頼形

(VI)推量形

II 中止め形—(I)第一中止め形 (II)第二中止め形 (III)うちけしの

中止め形

(付I)したり

(付II)しながら

---

注) この分析では、明星学園国語部著「にっぽんご 4の上」(1967年)および教育科学研究会東京国語部会・言語教育研究サークル著「文法教育—その内容と方法」(1963年)(ともに妄書房発行)の二書から、その基本的な考え方と多くの用語を借りた。

Ⅲ 条件形—(Ⅰ)したら (Ⅱ)すると (Ⅲ)すれば (Ⅳ)しちゃ  
(Ⅴ)しても (Ⅵ)したって (Ⅶ)うちけしの条件形  
(付)してから、するまで、しに、するには

Ⅳ 連体形—(Ⅰ)ふつうの用法 (Ⅱ)とくべつの動詞 (Ⅲ)形式名詞、  
その他  
(付)動名詞

Ⅴ とりたて形—(Ⅰ)「して」「したり」などのとりたて  
(付Ⅰ)連体形+「だけ」「ばかり」  
(付Ⅱ)体言的なとりたて

C—Ⅰ むすび、終助詞などのついたもの—(Ⅰ)むすびなどのついたもの  
(Ⅱ)「の」「んだ」などのついたもの (Ⅲ)終助詞な  
どのついたもの

Ⅱ つなぎ、「とき」「うち」などのついたもの—(Ⅰ)つなぎのついたもの  
(Ⅱ)「とき」「うち」などのついたもの

この分析の結果、第二中止め形についてもみられるように、4～6才児では、おとなにみられる用法の大部分があらわれることがわかった。ただ、これは、被調査全体のなかに一つでも使われれば4～6才児に使われたということになるので、一人一人についてみれば、こんなにそろわないだろう。しかし、この研究の現段階の目標が、就学前の幼児の言語能力の到達点としての年長年中児の使用言語の分析にあるので、これでも、まだ資料が足りないと考えている。特に問答形式で資料をとっているため、モダリティーに制限をうけ、いいおわり形におけるムードの種類など、きわめて不満足である。

この形態分析は、43～44度分に追加する資料によって、より充実させて、45年度に、他の項目の分析とあわせて、報告書にする予定である。なお、この分析は、それ自身の意義とともに、次に予定している、より年少の幼児の言語の分析や、個々人の言語獲得の過程の分析などのために、「分類項目」を提供するという意義をもつものとして、進めているものである。

(高橋)

動詞の形態一覽 (見本——BⅡ(Ⅱ)第二中止め形)

用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
1. 先行する動作			
(1) 先行する動作	○アサネー オキテネー, ソイデ ヨウチエンニ キタノ。	○ウラダチノ ソトニ ウメテ, ソトイ トビダシテネー, …… ○ウサギガ ネムツテネー, ソレ カラ, カメガ, マッスダ, イッテ ネー, ……	次の動作と主体が同じ。これが ひじょうに多かった。 次の動作と主体が異なる。これ は、少なかった。
(2) 先行動作が原因とな る。	○カメハ ノロノロ イッテ マ ケタケド, …… ○ダンブカーガ キテネ, パー ト ヤラレチャッタノ。 ○ワルセノト オセツテ, ムワイ チャッタノ。	○ドコロコウジヲ ヤッテル ト コデネー アソンデ, ドロダラケ ニ ナツテネー, …… ○タイヨウガ テッテネ, ダリア ヒライタノ。 ○ライオンガ アキラメテ カエ ッテ イッタノ。	次の動作と主体が同じ。   次の動作と主体が異なる。   主体が同じであるものには、心 理的な原因を示すものが多い。

◇心理的な原因

用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
(3) 先行動作が手段となる。	○ミズ <u>カケテ</u> コウイウ オハナニ シタノ。	○(桃を)キッテ タベヨウ。	(3)~(5)は、みな次の動作と主体が同じ。
(4) 先行動作の結果が場所を規定する。	○ハタヅミノ トコ <u>イッテ</u> , オニギリ タベテネー, ……	○マエニ <u>デテ</u> タイソウシタリネ……	移動動詞である。
(5) 先行動作の結果がようすを規定する。	○オミコシ <u>カツイデ</u> ネー, ソトガワニ <u>デテ</u> ネー, ○ジドウシャニ <u>ノッテ</u> , ウチニカエッタノ。	○スイトウ <u>ジョッテ</u> , クツハ <u>イテ</u> カエッタノ。 ○スワッテ マッテンノ。	結果動詞である。
2. 同時に並立する動作や状態 (1) 対等の並立	○(宇宙エースは) <u>アシガ アッテ</u> <u>テガ アルノ</u> 。  ○ババガ <u>ゴルフシテ</u> , ソイデ <u>ボクタチハ</u> , オハナ <u>ツンダノ</u> 。	○カボチャヲネ <u>バシヤニ シテ</u> <u>シロイ ネズミヲ ウマニ シテ</u> , …… ○ココニ <u>ライオンガ イデサー</u> <u>ソコニ シマウマガ イデサー</u> , ……	主体が同じ。少なかった。  主体が異なる。

用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
(2) いっしょにおこなう 動作	○ワソワソガ キタネー, (ねずみ) <u>フルエテ</u> <u>ネギテ</u> ソノ。 (~~~~逃げ)	○デンドリガエリシタリ シテ, <u>アソソデ</u> (テレビを) ミテンノ。	同一主体の動作であるが、あとの動詞が主たる動作をあらわし、「して」は、ようすをあらわす。「しながら」に近い。
(3) 前提となる存在	○トナリニ イジワルノ オバア サンガ <u>イテネ</u> , イジノ オカシ モラッタノ。	○ハガ サンボン <u>アッテ</u> , デッ パッテンノ。 ○オウチニ ショウチャンテ イ ウノガ <u>イテネ</u> , オトコノコデ, ..... ○マンガガ <u>アッテ</u> , ソレヲ ミ ルノ。	主体が同じ。少なかった。        主体が異なる。
(4) 理由となる存在や状態		○アシガ オオキスギテ, (くつに) <u>ハインナクテネ</u> , ..... ○ソノ コトバツカシ <u>アタマニ</u> <u>アッテネ</u> , ソウイウ コト <u>ワス</u> <u>レチャッタノ</u> 。	理由も前提であろう。 主体が同じ。少なかった。

用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
3. 同一の動作 (1) ようす  (2) 具体化  (3) 抽象化	○ソコニ トラクガ アッテ, ボカンテ プツカッチャッタノ。	○シマウマガ ミンナ イッパイ イテネ, ソイデ ドレニ キメモ ウカ ロカンナイ。	主体が異なる。
	○ネズミノ トコ オイカケテ, ドウロマデ キテネ, …… ○ダレカ クンダヨ, アト ツイ テ。 ○コウヤッテ タマヲ ナゲテ, …… ○カケッコシテ アソボウ。 ○マチガエテ ハイチャッタノ。 ○クマガ ネズミノ マネ シテ トンデ イッチャッタノ。	○コウシンンテネー オヘヤニ ハイッテネー, …… ○トンデ イシノ トコ マワッ テ, …… ○コウヤッテ イレテネ, …… ○ネッコロガッテ, シンダ マネ ヤッテネ, …… ○バケテネ オカアサンニ ナッ テネー, …… ○ウソ ツイテ, サヨウナラッテ ユッタノ。 ○バケレンタイカイッテ ユッテ	3はもちろん同一主体である。 同じ動作を, 別の側面からのべ て, ようすをえがく。  同じ動作を, より具体的のべ て, くわしくする。  同じ動作を, より抽象的のべ て, 解説する。  無人称の「言って」は, 名称を



用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
		ネ, イロソナ オバケガ イッパ イ キタノ。	示すのに用いられる。解説的な で, いちおうここにおいた。
4. 時間・空間を示す。			
(1) 時示し	○ヨルン <u>ナツテネ</u> , トマツテ キタノ。	○シバラクシテネー, オテンキデ シヨウ。	4 では, 「して」は主語を要し ない。
(2) 空間示し	○ズウツト <u>イッテネ</u> , トモチャ ンノ オトナリ。	○ <u>ハイッテ</u> チカイノ。	
注, その他	(1) 「して」という語形の, 依頼をあらわす用法は, いいおわり形のところであつかった。 ○クマチャンガ <u>マツテー</u> , ○ホンネ <u>ヨンデッテ</u> イウ テ イッタラ, …… トキネ, ヨンデ クレル。 (2) 「して」の派生語形である「しても」「してから」などは, 条件形のところなどであつかった。 ○ケンカシテモ, スダ ナカ ○ミズ <u>アゲテモ</u> , ヒラカナ ナオリスル。 インダッテ。 ○ミズ <u>ノンデカラネー</u> , オ ○ハチジ <u>スギテカラ</u> ミタ ウチデ アソンダノ。 ンダヨ。		

用 法	年 中 児	年 長 児	考 査	備 考
	<p>(3) 補助動詞をとる形式は、語形としてでなく、文法的派生動詞に準ずるものとしてあつかった。次のようなものがある。</p> <p>(i) すがた動詞(aspect)をあらわす派生動詞)</p> <p>シテ イル(シテル), シテ アル, シテ シマウ(シチャウ), シテ クル, シテ イク</p> <p>(ii) やりもらい動詞</p> <p>シテ ヤル(シテ アゲル), シテ モラウ, シテ クレル(シテ クダサル)</p> <p>(iii) もくろみ動詞</p> <p>シテ ミル, シテ オク(シトク)</p> <p>(4) 「して いい」のような形式は話し手のきもちをあらわす形式 (mood) の延長と考えられるが、その形式の作りかたの構造から、むしろ (copula) のついたものとして、Cで特別にあつかった。</p>			
5. 問題のある使いかた	<p>○(夏休み)のことをおぼえている</p> <p>かとの 質問に対して) ウミヘ</p> <p>イッテ, イナカヘ <u>イッテ</u>, ハク</p> <p>ブツカンニ <u>イッテ</u> コト。</p> <p>○(花に)オミズ <u>イッパイ</u> <u>カケ</u></p> <p><u>テネ</u>, チャント <u>ナッタ</u>ノ。</p>			
(1) 「シタリ」「シタシ」 などにしたいもの。	<p>○(夏休み)のことをおぼえている</p> <p>かとの 質問に対して) ウミヘ</p> <p>イッテ, イナカヘ <u>イッテ</u>, ハク</p> <p>ブツカンニ <u>イッテ</u> コト。</p> <p>○(花に)オミズ <u>イッパイ</u> <u>カケ</u></p> <p><u>テネ</u>, チャント <u>ナッタ</u>ノ。</p>			
(2) 条件形にしたいもの。	<p>○(夏休み)のことをおぼえている</p> <p>かとの 質問に対して) ウミヘ</p> <p>イッテ, イナカヘ <u>イッテ</u>, ハク</p> <p>ブツカンニ <u>イッテ</u> コト。</p> <p>○(花に)オミズ <u>イッパイ</u> <u>カケ</u></p> <p><u>テネ</u>, チャント <u>ナッタ</u>ノ。</p>			

類型の多かった、おもなものをあげる。

用 法	年 中 児	年 長 児	備 考
(3) 主語のほしいもの	(→かけたら・かけると) ○ <u>グルグル マワシテ</u> <u>アクデシ</u> <u>ヨウ</u> 。(→まわすと・まわせば)	たら・あげると) ○ <u>ホンヲ</u> <u>ヨンデ</u> , <u>ワライバナシ</u> <u>ガ アッタノネ</u> 。(→よむと・よ んだら) ○ <u>カメガ キョウソウシテ</u> , <u>カメ</u> <u>ハ オソイノ</u> 。(→競走すると・ 競走したら)	
		○「 <u>フランスニ イキナサイ</u> 」ッ <u>テ イッテ</u> , <u>フランスヘ イッテ</u> <u>ネ</u> , <u>ソイカラ</u> , <u>フランスニ</u> ママ <u>ガ イテネ</u> 。 ○「 <u>オコシニ ツケテ</u> ノハ ナ <u>ンデスカ</u> 」 <u>チュッテ</u> , 「 <u>キミダ</u> <u>ゴ</u> 」 <u>「ワタシニ シトツ クダサ</u> <u>イ</u> 」 <u>チュッテネ</u> , 「 <u>ソノカワリ</u> <u>オニタイジニ イクカ</u> 」 <u>チュッテ</u> <u>「ハイ オトモシマス」</u> <u>チュッテ</u> <u>キミダシゴ</u> <u>ヒトツ メラッタノ</u> 。	これは、動詞の形態の問題では なく、構文の問題であるが、「し て」に関係があるので、ここにあ げておく。

# 明治時代語の研究

## A 目的・意義

近代語研究室は、国語の歴史的発達に関する調査研究を行なう部門に属し、近代語すなわち室町時代から明治・大正時代に至る各時代の言語の実態と、各時代を貫く歴史的変遷の実相とを明らかにし、現在の国語問題の解決に役立つ直接間接の資料を得ることを目的としている。

## B 担当者

見坊豪紀・飛田良文が共同して作業にあたり、牧野正子・鈴木美都代がこれを助けた。

## C これまでの作業経過

近代語研究室では、昭和30年度以降、明治初期の文献を資料とした語彙調査を継続して行なってきた。その成果については、そのつど年報または報告書に発表されている。（『年報』7～18、および『明治初期の新聞の用語—報告15』参照）。

## D 本年度の作業

昭和42年度から、「明治初期の漢語の研究」に着手することにし、その第一年度として、次の調査研究を行なった。

- (1) 明治初期漢語辞書のカード化、および一覧表の作成  
〔付〕 語形の変遷のとらえ方とその枠組みの設定
- (2) 『花柳春話』のふりがなつき漢字語の調査
- (3) 近代語研究資料の調査

その成果は次の通りである。

(1) 明治初期漢語辞書のカード化、および一覧表の作成

明治初期の漢語は、現代語の成立する過程において大きな役割をはたしたが、その読み方・意味・用法・語の表記などの面において、現代と異なるものが多い。そこで、当時の人々が、どのように漢語をとらえていたかを知るために、まず、代表的な分類体の漢語辞書をカード化し、一覧表を作成することにした。カード化したのは、明治2年から8年までの次の八種類である。

	〔編著者〕	〔書 名〕	〔刊行年〕	〔語数〕	〔発 行 所〕
1	庄原謙吉	漢語字類	明治2年	4,342	東京 青山堂 雁金屋清吉
2	岩崎茂実	日誌字解	明治2年	1,969	東京 和泉屋市兵衛
3	伊藤正就	令典熟語解	明治2年	985	東京 須原屋茂兵衛
4	松屋貫一	新撰字類	明治3年	5,040	東京 青山堂 雁金屋清吉
5	岩井久真	大全漢語解	明治4年	6,776	浪速 大野木市兵衛
6	岩崎茂実	新撰字解	明治7年	10,234	東京 山中市兵衛
7	桜 春雄	掌中類聚漢語集	明治8年	2,888	東京 山口屋藤兵衛
8	萩原乙彦	音訓新聞字引	明治9年	5,333	大阪 松村九兵衛他

一覧表は（a）辞書別五十音順表と（b）八種類総合五十音順表とを作成した。現代語と読み方のちがうものについては、参照カードをくわえた。

八種類総合五十音順表の一例を示すと、次の通りである。

グワン 愛玩	メデ モテアソブ	51オ6心	新聞字 1875	アイケイ 愛敬	イツクシミ ウヤマフ	146オ4ア	新撰解 1874
あいけい 愛恵	カワユガル	28オ1父	漢語字 1869	あいげき 一激	カナシヒ	95ウ5衣	漢語字 1869
あいけい 愛恵	かわゆがる	77ウ2安	新撰類 1870	あいげき 哀激	かなしひ	77オ5安	新撰類 1870
アイケイ 愛恵	カハユ ガル	71オ6心	大全漢 1871	アイゲキ 哀激	カナシム	145オ3ア	新撰解 1874
アイケイ 愛恵	カアイガル	146オ2ア	新撰解 1874	アイゲキ 哀激	カナシヒ	103オ1ア	類漢集 1875
アイケイ 愛恵	カワユガル	102ウ5ア	類漢集 1875	アイヨ 愛顧	イツクシミ ヲモフ	146オ6ア	新撰解 1874

愛顧 <sup>アイコウ</sup>	ゴヒイキ	51オ6心	新聞字 1875	哀哭 <sup>アウク</sup>	カナシミ ナク	91ウ8衣	新聞字 1875
愛護 <sup>アイゴ</sup>	メデ マモル	51オ5心	新聞字 1875	アイコク→ケイシン   アイコク			敬神愛国
(愛) アイカウ 一幸	オキニ イル	71オ6心	大全漢 1871	アイヤツ 挨拶	アイシラヒ コタヘル	146オ9ア	新撰解 1874
アヒカウス 相抗	ハリアフ	104ウ3ア	類漢集 1875	アイジ 愛児	アイスル コドモ	146オ3ア	新撰解 1874

なお、近代語研究室には、これまで、異なり約四万五千語にのぼる、「明治初期全体語彙表」を作成済みであるが、今回採集の漢語辞書の見出し語が、新たにくなり、検索上の利便がました。参考までに、漢語辞書によって追加される語の若干を示すと、「明治初期全体語彙表」のアン～アンワに含まれる113語に対して次の31語が追加される。

アンオン 安穩	アンヤウ 行宮	アンキョ 安居	アンギョウ 安業	アンダン 按單	アンケン 按劍	アンカウ 按講	アンカウ 暗號	アンザイ 按罪	アンヤツ 按察
(全体語彙表「按察使」あり)				アンシ 暗識	アンシヤ 暗識	アンジヤ 語熟	シツ 閨室	あんじやく 語熟	アンジョ 晏如
アンシヤウ 案上	(全体語彙表「アンジョウ」とする)				アンタイ 安泰	あんたん 黯淡	アンチ 安置	(全体語彙表	
「安置ス」あり)				アンテン 安點	アント 安堵	(全体語彙表「アンド」とする)		アンダ 諳讀	
アンテン 安頓	アンブ 安撫	(全体語彙表「安撫ス」あり)			アンフ 按伏	アンヘイ 按兵	アンミン 安民	アンヤ 暗夜	アンレン 諳練
(全体語彙表「諳練ス」あり)				アンワジョウライ 安和舒泰					

なお、[付]「語形の変遷のとらえ方とその枠組みの設定」は、便宜上、この報告の末尾にまわした。

## (2) 『花柳春話』のふりがなつき漢字語の調査

『花柳春話』のふりがなつき漢字語は、年報18に報告したように、本文の漢字に対して、右側のふりがなは読み方を、左側のふりがなは意味を示すことが明らかになった。そこで、右側のふりがなについて、字音、字訓、その他に分類した。字訓のふりがなについては、表音式アイウエオ順の一覧表を作成した。一例を示せば、次のようである。

アア 呬 <sup>ア</sup>	呬 <sup>ア</sup> (一21へ4)	呬 <sup>ア</sup> (三87へ6)
	呬 <sup>ア</sup> (三58へ7)	呬 <sup>ア</sup> (三11へ5)

<sup>ア</sup> 噫 (一8べ2)  
<sup>ア</sup> 嗚呼 (一10べ6)  
 アイ 相 <sup>ア</sup> 相ヒ見ルハ (付19べ1)  
       <sup>アヒ</sup> 胥 胥識セザルヤ (付59べ10)  
 アイアウ 相逢 <sup>アヒア</sup> 相逢フナリ (四92べ11)  
             <sup>アヒア</sup> 相逢フノ (付3べ10)  
 アイシル 相知 <sup>アヒシ</sup> 相知ル (三38べ4)

アイダ 間 <sup>アヒダ</sup> 間 (一48べ8)  
           <sup>アヒダ</sup> 間ヲ (二83べ8)  
           <sup>アヒダ</sup> 間ニ (一80べ10)  
           <sup>アヒダ</sup> 間ニシテ (二89べ1)  
           <sup>アヒダ</sup> 間ノミナラス (三85べ1)  
           <sup>アヒダ</sup> 間ハ (二120べ7)  
 際 <sup>アヒダ</sup> 際ニ (四89べ9)

字音のふりがなについては、漢語の単位認定のための基礎的調査として、問題となる四字連続漢字の分類を試みた。すなわち、『花柳春話』における四字連続漢字を構成要素と文法的格関係から分類した結果、次のような類型がえられた。代表的な例によって示すと次の通りである。用例は後要素に助詞・助動詞がついた形であって一文節とはかぎらない。助詞・助動詞の認定は、年報10「明治時代語の調査研究」によった。

## I 並立の関係

### 1. ○+○+○+○

<sup>タウソウミンシン</sup>  
 唐宋明清ト (二65べ10)

### 2. ○○+○○

<sup>カウイクダシワ</sup>  
 交遊談話スル (三62べ8)

<sup>シチテンバツタウ</sup>  
 七転八倒ス (三3べ12)

<sup>ヒアイファンモン</sup>  
 悲哀憤懣ニ (付44べ7)

<sup>ヘナガタタシヤ</sup>  
 博学多識ニシテ (三26べ1)

<sup>ガイウダツゾク</sup>  
 雅幽脱俗ト (三82べ12)

<sup>キロ〜ガウ〜</sup>  
 偃々傲々トシテ (四50べ5)

<sup>ニイコトクツツ</sup>  
 榮枯得失ヲ (付65べ6)

<sup>フンコウダクジツ</sup>  
 温厚篤実ノ (二126べ10)

<sup>キウウシヤウライ</sup>  
 既往将来ノ (四106べ2)

<sup>ジツンジケン</sup>  
 自尊自謙ノ (二66べ11)

<sup>ハンキハンシユウ</sup>  
 半喜半愁ノ (三53べ5)

<sup>ガウシヤイツラク</sup>  
 豪奢逸楽ヨリ (三16べ5)

<sup>カウキクソウロウ</sup>  
 高閣層楼ハ (一67べ5)

<sup>ウウコウギニン</sup>  
 王公貴人モ (三111べ9)

<sup>クノウハンモン</sup>  
 苦惱煩悶 (付21べ10)

<sup>クワウリヤウタイド</sup>  
 廣量大度 (二64べ4)

<sup>シダイシガウ</sup>  
 至大至剛 (三109べ4)

<sup>ジンヒンシヨウカク</sup>  
 人品骨格 (一86べ11)

### 3. ○○+○○ (繰り返し)

バンシヤ  
萬謝々々ト (付58へ6)

タンヤ〜  
多謝々々 (三117へ2)

トンシユ  
頓首々々 (付10へ1)

キサダ  
奇策々々 (四10へ3)

## Ⅱ 主述の関係

### 1. 主格+述格

〇〇+〇〇

カヅトウヒヨウカイ  
葛藤氷解シテ (四87へ7)

セウスホ  
顔色憔悴シテ (二108へ11)

レイラタ  
百花零落シテ (二120へ1)

サイビ  
聲音細微ニシテ (二85へ3)

タイヘイ  
天下泰平ニシテ (付21へ3)

ヒンカウ  
品行醜汚ナレハ (一45へ9)

イキヤク〜  
意氣揚々トシテ (三69へ7)

ガンシヨウタサウゼン  
顔色蒼然トシテ (三112へ11)

シニタンガウ〜  
祝詞囂々タリ (三17へ5)

シリンセキバタ  
四隣寂寞タリ (三17へ5)

シセイキウハダ  
死生窮迫ノ (付20へ11)

クワイセキトツゴツ  
怪石突兀 (一1へ7)

ガウレイイカメイ  
號鈴一鳴 (三49へ11)

セウゴナン〜  
談語喃々 (一86へ8)

コウルホセンカウ  
紅淚千行 (三112へ5)

セイラク  
天氣晴朗 (二63へ1)

## Ⅲ 修飾の関係

### 1. 目的格+述格

〇〇+〇〇

ケンビ  
絃歌兼備ノ (四12へ9)

チウロウ  
正奇迭用 (付33へ6)

### 2. 連用修飾格+被連用修飾格

〇〇+〇〇

ガウルフ  
一聲號泣シテ (付47へ6)

ハヅロウ  
一聲発揚シテ (一9へ1)

(三128へ9)

(四32へ11)

ヤウロ  
一聲揚呼シテ (四21へ7)

ハンヤウ  
一聲発揚 (四51へ8)

ガクゼン  
一目愕然 (付47へ6)

### 3. 連体修飾格+被連体修飾格

(1) 〇+〇〇〇

ダイシヨウヤクワン  
大書記官ニ (三72へ9)

セイゴヤンロ  
一製造所ノ (一1へ12)

サツシ  
一小冊子ヲ (二63へ2)

(2) 〇〇+〇〇

コンインダウヤキダ  
婚姻條約ニ (付63へ6)



キコウワセイトウ  
共和政<sup>ニ</sup> (三42ペ12)

ニウム  
第一要務ナリ (三25ペ11)

ドンリツガクシ  
軍律学士ト (付58ペ1)

ケンカウ  
各国權衡ノ (三44ペ9)

クウチウロウカク  
空中樓閣ヲ (二91ペ3)

(3) ○○+○○

サイクツイ  
再會以來ノ (三45ペ12)

ブンシユウ  
分袖以來 (三76ペ12)

(4) ○○○+○

アントウニイリ  
暗燈影裏ニ (四86ペ4)

シヤシン  
寫眞店頭ニ (四27ペ9)

ケイハクシヤリク  
輕薄者流ト (四25ペ7)

ザツハウランソナイ  
雜報欄内ヲ (付55ペ5)

チチウカイトウ  
地中海頭 (二42ペ10)

スフンシヨカン  
数分時間 (付2ペ3)

なお、以上の諸類型のうち、どの場合を四字漢語とし、どの場合を二語とするかの認定は、今後の問題である。

### (3) 近代語研究資料の調査

本年度は、京都大学図書館、大阪女子大学図書館、立教大学図書館の洋学資料および明治初期翻訳小説などを調査した。京大では有本利三郎氏、大阪女子大では玉井敬之氏、立教大では伊沢平八郎氏のお世話になった。

## E 今後の予定

来年度は、漢語研究の著書・論文目録の作成、漢語認定のための基礎的調査、翻訳小説の漢語のカード化と一覧表作成を予定している。

(見坊)

### 〔付〕語形の変遷のとらえ方とその枠組みの設定

#### 問題の発見と問題の整理

明治初期の漢語辞書（以下、簡単に漢語辞書と呼ぶことが多い）を通読して感じることは、知らない単語が多いということよりは、知っている単語、知っている漢字でも読み方の違っているものが多いということである。

その印象を整理してみると、次の三か条になる。

1 現代の読み方と違うものが多い。

<small>タハツダク</small> 豁達	新撰字解103オ（新撰字類，大全漢語解も）
<small>ケイソウ</small> 競争	新撰字解118ウ
<small>ヂ シ</small> 坐食	大全漢語解44ウ
<small>シュガク</small> 數學	大全漢語解81ウ
<small>セウタツイ</small> 笑話	大全漢語解117ウ
<small>ビョウジツ</small> 龔日	漢語字類48ウ（新撰字類，新撰字解，音訓新聞字引も）
<small>セフシヤク</small> 接壤	大全漢語解77オ
<small>シヨダツ</small> 狙撃	大全漢語解104オ
<small>ソ ボ</small> 詐偽	漢語字類 102 ウ（新撰字類，大全漢語解，新撰字解も）
<small>ドガヤク</small> 土着	新撰字類17ウ
<small>フンカウ</small> 頒行	日誌字解45オ
<small>ボウ ロ</small> 暴露	大全漢語解85ウ（新撰字解も）

上例のうち、「達」を除き、すべて『大字典』の親字に、その音があり、大部分は漢音である。次に現代の読み方と違うものをみると、

2 漢語辞書の読みには漢音によるものが多い。

漢音による読みのうち、目立った傾向を上げると、

- (1) むかし漢音，いま呉音
- (2) むかし漢音，いま慣用音

の二つが目につくようである。

(1) むかし漢音，いま呉音の例

いつくわ  
一和 漢語字類 1 オ（令典熟語解，日誌字解，大全漢語解，新撰字解，掌中類聚漢語集も）

イツバウ  
一毛 大全漢語解 1 ウ（なお，バウも漢音）

---

1) 振りがなは，引用書のまま。読みの違う部分の漢字をゴチック体で示す。

かうくわ 講和	漢語字類105ウ（新撰字類，大全漢語解，掌中類聚漢語集も）
タワボク 和睦	大全漢語解40オ
キコウハイ 興廢	大全漢語解135オ
カフアイ 狹隘	大全漢語解104ウ
かうくわつ 行列	漢語字類95オ（新撰字類，大全漢語解，掌中類聚漢語集も）
イツン 逸字	新撰字解 8 ウ
タウシ 過時	掌中類聚漢語集72ウ
リンシヤウ 稟上	大全漢語解115ウ（新撰字解，掌中類聚漢語集も）
チヨウシヤウ 重傷	大全漢語解179オ（掌中類聚漢語集，音訓新聞字引も）
ちよくふん 勅問	新撰字類21オ（大全漢語解も）
ほうしゆん 矛盾	新撰字類13オ（新撰字解も）
れいいこく 領國	新撰字類40ウ（大全漢語解）
かうれい 綱領	漢語字類79オ（新撰字類，大全漢語解，掌中類聚漢語集も）

## (2) むかし漢音，いま慣用音の例

セイタフ 歳華	<p>大全漢語解92ウ</p> <p>なお，大字典 No.5666 によれば(1)〔慣〕サイ〔漢〕〔呉〕セイ〔漢〕セツ〔呉〕セチ(2)〔漢〕〔呉〕サ。</p>
サニイ 注意	<p>大全漢語解96ウ</p> <p>なお，大字典 No.6091によれば，〔慣〕チュウウ(1)〔漢〕〔呉〕シュ(2)〔漢〕〔呉〕シュ チュ(3)〔漢〕シウ〔呉〕シュ。</p>
ユウカフ 苟合	<p>大全漢語解137ウ</p> <p>なお，大字典 No.1170によれば，〔慣〕ガフ〔漢〕〔呉〕カフ。</p>

- 3 濁点がないからといって 誤りとは言えない。（清音ならば漢音，濁点がつけば呉音という対応関係が多いので）

このことは前項とも関連があり，例も一部あがっているが，念のため数

例を追加する。

イチタン 一郡	掌中類聚漢語集 5 オ
かうさい 行在	新撰字類30ウ
イチシ 一時	掌中類聚漢語集 4 ウ
アンシヤウ 案上	新撰字解146オ
イタイ 偉大	大全漢語解18オ
イト 異土	新撰字解 7 ウ
イツタウリヤウタン 一刀兩断	大全漢語解 3 ウ（掌中類聚漢集も）
イツ シトウジン 一視同仁	掌中類集漢語集 5 オ
イツタウ 逸道	漢語字類116オ

以上の印象その他を問題点として整理してみると、

## I 漢語辞書の問題点とその整理の方法

- 1 読みの問題点とその整理の方法
- 2 漢語辞書の評価の問題
  - (1) 辞書内の差と辞書間の差
  - (2) 規範性の問題
  - (3) 現実の反映の度合い
- 3 漢語辞書の訳語の問題
  - (1) 訳語の方法と性格
  - (2) 訳語の由来
- 4 漢語辞書の系譜と来歴の問題
- 5 漢語辞書の性格とその位置づけ

## II その他の問題点とその整理の方法

- 1 現代漢字音の来歴とその性格
- 2 漢和辞書の性格と評価の問題
  - (1) 辞書内の差と辞書間の差

- (2) 字音の性格
- (3) 新しい慣用音の発生
- (4) 国語辞書との差

明治初期の漢語辞書内の状況を手がかりとし、現代の漢和辞書あるいは現代通用の漢字音と比較しながら、問題をさぐり出し、その整理の方法を考えると、以上のような展望が開けてくる。

しかし、近代語研究室の当面の課題は漢語辞書の分析にはない。

ここでは、漢語の語形の変遷の研究に直接結びつくべき範囲に問題をしぼり、1の1についてかんたんに考え方を述べてみようと思う。

#### 読みの問題点とその整理の方法

##### 1 立ち場の設定

明治以降の言語は、広い意味での現代語の一部とも言える。漢字の知識がひと通りあれば、通読することは比較的容易である。したがって、明治時代の言語を変遷の立ち場から観察する試みは余りなされていない。ひとつは、振りがなその他、語形を確実に知りうる資料の整理がほとんど行なわれていないからでもあるが、明治時代の漢語を読むにあたって、明治時代の読み方を復原しなければならないという意識はほとんどないかのようである。

しかし、たとえば「是非」「福祉」を、明治の人ならば「シヒ<sup>1)</sup>」「フクチ<sup>2)</sup>」と読みえた事実を知るとき、常識だけにたよって明治時代の漢語を読んでもよいものかどうか、白紙の状態に立ちもどって反省しなければなるまい。

この調査研究では、現代人の常識的な漢字の知識を離れ、また単に音か訓かだけの広すぎる立ち場を捨て、白紙の立ち場で明治初期の漢語辞書における字音語の読み方を整理し、そうすることによって、明治時代の漢語の読みの状態を明らかにし、現代にいたる変遷をたどる資料を得ようとするもので

---

1) 大全漢語解83ウ。なお、大字典No.4512によれば、ゼは慣用音、シは漢音である。  
2) 新撰字解126オ。なお、大字典No.8109によれば、シは慣用音、チは漢音、呉音共通の音である。

ある。

漢語の語形の変遷を取り上げるにあたり、われわれは、次の基本的立ち場を設定した。

- 1 特定の語形または語形群の変遷をたどるのではなく、与えられたすべての語形の変遷をたどること。
- 2 語形の変遷を個別的に明らかにするだけでなく、集合としての全体の状況を、変遷の面からとらえること。
- 3 特定の時点に存在した語形の変遷を追跡するのではなく、それ以後に出現した語形もすべて取りこんで考察すること。
- 4 主観的判断や見識にたよるのではなく、客観的なものさしに照らし一定の手順で処理すること。

明治初期の漢語辞書八種に含まれる見出しは延べ約三万八千語、字数にして延べ約七万九千字（四字漢語など約3%を含む）ある。われわれの基本的立ち場に従えば、三万八千の熟字、七万九千の単字のすべてについて読みを確認し、漢音・呉音などに分類することから出発しなければならない。作業の大部分は、既知の知識の再確認に終わるだけかもしれない。しかし、その再確認（記録を含む）は確実な事実の蓄積のためには必要欠くべからざる手続きである。個人の作業としては手に余るものであろうが、共同で研究を進める当研究所の仕事としてはふさわしいものと思われる。

要するにわれわれは、“変遷”というものを、与えられた材料の十分な活用により、幅広く観察し、いっそうのり多い成果をあげることを期待しているのである。

## 2 枠組みの設定

この調査研究にいう語形の変遷とは、“同じ表記形式に従う、同じ意味の枠内にある字音語の読みの変遷”と約束する。

たとえば、洞察はトウサツ<sup>1)</sup>からドウサツへと変遷し、枯瘦はコシュ

---

1) 令典熟語解 16 オ。(日誌字解, 新撰字類, 新撰字解, 音訓新聞字引も)なお大字典 No.6125 によれば、洞は漢音トウ、呉音ドウである。

ウ<sup>1)</sup> からコソウへと変遷し、勁兵はキョウヘイ<sup>2)</sup> からケイヘイへと変遷した、  
というように整理する<sup>3)</sup>。

語形の変遷を整理するに当たって、次の諸点に注意して、整理の枠組みを考えた。

(1) 語形と表記とを区別して考えること。

語には、これを音声化したときの音声形式と、文字で書き表わしたときの表記形式との二つが考えられる。ここでは、漢和辞書の熟字の部に見出しとして示された語の読みにあたる字音を語形（くわしくは、音読したときの語形）と呼び、表記形式と区別して扱うことにする。同語異表記の変遷は、語形の変遷とは別に扱う予定である。

(2) 変遷と変化とを区別して考えること。

変遷と変化には共通の面もあるが、今は両者の異なる面に着目し、変遷とは、ある時間の中で認められる変化である、と約束する。変化は、時の流れの中に入れなくても考えられる。たとえば化学変化の中には、瞬間に起こるものがある。

(3) 語形の変遷と語形変化とを区別して考えること。

語形変化という語は多義的である。ドイツ語の名詞の格変化、日本語の動詞の活用なども語形変化と言えそうである。このような多義性を排除するために、語形の変遷という名称を使う。

上の規定によれば、語形変化の変遷も当然考えることができる、という利点を得られる。

(4) 変遷を非変遷と対立させてとらえること。

ふつう変遷というと、変遷したものだけを取り上げるようだが、これでは

---

1) 大全漢語解88ウ「コソウ」。なお大字典 No.7654 によれば、瘦は慣用音サウ、漢音ソウ、呉音シュである。

2) 新撰漢語字類57オ「けうへい」。なお大字典 No.876 によれば、勁は漢音ケイ、呉音キャウである。

3) この段階は素材の収集、整理、分類の段階なので、考察・批判・分析は行わない。

全体の状況の中での変遷をとらえることはできない。

変遷したものと変遷しなかったものとを対等において、両者を合わせた全体を一つのものと考えることによって、何が変遷して何が変遷しなかったかがわかり、変遷を促進しあるいは阻害する要因が何であったかを積極的に明らかにすることができるであろう。

### 3 二つの時点での比較対照

変遷をたどるためにはいくつかの時点、または、いくつかの（異なる時点に成立した）文献における状況を明らかにすることが前提となるはずであるが、ここではその第一段階として、二つの時点（明治初期と現在）を設定し、これをモデルとして、変遷をとらえる方法について考える。

#### (1) 変遷と使用・不使用との関係

いま、ある二つの時点をとったばあい、それぞれの時点での個々の語の使用・不使用については次の四つの場合が考えられ、それ以外は考えられない。（便宜上、二つの時点を明治初期および現代と表わし、使用・不使用の状況を簡単のために○・×で示すことにする）

状況	明治初期	現代	備考
1	○	○	語がひきつづき存在するばあい
2	○	×	語が消滅したばあい
3	×	○	語が発生したばあい
4	×	×	過去も現在もそんな語はない、というばあい

語形の変遷というばあい、当然のように状況1のばあいだけが考えられ、特に、その中でも研究者の関心をそそる特定の語形だけが問題とされる。しかしそれでは幅の広い考察はできない。

#### (2) 顕在的変遷と潜在的変遷

変遷をとらえる基準点は過去におくこともできるし、現在におくこともできる。われわれは現在を基準点として変遷をとらえようとする。

明治初期を出発点として語がどのように変遷していったかを考えるということは、明治初期の語形がどのように最初の語形から離れていったかを考える



ということである。これに対して、現在を基準点として変遷を考えるということは、明治初期の語形がどのように現在の語形に接近・一致してきたかを考えるということである。素材は同じでも、観点と意味づけはまったく異なることに注意されたい。

現在を基準点として変遷を考えるさい、状況1は実現した変遷と考えられ、これに反して状況2は実現することなくしておわった変遷と考えられる。つまり、事情が許せば状況1と同じ条件のもとで実現するはずだった変遷が状況2の中にはひそんでいると考えられ、その意味で状況1に対して参考となるべき情報を含んでいる。状況1を顕在的変遷と呼ぶならば、状況2は潜在的変遷と呼ぶことができよう。

たとえば「渠酋」<sup>1)</sup>「行陣」<sup>2)</sup>という語は現代語本位の小型国語辞書にはのっていないけれども、現代の漢字の知識によればそれぞれ「キョシュウ」「コウジン」と読まれるはずである。つまり、「渠酋」「行陣」はそれぞれキョウウからキョシュウへ、コウチンからコウジンへと変遷するはずだったが、語そのものが消滅してしまったために、この変遷は実現しなかった、と考えられる。

#### 過去の語形への接近のしかた——作業の手続き——

過去の語形を処理するさいは、予断をさしはさまず、原形に忠実に処理することが第一要件である。自己の現有の知識によりかかるとき、往々にして現代語として処理する結果におちいりやすい。

明治初期の漢語辞書のばあい、過去の木版本の通例にもれず、濁点、半濁点のつけ方は必ずしも厳密でない。一方、清音ならば漢音、濁点が付けば呉音・慣用音といった対応もかなり見られるので、現代通用音の常識で主観的に処置することは許されない。

---

1) 新撰字類88オには「きよゆう」と振りがながある。なお、大字典No.12261によれば、酋は慣用音イウ、漢音シウ、呉音ジユである。

2) 新撰字解57オには「カウチン」と振りがながある。なお、大字典No.12854によれば、陣は漢音チン、呉音ヂンである。

たとえば「挫折」を「サセツ」<sup>1)</sup>と読ませるなど、現代通用音の観点からは、明らかに濁点の脱落と考えるのであるが、「サ」が漢音であることを知るとき、漢語辞書としては「サセツ」が筋の通った読ませ方であるとも考えられ、慎重に研究した上でなければ判定はくだしがたい。

また、「裁判」を「サイハン」と読ませる<sup>2)</sup>なども、当然「サイバン」と連濁にしたいところだが、過去の老人の談話語に「サイハン」の語形があったことを記憶している人がいく人かおり、現代の連濁の傾向と明治初期の連濁の傾向とを別途に比較対照する必要性を暗示している。このような意外な経験は枚挙にいとまないほどなので、白紙の立ち場に立っての作業手続きとしては、次のような順序で逐次接近を試みつつ、素材を整理することにした。

まず目標を明らかにしておかなければならない。接近の目標は、漢語辞書の見出しに示された読みと現代通用の読み（仮りに現代通用音と呼ぶ）との差を明らかにすることである。

ここに現代通用音とは、漢語を現代人の常識に従って読むときの字音をさす。いわゆる当用漢字音訓表の音は、すべて現代通用音の代表といってよい。現代通用音は、訓に対立させて広く考えれば音であるが、これを漢和辞書の枠の中で分類すれば、漢音・呉音・唐宋音・慣用音などに分かれる。

そこで、(1)現代通用音を一定の規準で客観的に整理し、次に

(2)漢語辞書の読みを同じ規準、同じ手続きで整理し、

(3)両者を同じ水準で比較対照できるようにしなければならない。

## 1 第一次接近

上記の手続きをとるために、第一次の接近として、『大字典』に示された

---

1) 大全漢語解76ウ。「ザセツ」と読ませる漢語辞書もある。)なお、大字典 No. 3798によれば、「ザ」は呉音、「サ」は漢音、または漢呉共通音である。(大字典「音訓索引」にも「サ」の部に出ている！)

2) 新撰字類80ウ「さいはん」、音訓新聞字引52ウ「ハン」(「裁」に振りがななし)。なお、大字典 No.761によれば、漢音、呉音ともに「ハン」である。

字音を両者に共通のものさしと定める。つまり、大字典に示された字音を共通のものさしに使う、漢語辞書の読みと現代通用音との一致・不一致の度合いや、漢語辞書の読みの性格などを客観的に比較対照する。

しかし、『大字典』の字音だけを無条件に信用してよい理由はないので、『大字典』による作業が終わったらひきつづき第二次の接近を試みなければならぬ。

手続き1 漢語辞書の見出しに現われるすべての単字を、『大字典』の親字の部に求め、そこに示されたすべての音を記録する。

〔例〕 譌詐<sup>1)</sup>

譌 大字典 No.11160 〔慣〕キツ 〔漢〕ケツ 〔呉〕ケチ

詐 大字典 No.10957 〔漢〕サ 〔呉〕セ

この段階では、見出しを構成する各単字の、ありうる音が列挙されたにとどまる。

手続き2 漢語辞書の見出しを『大字典』の熟字の部に求め、そこに示された音を記録する。

〔例〕 譌詐 大字典 No.11160 「ケツ・サ」とあり。なお、譌の部の熟字は、すべてケツで始まる。(同書「詐」の部にも「詐譌サ・ケツ」とあり)

単字の読みは、与えられた環境としての熟字の中で決まり、熟字の読みは文脈の中で決まる。(辞書を手がかりとして考えるときは、現実の読書の世界とは順序が逆になる。)

この段階で確認されることは、次の諸点である。

- (1) 譌詐に対応する語形(読み)は、漢語辞書では「ケツソ」であり、『大字典』では「ケッサ」であること
- (2) 「ケッサ」の要素としての「ケツ」「サ」をそれぞれ『大字典』の親字の音<sup>おん</sup>にあてはめれば、いずれも漢音であること
- (3) 「ケツソ」の要素としての「ソ」は『大字典』の親字の音としては見いださ

---

1) 『大全漢語解』156オ、『新撰字解』118ウのいずれも「ケツソ」と振りがながついている。

れないこと<sup>1)</sup>

手続き3 『大漢和辞典』を用いて、手続き1～2と同じ作業を行ない、検索の結果を記録する。

〔例〕 前出「譌詐」について示せば

譌 (No. 35956)

ケツ  
ケチ

詐 (No. 35373) ㊦ サ<sup>サ</sup>ジャ〔集韻〕側鴛切～ ㊦ サク<sup>ソ</sup>ザク〔類篇〕疾客切

譌詐 ケツ (「詐」の部には、詐譌<sup>サ</sup>ケツとあり)

手続き4 『大字典』、『大漢和辞典』の異同を調べ、比較対照の結果を記録

する<sup>2)</sup>。両辞典の異なる面だけを示せば、

譌 『大漢和辞典』は慣用音「キツ」を示さない。

詐 『大漢和辞典』は ㊦ ㊦ の別がある。㊦ については、異音が異なる。

〔譌詐の読みは両者共通〕

手続き5 現代通用音の立ち場から、漢語辞書・漢和辞書の語形と比較対照

- 
- 1) 詐の音は、漢語辞書の中では「サ」「ソ」両用である。たとえば、

サ<sup>サ</sup> 詐偽 新撰字解 150ウ

ソ<sup>ソ</sup> 譌<sup>ガヒヤクタン</sup>百端 同上 90オ

ソ<sup>ソ</sup> 欺詐 同上 161ウ

ソ<sup>ソ</sup> 詭詐 同上 164ウ

辞書内の差だけでなく、辞書間の差をも考慮の範囲に入れると、この混用はいっそう甚だしくなる。(P. 102「詐偽」参照)

なお、熟字<sup>こと</sup>の後要素としても同じ用法が現われることは、説得力を倍加するとと思われるが、そのためには、語形の一覧表だけでなく、親字別の熟字一覧表の作成が先行しなければならない。

- 2) この段階では、記録にとどめるだけであるが、比較対照の結果を検討するときには、漢語辞書を共通のものさしとした、漢和辞書間の差が明らかになるはずである。その差を利用することによって逆に、各漢和辞書を評価する具体的な手がかりが得られるであろう。

し、その結果を記録・整理する。

独断による誤りや、主観的判断による片寄りなどを防ぐために、なるべくしかるべき国語辞書を一冊決めて、それを利用した方がよい<sup>1)</sup>。(ここでは便宜上『広辞苑』を使って比較対照する)

〔例〕 訥詐について言えば

きっ-さ(「けっさ」の慣用読) いつわり。／けっ-さ いつわり。〔見出しと語釈の部分だけを抜き書きした〕<sup>2)</sup>

この段階で始めて整理を行なう。

この段階になって、やっと漢語辞書の語形と現代通用音による語形との差が分類整理され、それぞれの特色性格も明らかとなり、変遷したもの、新しいものの状況も明らかとなるであろう。

## Ⅱ 第二次接近

手続き1 漢語辞書・『大字典』・『大漢和辞典』三者の間に一致の見られるものは一往除外し、一致しないものについて検討する。

手続き2 『大字典』・『大漢和辞典』に見当たらない単字、熟字およびそれらの字音については、さらに研究調査を進める。

手続き3 個々の字音(単字、熟字とも)のうち問題のあるものについてはさらに研究調査を進める。特に慣用音の処理については、漢音・呉音との関係もふくめ、できるだけはっきりさせる。

第二次の接近は、第一次の接近が終わってから取りかかることになるはず

---

1) 個人の言語経験を内省するためならば、国語辞書はほんの参考に過ぎない。また、現代の通用音が集団としてどの程度定定しているか、などを客観的に判断したかったら社会調査がもっとも有効である。

2) 現在発売されている、見出し十萬語以上の国語辞典のうち、大部分は「きっさ」の語形だけを出している。「きっさ」「けっさ」の両語形を出しているものは『広辞苑』である。また『大言海』には、ぜんぜん出ていない。“「けっさ」の慣用読み”という意味の注記があるのは、『広辞苑』、『新潮国語辞典』だけらしい。

また、以上の結果によれば、国語辞書では、慣用音「キッサ」が一般的で、漢和辞書の状況とは差があるかのようである。

であるが、大部分の字音は第一次の接近で処理がつくと予想される。

### Ⅲ 第三次接近

手続き 1 同時代の他の辞書資料と比較して、一致・不一致の面を比較・検討する。

〔例〕<sup>シヨホツ</sup>「初發」は、ヘボンの『和英語林集成』初版（1867年）にも出ていて<sup>2)</sup>、読み方、意味の両面で両者はよく一致する。漢和辞書では「シヨハツ」の読みもあり<sup>3)</sup>、「ホツ」の音は漢和辞書の字音から直接には出てこないものであるが<sup>4)</sup>、「發心」「發足」など熟字の前要素<sup>まえ</sup>の音として使われているうちに、独立したものと思われる。類例にはザツ（←ザフ）、リツ（←リフ）などいろいろあり、大字典では「ザツ」「リツ」を慣用音として示している。

手続き 2 同時代のなまの文献資料（新聞、雑誌、単行本等）について、裏づけとなるべき参考例を採集し、比較検討する。

〔例 1〕「謫詐」について例示すれば、「明治初期全体語彙表」では、郵便報知新聞の追加語彙表に 1 例だけ登録されている<sup>4)</sup>。

〔例 2〕「初發」については、同じく「明治初期全体語彙表」によれば、学術論説文献の中から 1 例だけ採集されている<sup>5)</sup>。

現実の作業段階としては、

- 
- 1) 新撰字解179ウ。「フノハジマリ」と語釈がついている。
  - 2) SHO—HOTSZ, ショホツ, (hajime).n. The beginning, origin. (p.419)
  - 3) 大字典 No.759 によれば、「シヨ・ハツ（シヨ・ホツ）」とあって、第一の読みはシヨハツである。
  - 4) 大字典 No.7707 によれば、「發」は〔漢〕ハツ, 〔呉〕ホチとある。ホツの音は、元来独立した音ではない。
  - 4) 「濱町住居ノ時モ表札ヲ有馬ト認メ所々ニ於テ謫詐偽計ノ行ヒアル由」(投書・雑文欄)
  - 5) 「此病患<sup>このびやうくわん</sup>は大概初發より六日以前<sup>おほむかしよはつ</sup>又は<sup>いぜんまた</sup>〜」(平塚平訳『夫婦衛生論』1872刊)

カード化（一部ゼロックス利用）

参照カード作成

五十音順排列

辞書別五十音順語形表作成（ゼロックス利用）

八種総合五十音順語形表作成（ゼロックス利用）

まで完了した。

製表にゼロックスを利用したことは、時間の短縮には大いに役立った。ただ、鮮明さその他の点に多少問題が残った。

（見坊）

# 言語情報処理に関する基礎的研究

## A 目 的

- 1 話しことば資料のファイル作成。
- 2 この資料における各種言語単位の現われ方（言語内、言語外の各種条件のもとにおける）の分析。

## B 担 当 者

南不二男（第一資料研究室、43年3月2日からオーストラリアのモナシェ大学に出張）、松本昭（第一資料研究室、42年4月1日東京教育大学へ出向、以後も非常勤講師として研究担当）

## C 使 用 資 料

昭和38年度に松江市で実施した「国民各層の言語生活の実態調査」のうち、ある市民の家庭内で行なわれた一日中の発話全部を録音したもの。（年報15、146～153ページ、年報16、89～90ページ参照）。

## D これまでの研究経過

研究計画としては、上記録音資料を文字化したテキストに、形態音韻論的、形態論的分析を施し、さらに種々の情報を付加したうえ、電子計算機に入力し、処理を行ない、(1)テキストの磁気テープ作成、(2)形態素および単語の用例つき索引の作成、を一応の目標としている。これまでにできたものとしては、

- 1 音声テキスト完成（16時間分全部）。
- 2 音素、形態音素の解釈分析一応完了（音声——音素——形態音素規の変換則設定）。



- 3 形態音素表記テキスト作成 5時間分すみ（午前6時～午前11時まで録音の分）。なおこのテキストには、形態素、単語および文にあたる発話の切れ目、発話番号、話し手、聞き手、文にあたる発話の種類についての情報が付加してある。表記のための使用文字は、HITAC 3010、64文字コード（ローマ字、数字、その他の記号）。
- 4 形態音素表記テキストの紙テープへのパンチ。上記5時間分すみ。日本ビジネスコンサルタントへ依頼。
- 5 処理プログラムとしてテキストの読みこみ、発話を主とする sort のプログラム、および形態素、単語の sort のプログラムの主要部分を完成。

## E 本年度の調査研究開発作業

- 1 上記Dの形態音素表記のテキスト作成 3時間分（午前11時～午後2時まで録音の分）。
- 2 上記E 1分の形態音素表記の紙テープへのパンチ。日本ビジネスコンサルタントへ依頼。
- 3 プログラム開発。語数カウント単語表ABC順、度数順、作成、用例出典つき語彙表作成、発話者使用人別などによる分類語彙表作成などのプログラムの開発。
- 4 各種語彙表作成。  
上記E 3のプログラムを用いてデータ（D 3、E 1の分）を処理し、上記E 3の各種語彙表を作成した。
- 5 テキスト整備。  
計算機にかけるための特殊記号を通常の音韻表記に改めて、一般の人に使用できるようにタイプした。
- 6 語彙表整備  
用例つき語彙表により各単語について同語異語を判別した。
- 7 報告書作成の計画  
内容について大体の計画を立てた。

## F 今後の予定

43年度においては、上記E7の計画にしたがって資料、結果の整理を行ない、報告書の原稿を作成する。

(石綿)

# 社会構造と言語との関係についての 基礎的研究

## A 目的・意義

言語あるいは言語生活は、社会生活およびそれを規定している社会構造と密接な関係を持っている。その関係を明らかにするための基礎的準備的研究を行なおうとするものである。

比較的単純な構造を持つと思われる農村について、共通語生活と方言生活との交渉・接触の面を重視しつつ、言語およびその用法（の変動）と社会構造および社会生活（の変動）との関係を明らかにすることを目ざしている。

調査地点としては福島県伊達（だて）郡保原（ほばら）町地区および福島市郊外の茂庭（もにわ）地区を選んだ。

## B 担当者

飯豊毅一（音韻・文法を中心に言語および言語使用の面）、渡辺友左（語彙および社会構造、ならびに両者の関連の面）が担当し、東郷はるみ（旧姓河東）が作業を助けた。

## C これまでの作業の経過

昭和40年度に始めたこの調査は昭和41年度までに次のようなことを行なった。

- (1) 老年層を対象とする、音韻・文法の方言体系の概略の調査と一部の語彙体系（親族語および形容詞・形容動詞）の調査。後者については「福島県北部方言の親族語と形容詞の語彙体系——福島北部調査報告1」（国立国語研究所論集3『ことばの研究』昭和42年3月）に報告した。
- (2) 録音資料による実態調査。話し手の性・年齢・教養等の違いによって使用言語がどのように異なるかを調査するために録音採集を行ない、その

うち8時間分について文字化し、これより採集した約7万枚のカードによって分析を始めた。これは本年度に継続する。

(3) 社会構造の調査。各種統計表や記録により概観調査を実施した。その一部は『社会構造と言語の関係についての基礎的研究(1)——親族語彙と社会構造——』（国立国語研究所報告32）に報告した。そこでは戦後日本の方言社会の農業生産の構造と農家の消費構造がどのように変動してきたかを全国的なわくと条件の中で福島県（北部）方言社会について概観した。

(4) 社会構造と語彙およびその用法の構造との関連の調査。親族語彙について、それが親族組織およびその社会生活における機能とどのような関係があるかをみようとした。これについては前記の国立国語研究所報告32に報告した。

## D 本年度の作業

### 1 言語および言語使用の調査

#### 1.1 音韻体系および文法体系の概略の調査

前年度までに準備的調査として、保原地区および茂庭地区の音韻体系・文法体系の概略の調査を行なったが、本年度もその補正調査を面接調査および採集録音とによって行なった。保原地区における老年者についてみれば、ほぼ次のような音素とモーラ表が得られた。

#### 音素

子音音素 /p, b, m, t, d, c, s, z, r, n, k, g, h, ' /

母音音素 / e, ε, a, o, u /

半母音音素 /j, w/

モーラ音素 /N, ʔ /

#### モーラ表

'u	'o	'a	'ε	'e		ju	jo	ja	jε		wa	wε
pu	po	pa	pε	pe	pi	pju	pjo	pja				
bu	bo	ba	bε	be	bi	bju	bjo	bja				

mu	mo	ma	m <sub>ɛ</sub>	me	mi	mju	mjo	mja		
	to	ta	t <sub>ɛ</sub>	te						
	do	da	d <sub>ɛ</sub>	de						
cu	co	ca	c <sub>ɛ</sub>	ce			cjo	cja	cj <sub>ɛ</sub>	cje
su	so	sa	s <sub>ɛ</sub>	se			sjo	sja	sj <sub>ɛ</sub>	sje
zu	zo	za	z <sub>ɛ</sub>	ze			zjo	zja		zje
ru	ro	ra	r <sub>ɛ</sub>	re	ri	rju	rjo	rja		
nu	no	na	n <sub>ɛ</sub>	ne	ni	nju	njo	nja	nj <sub>ɛ</sub>	
ku	ko	ka	k <sub>ɛ</sub>	ke	ki	kju	kjo	kja		
gu	go	ga	g <sub>ɛ</sub>	ge	gi	gju	gjo	gja		
hu	ho	ha	h <sub>ɛ</sub>	he	hi	hju	hjo	hja		

N 3

このモーラ表において注目すべきことのいくつかについて述べる。

- (1) この地区の老年者の音韻体系においては /i/ のモーラを欠く。すなわち共通語のような /i/, /e/ の区別がない。
- (2) また /ci/, /cju/ のモーラを欠く。共通語のような /cu/, /ci/, /cju/ の区別がない。
- (3) 同様に /si/, /sju/ のモーラを欠く (/su/, /si/, /sju/ の区別がない)。
- (4) 同様に /zi/, /zju/ のモーラを欠く (/zu/, /zi/, /zju/ の区別がない)。
- (5) 各モーラについてどのような音声的事実がみられるか、いくつかの注目すべきものについて述べる。

/ɛ/ : [ɛ:dzü](会津), [kɛ:kko](貝), [küntse:](下さい)

/jɛ/ : [haje:] (早い), [baje:] (場合), [kūmijɛ:] (組合)

/wɛ/ : [sawɛ:da] (騒いだ), [kowɛ:] (疲れている), [kawɛ:da] (乾いた)

/cu/ : [tsügi] (月), [tatsümadzü] (たちまち), [tsü: tɛ:] (中隊)

/cjɛ/ : [tottɛ:] (取りたい), [hanattɛ:] (はなれたい), [küntɛ:] (下さい)

/cje/ : [nanattʃe] (流れて), [tottʃe] (とれて), [abattʃe] (暴れて)

/su/ : [südzühadzü] (七八), [süsü] (すし), [nasü] (梨)

/se/ : [sɛ:to] (生徒), [sɛnsɛ:] (先生), [sɛnaga] (背中)  
 /so/ : [sodo] (外), [osoɛ] (遅い), ただし [hono] (その), [hogo] (そこ),  
 /sje/ : [omoʃɛ:] (面白い), [oʃʃɛ:] (白粉)  
 /sje/ : [kagaʃʃɛ:] (お書きなさい), [nomaʃʃɛ:] (お飲みなさい)  
 /zu/ : [dzũŋa] (図画), [madzũ] (町), [dzũ:go] (十五)  
 /ze/ : [dzeni] (銭), [kadze] (風), [dʒembũ] (全部)  
 /zje/ : [kondze] (これで), [sondze] (それで), [andze] (あれで)  
 /nje/ : [tonnje:] (取れない), [tadannje:] (立たれない), [tannje:] (たりない)  
 /ki/ : [kɕimono] (着物), [kɕike:] (機械), [cigũ] (聞く)  
 /kju/ : [kju:kæ] (九回), [cju:kæ] (九回), [cju:ko:] (急行)  
 /kjo/ : [kjo:] (今日), [cio:] (今日), [cjo:igũ] (教育)  
 /hi/ : [ɕito] (人), [ʃito] (人), [iŋasũ] (東)  
 /-t-/ : [mado] (的), [kada] (肩), [tade] (立て)  
 /-d-/ : [mādo] (窓), [hāda] (肌), [kādo] (角)  
 /-cu/ : [kũdzũ] (靴), [madzũ] (松), [tadzũ] (立つ)  
 /-zu/ : [kũdzũ] (屑), [tsũdzũ] (地図), [kādzũ] (数)  
 /-k-/ : [haga] (墓), [kagi] (柿), [sogo] (底)  
 /-g-/ : [kaŋi] (鎌), [sũŋũ] (すぐ), [haŋe] (禿)

## 1.2 録音資料による言語使用の調査

前年度に引き続き録音資料の分析を行なった。保原地区・茂庭地区の老人男・老人女・青年男・青年女についての計8時間分の録音資料である。音韻関係で分析を行なった項目は次の通り。

保原地区4時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 19,042）

- (1) 共通語ヒに対応してヒが用いられるか、シが用いられるか。
- (2) 共通語ソに対応してソが用いられるか、ホが用いられるか。
- (3) 語中・語尾において共通語-k-音に対応してどのような音声が入っているか（-k-か、-g-か）。
- (4) 語頭において、共通語 ki, kj-に対応してどのような音声が入っているか（k-か、c-か）。

茂庭地区 4 時間分（ほぼ文節相当の単位によるカード枚数 18,010）

- (1) 共通語シ・ス・シュに対応してどのような音声が用いられているか。
- (2) 共通語チ・ツ・チュに対応してどのような音声が用いられているか。
- (3) 共通語ジ・ズ・ジュに対応してどのような音声が用いられているか。
- (4) 語中・語尾において共通語 -t- 音に対応してどのような音声が用いられているか。

文法関係においては

- (1) 共通語の「～が」「～けれども」などに対応する逆接の表現がどのように用いられているか。
- (2) 共通語の「～から」「～ので」に対応する理由を表わす順接表現がどのように用いられているか。
- (3) 共通語の「～へ」「～に」に対応する表現がどのように用いられているか。

## 2 社会構造の調査

本年度も前年度に引き続き、記録や各種統計表による概観調査を行なった。すなわち、

通産省の『商業統計表』『工業統計表』

総理府統計局の『住民登録移動年報』『国勢調査報告書』

郵政省の『郵政統計年報』

運輸省の『旅客地域流動調査』『貨物地域流動調査』

文部省の『学校基本調査報告書』

をはじめ、各種の既刊資料により調査を進めた。

## 3 社会構造と語彙およびその用法との関連について

親族語彙を中心として、社会構造と方言語彙との関係をみようとした。本年度は特に同族団関係を重視した。すなわち、(1) どのような同族組織があり、それがどのように社会生活のなかに機能してきたか、あるいは現在、どのように機能しているか、(2) 同族団関係の語彙およびその用法がどのようなものであるか、(3) 上記の(1)と(2)とはどのような関係があるか、を調

査した。これは来年度に継続する作業である。

## E 今後の予定

ひき続き言語使用の実態について調査を進め、一方社会構造とその変動についてもさらに各方面から調査を行ない、両者の関係を追究しようとしている。

(飯豊)



# 現代語の表記法に関する研究

## A 調査の目的・意義

国語の正書法を確立するうえに役立つ基礎資料を得るために、国語の文字・表記法に関する諸問題を調査・研究する。

## B 担 当 者

調査研究の担当者は、斎賀秀夫・土屋信一・野村雅昭の三名であり、菅野裕子が作業を助けた。

## C これまでの作業経過

昭和37年度以降、「現代雑誌九十種の用語用字調査」で得られた資料に基づいて、漢字ならびに表記法に関する調査研究を行ない、その結果は、国研報告22『現代雑誌九十種の用語用字』（第二分冊 漢字表）や『年報』（15～17）などに報告してきた。これらは書かれた文字資料に基づいて表記を分析したものであるが、国語表記についての問題点を明らかにするためには、そのほかに、実際に文字活動をいとなむ読み手および書き手を対象として、その表記の実態や、文字・表記に対する意識・態度についても知る必要がある。この見地から、40年度に、新たに「文字使用の実態調査」を採り上げ、送りがない問題を中心にごく小規模の準備的調査を実施した。41年度は、約180人の被調査者に対して前調査を実施し、調査票の構成や質問形式および分析方法等につき検討したうえで、41年度末から42年度前半にかけて本調査を開始した。

なお、42年度から、上の調査と並行して、「新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究」を採り上げることになった。

## D 本年度の作業

### 1 文字使用の実態調査（継続）

本年度は、当初、(1)調査の実施、(2)集計用プログラムの作成および集計作業の実施、(3)分析、(4)報告書原稿の記述、を予定していたが、(2)の半ばまでしか実行できなかった。これは、調査の終了が遅れたことと、機械処理の段階におけるデータのミスが予想外に多く、その検出と修正に時間を費やしたこととによる。

#### (1) 調査の実施

前年度末に実施した、中学生を対象とした調査に引き続き、四月より八月下旬までに、総計 2,955 人を対象とした本調査を実施した。調査対象は次のとおりである。

A 都内の中学校生徒…………… 北区立稲付中学校・江東区立砂町中学校・東京教育大学  
附属中学校の生徒

B 都内の高等学校生徒…………… 都立赤城台高校・都立志村高校・都立千歳高校・東京教  
育大学附属高校の生徒

C 都内および近県の大学生… 跡見女子大学・東京学芸大学・埼玉大学・聖心女子大学  
・立教大学の学生

D 一般公務員…………… 税務大学校本科研修生・岩手県職員

E 広報・社内報担当者…………… 滋賀県職員・東京都職員・山形県職員の広報担当者、日  
経連社内報セミナー受講者・日本広報協会広報セミナー  
受講者

F 公立小中学校教員…………… 中野区・板橋区・千葉県の小学校教員、北区・江東区・  
千葉県の中学校教員

G 国語学者・研究者…………… 都内および近県の大学教官および国立国語研究所研究員

被調査者の性別および年齢別の内訳は、次のとおりである。

	性 別			年 令 別								合計
	男	女	無記入	12～ 19	20～ 24	25～ 29	30～ 34	35～ 39	40～ 49	50～	無記 入	
A	404	341	2	732	—	—	—	—	—	—	15	747
B	346	262	1	609	—	—	—	—	—	—	—	609
C	109	534	2	316	323	6	—	—	—	—	—	645
D	398	27	1	2	17	46	126	122	81	30	2	426
E	268	27	—	10	41	69	75	50	37	12	1	295
F	95	79	—	—	13	12	24	42	72	11	—	174
G	36	23	—	—	12	8	9	15	9	6	—	59
合計	1293	1656	6	1669	406	141	234	229	199	59	18	2955

調査は、大部分集合調査で行なわれた。D以降の社会人の中には、留め置き調査をした集団も一部分ある。調査は8月下旬に終了した。

## (2) 集計用プログラムの作成および集計作業の実施

この調査で集計する事項は次のとおりである。

- (7)被調査者の構成を調べる。……各調査集団ごとに、年令別・学歴別・経験年数別などの表を作成する。
- (i)被調査者の送りがなに対する関心・知識の程度を調べる。……各調査集団ごとに、設問と年令・学歴・経験年数などとの関係の見られる表を作成する。
- (u)送りがなと個人との関係について調べる。……各調査語の、集団別・年令別・学歴別などの表を作成する。
- (x)書くときと読むときとの表記の関係を調べる。……各調査語における、「書く表記」と「読みにくい表記」との組み合わせの、集団別・年令別・学歴別などの表を作成する。
- (y)関係のある語の相互関係の程度を調べる。……動詞と名詞（「行なう」と「行ない」の類）・単純語と複合語（「晴

れ」と「晴れ着」の類）・類似した語（「養う」と「行なう」, 「現われる」と「表わす」の類）などの組み合わせの, 集団別・年令別・学歴別などの表を作成する。

上記の集計作業を実施するために, 準備段階を含めて, 次のような作業の流れを考えた。

- 1 調査票の内容をカードへ転記。
- 2 調査票とカードの照合。ミスの検出・修正。
- 3 カードを磁気鉛筆でマークする。
- 4 ULP—ML磁気読取穿孔装置で穿孔。（三菱事務機械販売K. K. に依頼）
- 5 穿孔されたカードの内容を磁気テープに入れる。（日立システムエンジニアリングK. K. に依頼）
- 6 磁気テープの内容をラインプリンタで打ち出し, ミスを検出・修正する。
- 7 データを集計しやすい形式に変換する。
- 8 各コラムごとの集計。（ミスの検出と, 大体的見当をつけるため）
- 9 ミスの検出・修正。
- 10 集計プログラム1（縦軸に選択肢（最大8）の組み合わせ, 横軸に年令別を取った表を打ち出す）の作成。
- 11 集計プログラム1の実行。
  - 11.1 学歴・経験年数その他と年令との組み合わせの表の作成。（集計事項(ア)(イ)関係）
  - 11.2 調査語と年令との組み合わせの表の作成。（集計事項(ウ)(エ)(オ)関係）
- 12 結果の分析と検討。
- 13 集計プログラム2（横軸に経験年数を取った表を打ち出す）の作成。
- 14 集計プログラム2の実行。
- 15 結果の分析と検討。

以下, 横軸に学歴その他を取った表を打ち出すプログラムを順次作成・実

行し、集計表を作成する。

以上の作業は、次のように実施された。

1～3 …… 9月上旬までに終了。

4 …… 9月中旬。

5 …… 9月中旬～下旬。

6 ……10月。

7 ……10月下旬完了。

8 ……11月～12月中旬。

9 ……12月下旬～1月。

10 …… 2月上旬完成。

11 …… 3月末日までに 11.1 は終了。 11.2 は(ウ)関係のみ終了。

以上のように、本年度は、各調査項目と年令との関係が見られる表の作成の段階で終わった。

## 2 新聞語彙調査に伴う漢字および表記の研究（新規）

この研究は、第一資料研究室と言語計量調査室が実施している「新聞語彙調査」のうち漢字および表記の調査研究を、本年度より4年計画で行なうものである。語彙調査によって作成されたデータ（磁気テープ）に機械処理を加え、さらに、アウトプットされたデータに人手による処理を施し、各種漢字表・統計表を作成する。そして、その分析記述を行なうというのが、この調査のあらましである。

本年度は、準備的な段階として、電子計算機による処理方法の研究、ならびに、長単位語データによる漢字調査の機械処理システムの設計およびプログラムの作成を行なった。

### (1) 入力データ

語彙調査によって作成された、配列情報書きこみテープを入力データとして用いる。

このテープは、配列情報、出典情報、層別情報を持った、長単位語のデータである。そのほかに、部首理論コードテーブル、代表音テーブルなど

も使用する。

## (2) 機械処理システムの設計

この処理システムは、二つの系列に大別される。一つは、出典情報を重視する系列で、見出し字について、五十音順に配列した、出典表、用例表の作成を目的とする。もう一つは、度数のカウントに主眼をおく系列で、部音順、五十音順、度数順の層別度数つき漢字表を作成しようとするものである。

## (3) 機械処理プログラムの作成

このシステムを構成するプログラムは、次4の種類である。このうち、(i)と(ii)は、ほぼ完成し、(iii)と(iv)は、43年度上半期完成の予定である。

- (i) 見出し漢字抽出プログラム……長単位語から漢字を抜き出し、1字ごとのレコードを作る。
- (ii) 書きこみプログラム……必要とされる情報（部首コード、代表漢字音、度数など）を書きこむ。
- (iii) 度数カウントプログラム……全体、層別の度数をカウントする。
- (iv) 印字処理プログラム……最終データを、ラインプリンターや漢テレで印字する。

## E 今後の予定

- (1) 文字使用の実態調査……集計作業を引き続き進め、43年度上半期中に、経験年数・学歴その他に関する表を作成し、分析・記述を進める予定である。また、その結果は下半期のできるだけ早い時期に報告書原稿としてまとめ、刊行する予定である。
- (2) 新聞の漢字表記調査……43年度は、機械処理プログラムを完成して、本格的な作業に入る。中間データの機械処理およびその試行的分析が、主な内容となろう。さらに、短単位語データによる、表記調査全体の機械処理システムの設計も、43年度中に行なう予定である。

(斎賀)

# 電子計算機による語彙調査

## A 目 的

婦人雑誌，総合雑誌，雑誌九十種と続けてきた現代語の用語の実態調査を，カードによる人為作業から電子計算機による自動処理に移して，データの処理量をふやし，語彙調査の結果を今日的課題の解決に役立つようにすることを目的とする。

## B 担 当 者

第一資料研究室の林四郎（8月16日から第四研究部長に昇任），石綿敏雄（8月16日から第一資料研究室長に昇任），南不二男（43年3月2日から海外出張），田中章夫，松本昭（42年4月1日東京教育大学へ出向），江川清（42年10月16日神戸大学より転任），および言語計量調査の斎藤秀紀，木村繁がこれに当たり，第一資料研究室の沢田さち子（42年8月31日退職），小幡利子，益子芳江，堀江久美子（42年4月1日採用），花井夕起子（42年9月1日採用），言語計量調査室の阿部（旧姓神山）典子，中野三千子，篠田美代子，小高京子（42年7月16日採用）が研究作業を助けた。なお，プログラム作成，機械のオペレートなどの面で，日立電子サービス社から電子計算機の保守員として派遣されている吉崎孝雄氏の助力を得た。

## C これまでの研究経過

昭和38年から電子計算機導入の準備を始め，40年度に漢テレと計算機が設置された（計算機は41年3月設置）。40年度には，語彙調査プログラム開発の準備として漢テレを入出力とする用例つき用語総索引作成のプログラムを作り，これによって芥川竜之介『くもの糸』の用例つき用語総索引を作成した。41年度には新聞用語調査の本作業に取りかかり，調査資料として昭和41

年の新聞3紙朝夕刊1年分をとりあげ、面積1/60のサンプリング、計算機にかけるための前処理、計算機処理プログラムの設計と開発、語彙表の一部のアウトプットを行なった。このうち、資料整備、サンプリング、サンプルの区画指定、長単位による語の分割、層別記入などの作業は41年度中にほぼ完了し、処理プログラムの作成も41年度中に完了した。漢テレによるさん孔は1紙朝刊半年分について行なった。

## D 本年度の調査研究作業

用語調査の進行——用語調査の進め方全般について、はじめに述べておく。

1. 調査資料の準備，入手，整理。
2. サンプリング。
3. サンプル区画指定。
4. 長単位による語の分割。
5. 層別の記入。4種の層別。
6. 漢テレ・打けん作業のためのテキスト作成（清書）。
7. 漢テレによる打けんさん孔。
8. 機械処理プログラムの作成。
9. 同上プログラムによる機械処理。
10. 語彙表（長単位）の作成。漢テレ等による印字，および整理。
11. 中間処理（短単位分割，かなつけ，情報付加）。
12. 語彙表（短単位）作成。
13. 分析。

42年度においては、前年度に1から5までが完了したあとを受けて長単位語分割の検査作業以下の作業について、調査研究の作業を続行している。本年度の主な内容は次の通りである。

6. 漢テレ・打けん作業のためのテキスト作成。

単位分割，層別記入および機械処理用特殊記号の記入の終わったサンプル記事を，漢テレ作業者に見やすいように原稿用紙に転記した。転記作業自体



は本年度中に完了したが、転記作業終了後に行なう、長単位語分割、層別、転記の検査は完了していない。

なお、単位分割、層別記入については次の文献を参照。

田中章夫「国立国語研究所新聞語彙調査における言語単位」情報処理学会 Computational Linguistics 研究委員会 資料68—1, 1968・1・20

林四郎「新聞語彙調査の概略と語彙分析法試案」国研報告31所収。

## 7. 漢テレによる入力データの作成

上記6で作成したテキストにより、漢テレ操作者が打けんし、電子計算機へのインプットデータとなるさん孔紙テープを作成する。この作業には次の三段階がある。(1)まず第一次データを作る。(2)印字シートに校正を施し、タイピストの打けんの誤りを修正する。(3)データを電子計算機にかけ、特定の目的(データ・チェック)で作られたプログラムを通すことによって、漢テレの機械がおかした誤りである、誤さん孔、脱さん孔などを発見し、その誤りを修正打けんして、完全な入力データを作る。この作業のうち、(1)に属する部分を今年度内に改良した。すなわち従来打けんさん孔に際して同時にモニタプリントを行なっていたが、今年度からモニタプリントを切り離して、別に行なうようにした。このために能率の向上がみられた。今年度内では1紙朝刊半年分および1紙夕刊1年分のさん孔を終了し(計47万長単位)、初年度以来合計さん孔量は68万長単位語となった(1紙朝夕刊1年分相当)。

データのチェック・プログラムについては次の文献をみよ。

木村繁「漢テレ・入力データのチェック」国研報告31所収。

## 8. 機械処理プログラム作成。(前年終了)

## 9. 機械処理プログラムによる計算機オペレート、処理。

上記8で作成したプログラムにより1紙朝刊半年分の語彙表を作成した。1紙朝夕刊1年分の計算機処理は本年度中に完了しなかった。

## 10. 語彙表の作成。

上記9の機械処理によって1紙朝刊半年分について次のような語彙表が作成された。

- 五十音順，出典つき語彙表（見出し語→漢テレ，出典→ラインプリンタ）
- 五十音順，層別語彙表（見出し語→漢テレ，層別度数→ラインプリンタ）
- 総度数順語彙表（見出し語→漢テレ，度数・順位→ラインプリンタ）
- 総度数順，層別語彙表（見出し語→漢テレ，層別度数→ラインプリンタ）

## 11. 短単位処理。

上記10で作成した長単位語彙表に対して，短単位語への単位分割，漢字へのよみがなづけ，および語種・品詞・活用形・語構成上の役割などに関する情報を書き添える。今年度には1紙朝刊半年分につきその作業を完了した。この段階は人間作業で，この作業結果をもういちど計算機に入力して処理する。そのプログラムの設計に着手した。

短単位に付加する情報については次の文献を参照。

田中章夫「第2次入力データ(β単位)の付加情報について」『月報』67年7月号。報告書の刊行 昭和43年3月14日の国立国語研究所研究発表会で発表した論文に，それまでに開発したプログラム等に関する論文数編を加えて，『電子計算機による国語研究』と題して報告書を編集刊行した（報告31）。

## E 今後の予定

43年度は，1紙朝夕刊1年分の長単位語の計算機処理を完了し，同じ量について短単位処理（処理プログラムの作成と機械処理）を行ない，中間結果として発表する資料を作成する。

（石綿）

## 国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和42年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞について文献調査を行なった。これらの文献目録はその他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和43年版）に掲載されている。

以下、そのおのおのについて分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。（ ）内に前年の数を示し、今年のものと比較できるようにした。

### A 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月日・型・ページ数、ならびに内容を調べてカード化し、総数 437 冊の分類目録を作成した。

#### 刊行書の分類とその冊数

国語(学)		方言・民俗	27	(20)
国語一般	18	(14)		
国語史	17	(19)	コミュニケーション	
音声・音韻	4	(8)	コミュニケーション一般	8 (5)
文字・表記	14	(10)	言語技術(話し方・書き方)	23 (20)
			情報処理	6 (2)
語彙・用語			マス・コミュニケーション	8 (11)
語彙・用語	8	(9)	国語国字問題	2 (7)
人名・地名	11	(6)	国語教育	
文法	8	(8)	国語教育一般	4 (13)
文章・文体	9	(10)	学習指導一般	15 (14)

語彙・文字教育	2 (8)	特殊辞典	5 (2)
文法教育	2 (1)	索引	11 (6)
聞く・話す	1 (1)	資料	
読む・読書指導	11 (11)	資料	15 (39)
書く・作文指導	10 (5)	史料	17 (41)
文学教育	2 (6)	解題・目録	16 (19)
幼児教育	6 (7)	年鑑	13 (12)
特殊教育	2 (1)	計	382(407)冊
学力調査	2 (15)		
国語教科書・教材研究	15 (8)	追補	
日本語の研究と教育	2 (4)	国語学その他	11 (13)
言語学その他	39 (17)	語彙・文法	9 (4)
辞典・用語集		方言	8 (6)
辞典・用語集一般	1 (1)	国語教育	11 (4)
国語辞典	13 (9)	言語学その他	3 (17)
用語辞典・用語集	15 (12)	辞典・用語集・資料	13 (11)
		総計	437(462)冊

## B 雑誌論文の調査

主として当研究所購入の諸雑誌，ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から，関係論文・記事を調査し，題目・筆者名・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り，分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は2,095点に達した（連載物などについては，前年と同じく，各回ごとに1点と数えることはせず，その題目について1点と数えた）。

### 1 一般刊行雑誌，および大学・研究所等の紀要・報告類の種別数

#### a 一般刊行雑誌（学会誌も含む）……254 (244) 種

国語・国文・言語ほか	97 (90)	総合・週刊誌	1 (1)
方言・民俗	12 (11)	文芸・詩歌・芸能	8 (4)
国語問題	4 (3)	その他（教育・	
国語教育	24 (24)	社会学・心理学ほか）	71 (57)
マス・コミ関係	15 (10)	本年度臨時に	
外国語	9 (10)	はいった雑誌	13 (34)

#### b 大学・研究所等の紀要・報告類……193 (171) 種

## 2 論文・記事の分類とその点数

国 語 (学) 101 (94)

国 語 史

国語史一般 28 (16)

訓点資料関係 20 (24)

音声・音韻

音声・音韻一般 10 (24)

史的研究 7 (15)

アクセント・  
イントネーション 6 (15)

文字・表記

文字・字体 12 (15)

用 字 16 (11)

表 記 26 (34)

語彙・用語

語彙・用語一般 46 (50)

古 語 39 (53)

現代語 27 (18)

新語・流行語 3 (5)

外来語 3 (7)

名づけ 10 (9)

辞書・索引 18 (8)

文 法

文法上の諸問題(現代語法)79 (46)

文法の史的研究 56 (43)

敬語法 33 (33)

文章・文体

文章・表現一般 38 (45)

史的研究 72 (79)

古典の注釈

上 古 9 (8)

中 古 18 (16)

中 世 14 (7)

近世以降 12 (13)

方言・民俗

方言一般 24 (30)

各地の方言

東 部 23 (21)

西 部 39 (38)

九州・沖縄 24 (20)

民 俗 1 (4)

コミュニケーション

コミュニケーション一般 7 (12)

言語生活 25 (19)

言語活動

言語活動一般 23 (5)

書く・読む 25 (9)

話す・聞く 20 (18)

情報処理 33 (21)

マス・コミュニケーション

一般的問題 3 (0)

新 聞 5 (12)

放 送 11 (21)

広告・宣伝 3 (5)

出 版 2 (0)

国 語 問 題

国語問題一般 24 (37)

表記法 13 (11)

当用漢字など 19 (8)

国 語 教 育

国語教育一般 39 (35)

言語能力の発達 14 (10)

国語教育史 9 (13)

学習指導一般 57 (37)

ことばの教育一般 11 (16)

文字・表記教育 16 (27)

語彙教育 9 (7)

文法教育 7 (17)

ローマ字教育 5 (3)

聞く・話す	
聞く・話す一般	14 (16)
話しことば指導	5 (3)
読む・書く	
読む・書く一般	36 (15)
読解指導	33 (56)
読書指導	27 (9)
作文教育	44 (81)
文学教育	21 (19)
古典教育	13 (5)
漢文教育	5 (8)
特殊教育	19 (10)
学力評価	9 (8)
国語教科書・教材研究	28 (33)
日本語の研究と教育	17 (11)
言語学	
言語一般	95 (76)
意味	11 (3)
比較研究	22 (12)
翻訳の問題	6 (7)
外国語研究	29 (44)
外国語教育(学習)	28 (16)
各国の言語問題	17 (12)
資料	
資料一般	18 (13)
国語資料	8 (13)

目録	4 (3)
時評・随筆	32 (44)
書評・紹介	
国語(学)その他	30 (19)
語彙・文法	12 (15)
辞書・索引	5 (16)
文章・文体	10 (2)
方言・民俗	5 (7)
国語教育	12 (7)
言語(学)その他	22 (10)
計	1,831 (1,737)点
追補	
国語(学)その他	38 (5)
音声・音韻	6 (2)
文字・表記	14 (0)
語彙	40 (15)
文法	38 (10)
文体	24 (9)
方言	29 (12)
国語問題	6 (4)
国語教育	9 (2)
日本語の研究と教育	8 (0)
言語(学)その他	52 (5)
総計	2,095 (1,801)点

## C 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜いた。各月ごとに整理・製本し、資料として保存し、閲覧に供している。

切り抜き総数は1,639点で、その内訳は次のとおりである。

### 1 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		※	
		(大阪)	14 (6)
朝日	524 (198)	毎日	135 (118)

(大阪)	— (8)
読 売	258 (129)
(大阪)	1 (18)
東 京	102 (101)
産 経	110 (108)
(大阪)	— (3)
日本経済	80 (51)
▲ 中部日本	42 (42)
西日本	78 (33)

北海道	115 (119)
週刊・その他	
日本読書	30 (53)
読書人	35 (38)
図 書	30 (23)
新聞協会報	23 (24)
教育学術	18 (18)
その他	35 (33)
計	1,639 (1,117)点

※ かっこの中は地方発行のもの。大阪の山田房一氏から、関係記事のあるごとに恵送されたものである。

▲ 中部日本新聞は4月までで購読をやめた（切り抜かれる記事の多くが東京新聞と同一のため）。

## 2 月別の切り抜き点数

1 月	143 (112)	2 月	170 ( 87)	3 月	191 (113)
4 月	127 (100)	5 月	127 (112)	6 月	132 (104)
7 月	119 (104)	8 月	136 ( 83)	9 月	105 ( 68)
10 月	127 ( 89)	11 月	130 ( 79)	12 月	132 ( 66)

## 3 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	119 (110)
音声・音韻	19 (19)
文 字	
文字・表記	13 (11)
活字	3 (6)
語 彙	
語彙一般	304 (42)
各種用語	58 (29)
新語・流行語・隠語	16 (37)
外国語・外来語	25 (33)
辞 書	31 (24)
問題語・命名	89 (23)
地名・人名	71 (30)

文 法	6 (3)
文 体	
文体・表現	10 (12)
方 言	
方言一般	19 (22)
方言と標準語	3 (5)
各地の方言	30 (6)
言語生活	
言語生活一般	61 (16)
ことばの問題	21 (7)
ことばづかいの問題	15 (25)
敬語の問題	22 (19)

<b>言語活動</b>			書く(作文指導)		14 (21)
言語活動一般	8 (1)		文学・古典教育	5 (1)	
話すこと(聞くこと)	47 (14)		特殊教育	15 (18)	
書くこと(読むこと)	6 (4)		視聴覚教育	1 (一)	
読書	10 (9)		ローマ字教	11 (一)	
<b>ことばと機械</b>		31 (30)	学力テスト	6 (2)	
<b>国語問題</b>			幼児語教育	15 (12)	
国語問題一般	35 (38)		<b>言語学</b>		
表記の問題			言語一般	21 (27)	
表記一般	10 (12)		外国語一般	29 (26)	
当用漢字など	77 (30)		比較研究	6 (3)	
かなづかい	8 (3)		翻訳の問題	20 (36)	
送りがな	2 (1)		外国語教育	31 (21)	
かな書き	6 (3)		外国語に関する紹介ほか	4 (6)	
横書き・縦書き	5 (3)		<b>日本語の研究と教育</b>		40 (30)
地名・人名の表記	5 (12)		<b>マス・コミュニケーション</b>		
外来語表記	— (4)		マス・コミ一般	8 (12)	
ローマ字	10 (5)		新聞	4 (3)	
<b>国語教育</b>			放送	18 (21)	
国語教育一般	47 (20)		宣伝・広告	7 (2)	
学習指導の問題			出版	18 (11)	
学習指導一般	3 (5)		<b>書評・紹介ほか</b>		112 (120)
話す(聞く)	4 (2)		計 1,639 (1,117)点		
読む(読書指導)	5 (10)				

上記のごとく、切り抜き点数は昨年よりも500点あまり多かった。新聞の種類別では朝日新聞が特に多かった。これは「江戸ことば」として、代表的な江戸語について、語彙の面から解説されたものが、ほぼ毎日掲載され、切り抜かれたからである。語彙一般の点数が昨年に比べて著しく多いのもそのためである。

各紙の投書欄(ことに読売新聞)に国語問題に関する意見が、例年に比べて多く掲載された。これは、第8期国語審議会の審議経過(漢字・かな両部会の報告など)が総会のたびに報道され、人々の関心をあつめたためかと思



われる。

なお、これら国語関係文献目録の詳細は、他の資料とともに、『国語年鑑』（昭和43年版）に掲載した。

### 〔付〕 所外からの質問について

昭和42年度に電話で受けた質問件数を月別に示すと次のとおりである。

月 計	42年 4月	5月	6月	7月	8月	8月	10月	11月	12月	43年 1月	2月	3月
774	52	61	66	69	72	69	63	65	55	58	72	72

質問の内容は、例年どおり、多方面にわたっていた。用字用語について141件、漢字の読み89件、かなづかい43件、送りがな34件など。さらに今年は、漢字の字体や筆順などに関して57件、敬語の使いかた33件などが、件数の多いものとして目立ったところである。そのほか、当用漢字、文法、外来語・ローマ字の表記、研究所および研究所の刊行物などについての照会なども、例年のとおり質問の多いものだった。電話質問のほかには、はがき・封書による質問が25通、直接研究所に来所され質問した人が10人ほどあった。

以上の質問件数は、すべて質問の係を通ったもので、所員が直接個人的に受けた質問は含んでいない。

### D 担 当 者

この調査および国語年鑑の作業は、主として次のものが担当した。

田原圭子    伊藤菊子    中曾根仁

（田原 中曾根）

## 図書の収集と整理

前年度に引き続いて、研究所における研究活動を遂行するために必要な各種の図書、文献および言語資料を収集、整理、管理した。また、例年のとおり各方面から数多くの寄贈を受けた。これら寄贈者各位の御好意に対して感謝する。

なお、昭和42年度に新しく受け入れた図書資料の数は、次のとおりである。

### 受け入れ総数

	和 書	外国書	計
単行本*	2,126	175	2,301冊
逐次刊行物	543	41	584種
新 聞	8	0	8種

\* 抜き刷りを含む

### 内 訳

#### I 購入図書資料

	和 書	外国書	計
単行本	1,675	141	1,816冊
逐次刊行物	44	25	69種
新 聞	8	0	8種

#### II 寄贈図書資料

	和 書	外国書	計
単行本	451	34	485冊
逐次刊行物	501	14	515種
新 聞	0	0	0

(鈴木元彦)

# 庶務報告

## A 庁舎および経費

### 1 庁舎

所 在	東京都北区稲付西山町	
敷 地		10,030.11 M <sup>2</sup>
建 物		
本 館	鉄筋コンクリート二階建	(延)1,576.54 M <sup>2</sup>
付属建物		(延)1,248.32 M <sup>2</sup>
図書館	鉄筋コンクリート平家建書庫積層(3)	(延)213.81 M <sup>2</sup>
電子計算機室	鉄筋コンクリート平家建	118.94 M <sup>2</sup>

### 2 経 費

昭和42年度予算総額		146,100,000円
	人 件 費	69,873,000円
	事 業 費	76,227,000円
昭和42年度文部省科学研究費補助金		
	総 合 研 究	1,390,000円
	各 個 研 究	120,000円
昭和42年度各所修繕費		2,155,000円
昭和42年度施設整備費（資料庫新営）		2,750,000円

## B 評 議 員 会

会 長	久松 潜一	副会長	有光 次郎
阿部 吉雄	石井 良助	江尻 進	
尾高 邦雄	高津 春繁	佐伯 梅友	
佐々木八郎	沢田 慶輔	永井 健三	

中島 文雄	中村 光夫	西尾 実
西脇順三郎	前田 義徳	松方 三郎
武藤俊之助	山本 有三	渡辺 茂

## C 組 織 と 職 員

### 1 定 員

教官 35    事務官 15    その他 26    計 76

### 2 組織および職員

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩淵悦太郎	
第1研究部	部 長	大石初太郎	43. 3. 31 退 職
話しことば研究室	室 長	宮地 裕	42. 4. 1 大阪大学に配置換え
		上村 幸雄	42. 4. 1 話しことば研究室長に配置換え
		鈴木 重幸	42. 9. 1 主任研究官
		高田 正治	42. 7. 21 話しことば研究室に配置換え
		衛藤 蓉子	
書きことば研究室	室 長	西尾 寅弥	
		宮島 達夫	42. 6. 1 主任研究官
		田原 圭子	
		高木 翠	
地方言語研究室	室 長	野元 菊雄	42. 4. 1 地方言語研究室長に昇任
		徳川 宗賢	
		加藤 正信	
		高田 誠	
		白沢 宏枝	
第2研究部	非 常 勤	W. A. グロータス	
	部 長	興水 実	
	室 長	芦沢 節	
国語教育研究室	室 長	村石 昭三	

	職 名	氏 名	備 考
		根本今朝男	
		天野 清	
		中村 明	42. 4. 1 採 用
		川又瑠璃子	
		福田 昭子	
言語効果研究室	室 長	高橋 太郎	
		大久保 愛	
		屋久 茂子	
第 3 研究部	部 長	見坊 豪紀	42. 4. 1 第 3 研究部長に昇任 43. 3. 31 退 職
近代語研究室	室 長	見坊 豪紀	
		飛田 良文	
		中曾根 仁	
		牧野 正子	
		鈴木美都代	42.12. 1 採 用
第 4 研究部	部 長	林 大	42. 7. 21 文部省初等中等教育局 視学官に配置換え
	"	林 四郎	42. 8. 16 第 4 研究部長に昇任
第 1 資料研究室	室 長	石綿 敏雄	42. 8. 16 第 1 資料研究室長に昇任
		南 不二男	
		田中 章夫	
		松本 昭	42. 4. 1 東京教育大学に出向
		江川 清	42.10.16 神戸大学より転任
		沢田さち子	42. 8. 31 退 職
		小幡 利子	
		益子 芳江	
		堀江久美子	42. 4. 1 採 用
		花井夕起子	42. 9. 1 採 用
第 2 資料研究室	室 長	飯豊 毅一	
		渡辺 友左	

	職 名	氏 名	備 考
第3資料研究室	室 長	伊藤 菊子	旧姓塚田
		東郷はるみ	旧姓河東
		芥川 豊子	42. 8. 31 退 職
		山本 文子	42. 9. 1 採 用
		斎賀 秀夫	
		土屋 信一	
		野村 雅昭	42. 4. 1 採 用
言語計量調査室	室長(併)	菅野 裕子	
		林 四郎	
		斎藤 秀紀	
		木村 繁	
		阿部 典子	旧姓神山
		中野三千子	
		篠田美代子	
庶務部 庶務課	部 長 課 長 課長補佐	小高 京子	42. 7. 16 採 用
		宮沢 武司	43. 3. 31 退 職
		鈴木 元彦	
		伊藤 仲二	
		西山 博	
		岡本 まち	42. 5. 1 庶務課に配置換え
		根岸佐代子	
会計課	課 長 課長補佐	斎藤 恭子	42. 5. 31 退 職
		田島 正幸	
		出牛清次郎	
		三浦 清伍	
		渋谷 正則	
		鈴木 亨	
		筒井 士郎	

	職 名	氏 名	備 考
図書館	館 長	金田 とよ	
		加藤 雅子	
		中村 佐仲	
		船倉 正章	
		安藤信太郎	
		木村 権治	
		岩田 茂男	42. 6. 1 採 用
		見坊 豪紀	42. 8. 16 図書館長を免ずる
		大塚 通子	
		大浪由紀夫	42. 4. 1 採 用

#### D 研究発表会の開催

昭和32年度に、日本言語地図作成のための調査研究を開始し、昭和40年度からその成果を刊行中であるが、それに関する研究発表会を、下記要領により行なった。

日 時 昭和43年1月20日（土）午後1時30分～4時30分

場 所 銀座ガスホール

1. あいさつ 第1研究部長 大石初太郎

2. 「日本言語地図」の方法と意義  
地方言語研究室長 野元 菊雄

3. どんな資料を使ったか  
所 員 加藤 正信

4. ある地図の解釈  
所 員 高田 誠

5. 標準語の地理的背景  
所 員 徳川 宗賢

方言学・言語地理学の専門研究者のほか、文部省等関係官庁、関係各

大学研究室、新聞報道機関等約 150 人が来会された。

## E 内地留学生等の受け入れ

氏 名	勤 務 ・ 職 名	研 究 題 目	研 究 期 間
大田 芳秋	長崎県川棚小学校教諭	教育観の確立と指導力の充実	昭和42. 8. 16から " 8. 25まで
寺崎 幹雄	長崎県志佐小学校教諭	"	"
倉富 忍	長崎県鷹島中学校教諭	"	"
中村 安男	長崎県厳原中学校教諭	"	"
古藤 保雄	長崎県仁位中学校教諭	"	"
吉田 愛子	長崎市立日見中学校教諭	スキル学習について	昭和42. 8. 16から " 8. 22まで
中藪 淳一	富山県西砺波郡福光町立 吉江小学校教諭	国語科の学習改善と、て びき指導について	昭和42. 9. 1から " 10. 31まで
林 登志雄	山口市立白石中学校教諭	中学校における語句・漢 字の指導とその問題点	昭和42. 11. 20から 昭和43. 1. 20まで
島元 鋭	琉球政府文教局指導主事	内地研修	昭和43. 1. 1から " 3. 31まで

## F 日 記 抄

1967. 5. 2 東京都目黒星美学園小学校教諭杉村三枝子氏他 3 名研究所見学
5. 11～12 第38回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議（東京学芸大学で）
5. 22 東京都東横学園女子短期大学専任講師長谷川敏正氏他 3 名研究所見学
5. 26 東京都板橋区立板橋第 3 中学校教諭達山栄子氏研究所見学
6. 8～ 9 文部省主催国立学校および所轄機関庶務部課長会議(国立博物館で)
6. 14 セイロン国文部省視学官アリヤダサ氏研究所見学
6. 18 第64回国立国語研究所評議員会
- 議 事
1. 昭和42年度研究計画について
  2. 昭和43年度概算要求について
  3. 昭和42年度地方研究員について
6. 28 東京女子大学学生杵淵正子氏研究所図書館見学
6. 29 アメリカ・カリフォルニア州ジョン・スウェット高等学校教諭



ロバート・ベック氏研究所見学

7.13 ソビエト・モスクワ州立大学教授アイ・ヴィ・ゴロウニン氏研究所見学

7.27～28 昭昭42年度関東甲信越地区著作権講習会（箱根で）

8.23～24 文部省共済組合事務担当者打合会（松本で）

8.24 宮崎県立延岡工業高等学校教諭藤沢一雄氏研究所見学

9.26 読売新聞社 長沢功氏研究所見学

10. 5～ 6 文部省所轄ならびに 国立大学附置研究所長会議第3部会事務協議会（神戸で）

10. 6～ 7 第39回関東甲信越地区国立大学庶務部課長会議（横浜で）

10.27 東京外国語大学助教授吉沢典男氏他学生16名研究所見学

11.16 東京都墨田区立吾娰第3中学校校長高見沢栄氏他20名研究所見学

11.17 お茶の水女子大学内地留学生内藤秀夫氏他6名研究所見学

11.17～18 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会（日光で）

11.28～29 文部省所轄研究所長会議（奈良で）

11.29 二松学舎大学目時捷三氏他25名研究所見学

12. 5 長野県松本市鎌田中学校教諭小池氏研究所見学

12. 9 早稲田大学教授辻村敏樹氏他14名研究所見学

12.11 第65回国立国語研究所評議員会

議 事

1. 昭和43年度概算要求について

2. 研究事業の中間報告

12.20 創立記念日 記念講演会を開く。 講師 佐伯梅友評議員（研究所大会議室で）

1968. 1.20 国立国語研究所研究発表会（前記D）

3.21 第66回国立国語研究所評議員会

議 事

1. 研究報告

2. 昭和43年度の予算の内示について

昭和44年1月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町  
電話東京(900)3111(代表)

UDC      058 : 495.6  
NDC                      810.5

895

本書の市販品発行所  
東京都新宿区市ヶ谷左内町39 (260)5281  
株式会社 秀英出版

# 国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

1～18

(昭和24年度～昭和41年度)

国立国語研究所報告

- 1 八 丈 島 の 言 語 調 査
- 2 言 語 生 活 の 実 態 (秀英出版刊 ¥300)  
—白河および付近の農村における—
- 3 現 代 語 の 助 詞 ・ 助 動 詞  
—用法と実例—
- 4 婦 人 雑 誌 の 用 語  
—現代語の語彙調査—
- 5 地 域 社 会 の 言 語 生 活 (秀英出版刊 ¥600)  
—鶴岡における実態調査—
- 6 少 年 と 新 聞  
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入 門 期 の 言 語 能 力
- 8 談 話 語 の 実 態
- 9 読 みの 実 験 的 研 究  
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 11 敬 語 と 敬 語 意 識
- 12 総 合 雑 誌 の 用 語 (前 編)  
—現代語の語彙調査—
- 13 総 合 雑 誌 の 用 語 (後 編)  
—現代語の語彙調査—
- 14 中 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 15 明 治 初 期 の 新 聞 の 用 語
- 16 日 本 方 言 の 記 述 的 研 究 (明治図書刊 ¥900)
- 17 高 学 年 の 読 み 書 き 能 力
- 18 話 し こ と ば の 文 型 (1)  
—対話資料による研究—
- 19 総 合 雑 誌 の 用 字
- 20 同 音 語 の 研 究
- 21 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—総記および語彙表—
- 22 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—漢 字 表—
- 23 話 し こ と ば の 文 型 (2)
- 24 横 組 みの 字 形 に 関 する 研 究
- 25 現 代 雑 誌 九 十 種 の 用 語 用 字  
—分 析—
- 26 小 学 生 の 言 語 能 力 の 発 達 (明治図書刊 ¥2,100)
- 27 共 通 語 化 の 過 程
- 28 類 義 語 の 研 究
- 29 戦 後 の 国 民 各 層 の 文 字 生 活
- 30—1 日 本 言 語 地 図 (1)
- 30—2 日 本 言 語 地 図 (2)
- 30—3 日 本 言 語 地 図 (3)
- 31 電 子 計 算 機 に よ る 国 語 研 究
- 32 社 会 構 造 と 言 語 の 関 係 に つ い て の 基 礎 的 研 究(1)  
—親族語彙と社会構造—
- 33 家 庭 に お け る 子 ど も の コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン 意 識

## 国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17~24年)
- 2 語彙調査  
—現代新聞用語の一例—
- 3 送り仮名法資料集
- 4 明治以降国語関係刊行書目 (秀英出版刊 ¥300)
- 5 沖縄語辞典 (大蔵省印刷局刊 ¥2,500)
- 6 分類語彙表 (秀英出版刊 ¥900)

## 国立国語研究所論集

- 1 こ と ば の 研 究
- 2 こ と ば の 研 究 第2集
- 3 こ と ば の 研 究 第3集

## 国語年鑑

- (昭和29年版) (秀英出版刊 ¥450)
- (昭和30年版) (秀英出版刊 ¥600)
- (昭和31年版) (秀英出版刊 ¥450)
- (昭和32年版) (秀英出版刊 ¥480)
- (昭和33年版) (秀英出版刊 ¥480)
- (昭和34年版) (秀英出版刊 ¥500)
- (昭和35年版) (秀英出版刊 ¥550)
- (昭和36年版) (秀英出版刊 ¥800)
- (昭和37年版) (秀英出版刊 ¥500)
- (昭和38年版) (秀英出版刊 ¥950)
- (昭和39年版) (秀英出版刊 ¥980)
- (昭和40年版) (秀英出版刊 ¥1,100)
- (昭和41年版) (秀英出版刊 ¥1,100)
- (昭和42年版) (秀英出版刊 ¥1,100)
- (昭和43年版) (秀英出版刊 ¥1,100)

---

高 校 生 と 新 聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊 ¥280)

青年とマスコミュニケーション 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊 ¥280)

1967 — 1698

ANNUAL REPORT OF THE NATIONAL  
LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE  
CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1967 to March 1968

Study of Modern Japanese Grammar

Research on Meaning and Use of Verbs and Adjectives

Compiling and Publishing the Linguistic Atlas of Japan

Contrastive Study of Dialect Grammars

Study on Mastering of Chinese Characters by Junior High School Pupils

National Survey on Pre-School Children's Language Power

Study on Expressional Function and Communication Effect of Japanese  
Language

Study on Language of the Meizi Period

Statistical Investigation of Newspaper Vocabulary

Analytic Study of Spoken Language Data by computer

Basic Study on the Relation between Language and Social Construction

Study on Writing System of Modern Japanese

Others

General Affairs

**THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE**

**INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO**